
MEMOR'ROOTS

三河あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MEMOR'OOT'S

【Nコード】

N1764J

【作者名】

三河あおい

【あらすじ】

混濁された記憶と閉ざされた過去を持つ少年「桐嶋蓮」、人間を喰らい存在を被る化物「歪」、対峙するは調律者「シオン」・・・これらの運命の糸が解ける度、手にする根底の記憶は『希望』か『絶望』か・・・

i n t r o d u c t i o n

舞台は天美町。

その世界が暗く落ちる中、群集は町並みの灯りに蠢くように足を動かしていた。

今日も正常に世界は廻り、無常に人々は集っていた。

そして、人知れず裏側でも摂理は正常に働いていた。

光のある場所に影がある、表があり裏がある、そんな当然な摂理が・・・

暗がりの路地裏、ただ一人、女性が佇んでいた。その容姿は世辞でも一般的な女性の姿を留めているわけではなく、大よそ西洋的な騎士の格好、闇に浮かぶ銀髪に碧眼の少女。現代的な感じなど酷いくらい皆無だった。

その少女は人通りの多い雑踏ではなく、頼りない灯りだけが微かに点々と点いた人のいない路地裏を黙々と歩いた。少女が足場の水溜りを踏んだ途端だった。

背に差した身の丈ほどの大剣を両手に持ち、ビルの壁に貼りついた闇の中の巨躯なシルエツトに駆け出した。その歪いびつなシルエツトが回避や反撃といった反応を起こす前に、その顔に大剣の鈍い輝きが立った。少女は突き刺した大剣を上に振り上げ、そのシルエツトの顔を裂いてみせた。

点滅した街灯に一瞬映ったそのシルエツトは、人間のそれや動物のそれでもない。小学生が粘土か泥かで造っただろう奇妙な怪物の姿を現していた。

息絶えただろうその怪物は地面に倒れ伏すと、流れた黒い血液だけを残し、その造形は砂になって流れていった。少女はそれを確認

すると、静かに振り返り、路地裏を後にした。

その瞬間。

先のとほ違う、別の怪物が闇に乗じて少女の背後からの奇襲がきた。怪物が持つその腕の鋭利な爪を振り被った時だ。

少女は振り返ることもなく、大剣を逆手に持ち、背後の怪物の側頭部に刃を突き立てた。怪物が運動を止め、痙攣したことを確認すると、大剣を乱暴に引き抜いき、何も起きなかったように大剣の血を振り払い、背に戻した。

「成る程、この町が拠点でしたか・・・」

そして、そのまま少女は町の灯りの零れる通りに足を運んだ。少女は先の踏んだ水溜りをびしゃつと再び無情に踏み歩いた・・・

chapter 0 「・・・でも、俺には無理だよ。」

また、夢を見ていた。朧気なモノだが、そこが遠い異国の、どこかの城内であることだけはなんとなく分かっていった。

そこは古臭い木製の扉の前。それも映画で見た覚えのあるような門を模しただろう作りのものだった。

男はそれに、丁寧にノックする。

扉は人を待つていたのだろう、少しの時間も掛からず内から開かれた。

光の差し込んだ部屋から現われたのは・・・・・・

・・・その夢から覚醒させたの、金属がなにかをぶつけたような甲高い、乾いた音だった。

「ん・・・」

俺はやや秋で冷えた校舎の屋上でおぼろげに目を覚ました。

橙色のかかった校庭では、ボールを打ったときの金属バットの甲高い音と、野次や声援といった人の声がやけに耳に入る。現在授業中、外は体育の授業で野球を行っている。

俺が今屋上に仰向けになって感じている景色はそれらが全てだった。とりあえず身体を起こしぎこちなく伸びをし、ふうつと軽く息を吐いて一言呟いた。

「またアレか・・・」

時々見る得体の知れない奇妙な夢・・・アレがなんなのか、全くというほど変な夢だが、不思議なことあまり悪い気分になれなかつ

た。

「やっぱりここにいたのか」

不意に、聞きなれた男の声が頭上から響いてきた。

ややずれていた左の眼帯を直しながら声の方へ振り返ると、白いニットの帽を被った、僅かに不機嫌を顔に表した男が歩み寄ってきた。

「ああ洋兄ようにい、またサボ・・・」

そこまで口にする、洋兄が手にしていた何かに、突如頭を軽く叩かれた。痛みより驚きが勝り、その目でソレをよく見てみると、クラス名簿である事が確認できた。

「つてて、何するんだよ。洋兄。」

「学校では洋平先生だろ？桐嶋きりしまれん蓮くん？」

桐嶋洋平は名を名乗るなり、いたずらに微笑んだ。

「ていうか洋・平先生。何で俺がここに居るつて？」

「昔から、お前はよく学校で一人でいたい時、人が滅多に来ない場所に来てたからな多かつたからな。今では屋上だと思って名な。」

どうだ、名推理だろ？」

「・・・なんだそれ。ようするにただの勘だろ」

「暦わつきとした推理だつーの！・・・ところだな蓮。」

洋兄は一瞬前の柔らかい表情から一転して、真剣な表情になった。その表情に変わったからか、目を逃がした。俺にとっては、いつもの聞き慣れた会話が始まる事が容易に想像できたからだろう。

「お前、また授業をサボったんだろ？」

「そりゃそうだ。だから俺は此処に・・・」

「そういう事じゃない。今外でやってる体育はお前のクラスなの？それに、未だにクラスで行う行事や団体での授業はいないらしいが・・・もう事故から随分経ったんだろ？」

俺は何を言うわけでも、動くわけでもなく、ただ黙っていた。変わらず、後方のフェンスに目を逃がしたまま口を開いた。

「・・・洋兄、一つ語弊。確かに俺は昔から学園祭だの運動会だの

遠足だの、学園行事だクラス行事には参加していない。ある程度の記憶が俺にはほとんど無いけど、覚えてる限り授業とかはちゃんと参加してるよ。」

「ああ分かってる。だけど・・・お前それでいいのか？」
思わず溜息を小さく吐いた。面倒くさくなつて洋平から完全に目を離してフェンスまで足を運んだ。

全てがはっきり見えるわけではないが、クラスの表情はとても明るく楽しそうだ。汗と土の汚れに塗れて^{まみ}いるのに関わらず、友達と笑い合う人、バッターに声援を送る人、行動はそれぞれなのに、それはまるで一つの生き物のように合わさっていた。

俺はただ、静かにグラウンドを眺めていた。

「あれから、七年も経つたんだ。俺は・・・」
「洋兄には悪いけど、俺には無理だよ。俺は他人^{だれか}と関わると、どうしても殺してしまう死神だから・・・」

振り返る事無く、蓮は屋上を後にした。洋兄が呼び止めようとしたのが分かったのか、

「教室に戻るだけだよ。」

と一言言つて、屋上の扉を無情に閉めた。

洋兄はあの性格だから、まったくの善い人であり、生徒や同職の教員からの人望も厚い。が、俺にとってその優しさは、時折目障りに感じた。

「・・・ホームルームくらいは受けないな」

階段をゆっくり降りながら、次の行動に足を動かした。

「ねえ。この後ヒマ？」

授業の終了を告げる鐘が鳴って数分後、何も罪悪感もなく、教室の戸を開いた。

一部の視線を無視しつつ、教室の後ろの扉から入り、古びた席に腰を掛けた。

そこはいつもの、窓際の列の後ろから二つ目席に椅子にゆっくり座り、ロウソクの灯火の色に染まり始めた夕空を静かに眺めているときだった。

「だあれだ？」

その声の主は座っている俺の両目を手で覆い、イタズラに笑って言った。

正直、その行為には確実に怒りを覚えるが、同時に呆れてしまい、どうでもよくなった。

「平沢理恵、だろ？何かと思つたら、小学生みたいな事して・・・」

「別にいいじゃない、減るもんじゃないし。それに汗臭い呼び方ね。一応、小学校からの付き合いいじゃないの」

「汗臭いじゃなくて水臭い、な。」

手を腰の位置に当てて誇らしげに話していた平沢だったが、むしろ冷静に指摘されてせいか、そつと横を向いて目を逸らし、眼鏡を直した。

それから、平沢は一つ咳き込んだ。

「ね、ねえ。この後ヒマ？」

「『いや暇じゃない。これから買い出しがある』。」

てきとうに嘘を吐いて誤魔化した。机の中に入った教科書を取り出し、単純作業を行うみたいに鞆に集めた。

「そうなんだ。実は同じ用事の友達がいるからさ、一緒に行つてくれないかと思つて」

すっかりアテが外れてしまった。多分俺は眉をしかめたと思う。だが、それが表に出る前に机に顔を戻した。

「・・・誰？」

「ほら、香川渚^{かがわなほな}。彼女は知ってるでしょ？」

「まあ他人じゃない程度、てくらいだが」

事実、香川との面識は薄く、遠巻きの話やら平沢からの話で人物像はある程度把握しているもの、実際に本人との会話はほとんど記憶に無かつた。

「でさ、渚がこの後買物があるつて言うから、できれば付き合つてほしくてさ。私も行こうとしたけど、この後部活があるしさ。

二人だけど、お願いしていいかな」

「なんだつて俺がそんなこと。別に俺じゃなくても・・・」

「この通り！ね？頼まれていい？」

平沢は切実に手を合わせた頼み込んだ。はあ、と軽く溜め息を吐いた

「・・・正門で待つとく、て言つて置いてくれ。」

「了解です、つと。」

「じゃ先にな」

「え？でもまだホームルーム・・・」

「そんなの別にいいよ。じゃあな」

学生鞆を肩に掛け、蓮はゆっくり立ち上がつて教室を出て行つた。

蓮が教室から出て行き、理恵は静かにその机に目を向けた。

「・・・なんで・・・なんであんなはそうだったのよ・・・」

話ぐらい聞いてやりたいだけなのに・・・許してほしいだけなのに・・・

途端に表情を暗くし、平沢は誰にも聞かれない位小さく呟いた。それは懺悔のように映つた。

「桐嶋くん。」

ホームルームも終わったらしく、多くの生徒が正門に背を預ける蓮を次々と横切っていった。

その群集の中、柔らかな香川の声が駆け寄ってきた。

「さて行くか」

駆ける香川の姿を確認した後、すぐさま校舎に背を向け外へ歩き出した。

後ろからの呼ぶ声を無視して歩いてしたが、それが故意なのか無意識なのか、気付かれない程度に歩幅を緩めていた。背後に聞こえてきたのは体力の切れた荒れた息遣いだった。

気がつけば、俺は足を止めていた。

「はぁ……はぁ……桐嶋君って意外と歩くの速いんですね……」

「……別にそうでもないさ」

後ろにいる渚を見ないまま言葉を冷たく返した。

「ちよつと、大丈夫なの渚？」

「……うん、大丈夫」

香川はそう言っているが、まだ体力が戻ったような表情をしてはいなかった。隣に付いたのは、香川の友達の高梨葵たかなしあおいだった。余談だが、香川同様、葵との間柄も厚いわけではないが、香川と高梨は性格は異なるが仲が良さそうに見える。

「桐嶋も少しは待ってあげたら？ 渚はあまり体力は無いんだから」

「分かってるよ。『ただの冗談だから気にするなよ』。それより、

『今日は早く帰らないといけないから、さっさと買い出しを済ませよう。』」

俺は二人に否応言わず、前を歩き出した。

「ねえ。この後ヒマ？」 (後書き)

桐嶋 蓮「きりしま れん」 (15)

髪、瞳の色：黒

特技：家事全般

好きな色：青

(あくまで) 声優のイメージ：「保志総一郎」

「いいから！早く逃げよう！！」

天美町は案外広い町になっているから、基本的に通らない場所の方が多いが、高梨の家が近いから、ということ、俺があまり通らない商店街、その中の小さなスーパーで無意味な買い出しをしていた。

そこは想像より人が多く、賑やかすぎて慣れない空気だが、値段がそんなに高くは無かったのが結構良い。

折角だから、明日の分を調達するの考えに至った

途中で気づいたが、高梨がはぐれたらしく、香川と買い出しをしていた。こんな人ごみだ。気を抜いたらすぐに迷い子になりかねないのは確かだった。

「桐嶋君、少し見てみていい？」

「ん、ああ」

香川は俺の目の前に袋の許容量が危ういもやしを差し出した。

「コレ、意外と安い。買った方が良いのかな？」

正直、意見を求められても興味がなかったから心底どうでもよかった。

「が、俺も買出しがあるって嘘を言ってしまった以上、適当な物を買った方が良さそうだな。」

「それいくら？」

「大特価の22円みたい。しかもコレ500グラムって。」

「・・・それ、買った方が良いんじゃない？せつかくだから俺も買うか・・・」

香川のもう片手に同じパッケージの袋が握られていた。

「はい。一応持っていましたから」

香川は柔らかな笑み、そのもやしの袋を差し出した。

「・・・すまないな。」

そう言つとどうかしたのか、香川は恥ずかしそうに下を向いた。気になり、その方向に眼を向けたが特に何も無く、スニーカーの靴紐が解けていた。

「つと」

そんなことだったのか、言えば助かったのに。

紐を結ぶ間も、香川は何を言うでも無く、静かに待っていた。

結び終えて立ち上がったも、まだ顔を上げてはいなかった。

「・・・大丈夫か？よく見ると顔が少し赤いけど」

一応声をかけるが、

「え？ちよ、な、ぱっ」

奇妙な声を上げながら、突然逃げ去っていった。

なんだ、今の？

「はあっ。渚がいつか報われてくれればいいんだけど・・・」

隣で高梨はどこか心配そうに呟くが、正直言っている意味がよく分からないから、聞かなかつた事にした。

あれから約一時間、買い出しも搜索も終わり、商店街を歩きながら思った。

・・・疲れた。率直に思う。

「随分買っちゃったな、ふふふっ」

「渚って意外にたくさん食べるのね。」

と香川は控えめに小さく笑っていた。

余程機嫌が良いのだろう、買い出しの手荷物と学生鞆を振り回すように手を振って、前を歩いていた。

はつきり言っておとなしいイメージがありはしたが、やはり空想と現実というものは異なるものだ。

実際は積極的に話し掛けてきたり、俺の前を歩く程速かったり、ある程度違っていた。

「今日は高梨さんに来てもらって助かりました。」

「といっても私何もしてないけどね。正直、買い出しよりアンタ

ら二人を見る方が楽しかったし。」

「ちよつと高梨さん！」

冗談だつて、と高梨は物珍しげに俺と香川を交互に眺めた。

「・・・ん、桐嶋君も買うもの多かつたんですね。それも特に野菜類が。」

「洋兄は肉を摂りすぎだからな。無理矢理でもこうしないと好き嫌いが増えるからな」

予定より多くの材料をを学生鞆に詰めていた。

距離を空けてわざと遅く歩いてみせたが、気付いた香川は振り返つて少し立ち止まった。

「ごめんなさい。歩くの、少し速かったですか？」

「『いや、別に』」

律儀なことに、俺が並ぶまで笑顔で待っていた。

隣に合わさると、香川は、俺と高梨に合わせるようにゆっくり歩き出した。

「そういえば、渚と桐嶋つて小学からの付き合いなんですよ？なんでそんな他人行儀なのよ？」

高梨の一言で場は静寂を得て、香川は申し訳なさそうに俯いた。だが、身に覚えが有ると言えば有るが

、無いと言えは無い。曖昧な意見を述べてるわけではなく、事実、そうとしか言いようがない。

「なんでかな。昔に事故があつたからよく覚えてないけど、少なくとも、自分がそうしたいからそうする、それだけさ」

高梨は訝しげに頭を傾けた。

「桐嶋が何を言ってるかよく分からんが、昔の事故つてのが気になるな。」

「別に大した事じゃない。衝突事故で入院して記憶が混濁している、ただそれだけさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は歩幅を広げ距離を離し、それから口を閉ざした。

香川も高梨も、それ以上の口を開けられないのが一目で分かった。商店街の騒がしい空気より、間に流れる沈黙と足音の方がやけにうるさく聞こえた。

「……つき、桐嶋君は……今晚、何つくるの？」

空気の影響からだろう。香川さんは歯切れの悪い口調で話し掛けた。

「……『ウチは今日カレー』。でもつくるの俺だから大変だよ。」

「へえ。桐嶋君って、家庭的なんですね。」

「というより、洋兄があまりに不器用だからそうなるしかないんだけどね。」

「ようにい？桐嶋って兄貴いるんだ。」

「ほら桐嶋洋平先生のこと。桐嶋君も私も理恵ちゃんの三人だけ、学校以外ならそう呼ぶよう強制されてるんです。さすがに知らなかったですよね？」

高梨の手から買い物袋が落とされそうな程、呆然としていた。その事情を知らない人間がこの話を聞くと、今の高梨とほとんど変わらない表情を浮かべる。

「……へえ知らなかった。洋平先生がお兄さんかあ……ああ、ウチもそうだったらいいになあ……」

いいなあ、と高梨は悔やんでいた。余程驚いたのだろう、高梨はへえ、という言葉を一、三度口にした。

「……」

ドサツ、と隣にいた高梨が突然、つまずいた。いや正確に言うなら、最初に膝を着け、うつ伏せに倒れこんだ。

「……え？」

まるで、背後から誰かに大きな刃物で斬られたように……香川は小さく、自然に声を漏らした。それはあまりに突然、あまりに唐突だった。

うつ伏せになった高梨の身体から流れる赤い沼……その凶器は袈裟気味に深く抉られ、左腕が離れたもの、首と胴が繋がり原

型があるもの、息をしていないのは明らかだった。

「あ……つつ、ああ……」

香川は事態に理解が追いついていないのか、手を口にあてたまま、動く気配が無かった。俺はとっさに香川の腕を掴み、強引に引く張った。

「くそー!!」

すると、今香川の立っている場所が、何か爆発したように道路が弾けた。

さっきの凶器、今の爆発の正体は「化物」だった。その輪郭は表
現の使用がなく歪み、頭と腕と脚が大雑把にある、微かに生物の容
を成した「化物」だった。更に、その手にはかなり鋭利な爪があり、
さっきの爆発もこの化物による一振りによるものだった。

更に問題を挙げるなら……

「いいから！早く逃げよう!!」

恐怖で歯を鳴らしたまま、香川は引く張られていった。

この化物の姿は、香川には見えていなかった。

いや、俺以外が見えていなかった。

何故なのか俺には昔からはつきり視ていた。

あまりに突然の事態に、追いつかれないようにただ走りつづけた。

「いいから！早く逃げよう！！」 (後書き)

桐嶋 洋平 「きりしま ようへい」 (27)

髪、瞳の色：黒 眼鏡

特技：テレビで鍛えたチヨーク投げ

弱点：彼女募集中

(あくまで)声優のイメージ 「子安武人」

「七本、か」

最近、天美町で起きる正体不明の連続通り魔の話。

話では、通り魔は大型の凶器を所有し、年齢性別を問わず惨殺を行う、といった話だ。しかし、傷跡から人間の仕業ではないことから、特定が難しいから、なるべく早い時間の帰宅を望まれている。それが、学校やら家やらでよく、この町の話題だ。

しかし、信じられないだろう。いや信じられるわけがない。その正体が、粘土細工のような不細工な造形の化物だなんて。俺がそうなら絶対信じない。

幽霊が見えない人間は見える人間の心理を知らない。そんなものだ。

ただ今、幸いなのが、香川に「糸」が伸びていない、それくらいだ。

俺たちは駆けた。群集ひとなみを掻き分けながら、ただ必死に……

「……桐嶋君どこに行くんですか？ここって人が……」

「……いや、これでいいんだ」

どれくらい走っただろう、気づけば空は落ち、青にも見える白い月が浮かんでいた。人気ひとけの少ない公園に辿り着き、息を整えながら深く座り込んだ。

わざわざ人のいない場所に来たのには理由がある。ここなら最低限死ぬ人間が増えないと確信したからだ。

記憶は曖昧だが、以前から化物に襲われていたから多少なりのアレの正体は掴めている。

アレは、主に夜行性らしく、その鋭い爪で人をティッシュペーパーのように簡単に切り裂き、あるいは人間を「食べる」ことをした

りもする、残忍な『なにか』だった。

「はあ・・・はあ・・・大丈夫、なのかな、高梨さん」

月の光からか、香川の顔が恐ろしく白く映った。多分香川自身はなんとなく気付いているかもしれない・・・

「いや、あいつは助からない。見ただろう」

「うっ・・・どうして、こんな・・・こんな・・・」

もう抑えられないらしく、香川はうつ伏せに倒し、涙を流した。それを待たず、アイツらは数を増やして堂々と後方に立っている。隠れる気は無いらしいが、隠れたところで見つけるのは簡単だ。俺の身体から伸びる白く、奇妙な糸が示してくれる。

「七本、か」

アレが七匹、いや七体か？

とにかく、この数に襲われるは初めてだ・・・などと考えたら、一本の糸が急速に動き出した。

来る・・・！

もう逃げる事が出来ない事を悟り、俺は近くに落ちていた鉄パイプを拾って身構えた。

幾度と襲われてるものの、慣れる筈もなく、握る鉄は上下左右に震えて、定めることが出来なかった。

そして化物は一斉に襲い掛かってきた。

が、対抗の術がある筈もなく、武器パイプを使う事無く、化物たちの斧のような攻撃を必死でかわすことで一杯だった。

しかし、俺を横切り、化物は香川に向かっていった。

当然、香川の目には俺の一連の行動の意味を少しも理解出来ない筈もなく、自分が今狙われてる事実を視えていなかった。

「クッソ！！」

俺も向きを変え、香川の方へ駆け出した。幸い化物の動きさいわ自体は人間離れしているわけでなく、すぐに追いついた。

身を投げ飛び出したのと、化物の獰猛な一撃、それはほぼ同時だった。

「っ……うぐつつ……！」

なんとか香川は庇えたものの、化物の爪は確実に俺を捕らえていた。といつても、高梨に比べれば遙かにマシだが、背中を随分挟られ重傷であることに違いは無い。

「桐嶋君！血、背中に血が……」

「俺はいいから行け……」

「でも……」

「いいからさっさと逃げろ！死にたいのか！！」

香川は目を拭って不安定ながらも立ち上がった。そして声をかけることなく、公園を駆け出していった。一体の化物が香川を狙うが、俺は手にした鉄パイプをその化物に放り、殴打させた。が、化物は予想通り、少しのダメージも無く、こちらに振り返った。

「……は。やっぱそうなるよな……」

化物は獰猛な獣の雄叫びを揚げ、威勢良くこつちに向かってきた。背中を挟られ重傷を負った人間と、迫り来る七体の化物。

どちらがどうなるか。結果は日を見るより明らか、といったところか。

武器を拾うにも化物の後ろ、万が一の確率の生還はこれで更に低くなった。元々、昔から低い確率に買ってきた俺だから、ここでもう運が尽きた、と言われたらそれは自然な話だ。

これは走馬灯、というヤツなのか。頭に映し出されたのは、香川の控えめな笑顔、自信に満ち溢れた平沢の表情、そして、洋兄の声だけ……

自分でも驚いた。そして気づいた。

人は決定的な絶望に遭遇した時、涙を流すのではなく、笑みを溢すものだと。

「……冴えない冗談だ」

不意に空を見上げた。今日の蒼白い満月は綺麗だな、と場違いな感想が頭を通った。

恐怖を感じる前に、化物の爪が胸を振り抜いた……

「七本、か」（後書き）

平沢 理恵 「ひらさわ りえ」 （16）

髪、瞳の色：黒 眼鏡

特技：暗算

こだわり：飯を食うならまず白米から！

（あくまで）声優のイメージ：「平野綾」

「お前は・・・？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

痛え・・・・・・・・

死を覚悟したが、不思議なことに俺は生きていた。

確かに化物の一撃は直撃した筈だった。

とはいえ、致命傷は避けたが胸に大分深く怪我を負ってしまったている。常人ならショック死とかでとつくに死んでいるかもしれないが、未だに意識がある自分に少し驚いている。もう少し言うならば、傷事態が深いから、朦朧としている意識の線を辛うじて繋ぎ止めていると言ったところか。

グオオオオオオオオオオ！

猛獣の叫びのような轟音が鳴り響きだした。

力無く落ちた俺の身体は床に尻餅を着き、今度こそ死を覚悟した。しかし、あることに気づいた。化物の腕が欠けている。思ったと同時に、それは化物の目前に降って来た。

化物は再び雄叫びを揚げた。ということは、今のは叫びではなく悲鳴なのか？

でも一体、何が？

分からない。何故腕がそこに？・切られた？何に？誰に・・・

ガシャッ

鉄の音を纏った『何か』が俺の目前に降り立った。

朦朧とした視界けしきにはそれが少なくとも人の形を保っている事しか確認できなかった。

徐々に蒼白の月に照らし出された容姿に意識が引き寄せられた。

それは、背中まである括くられ月光に照らされた銀の髪、宝石のように綺麗な碧眼、華奢な体軀に合わない身の丈程の巨大な大剣を持

ち、騎士を思わせる西洋的な白い鎧を纏い、思わず見惚れる程美しい少女だった。

「お前は・・・？」

「静かに。少々退がって下さい。」

それは涼やかで静かな風の音だった。酷く冷静な声だがどこか落ち着いてしまふ、妙な感じだった。

「退がるものにも、さつさとこの化物を・・・」

「化物？貴方、歪イレッツが視えるのですか？」

少女は途端に俺を横目で見た。

俺との会話で意識が外れているその隙に、一体の化物が彼女の背後から爪を振り抜いた。

が、その大剣によつて、化物の攻撃を防ぎきっていた。

「一先ず、話の委細いさいは後程のちほど聞かせてもらいます。」

そう言つて一呼吸をいれた刹那、少女は不意を打つた化物の腕と脚を瞬時に切り払つていた。

その速さは、文字通り目にも止まる事は無かった。

一瞬で一体を倒すと、白い風は化物の中心で吹き荒れた。

到底、人には何が起きてるかなど理解することは不可能だろう。少なくとも、俺にそう見えるからそうなのかもしれない。アレは人間じゃない。それくらい、容易に理解できた。

少しも目で追えてはいない。

が、少女の一挙一動から、鈍く光る大剣から、目が離せない。

少女を中心に喻えるなら、蒼白の月光が照らすこの公園は舞踏場であり、無表情で踊る少女は悦を感じない姫、化物は姫の怒りに触れ処刑される壁のシミ、という感じだった。

姫が拒む度、両断される者たち。辺りに飛ぶ黒い血の飛沫しぶき。

それが、言いよつた程美しく映つた。

おかしいと思われても構わない。俺が見ているその景色はそれほどの何かを感じるのだ。

俺の目はその少女一点しか見えなかった。

グウゴアアアア!!!

その中、一体を倒し損ねたらしく辛うじて生きていた。

その化物は、背後から悪足掻きの一振りを少女に向けるが、俺は少しの不安も感じなかった。むしろ、化物を哀れんだ。

相手が悪かった、と。

「遅い！」

少女は身を翻し身体を回転させながら、大剣を横振りに奔らせた。上下に分かれた化物の身体はまた地面に重々しく落ちていった。

そして斬り落とされた化物の肉片たちは砂になり、黒い血痕だけを残り消え去ってしまった。

黒く塗れた大剣を一つ振り払い、少女はそれを背中に戻した。

さつきまでの緊張感は無くなり、さつきまでの元の夜の公園の静けさを取り戻していた。

「た、助かった……の、か……」

落ちて着いたせいか傷の影響か、頭も働かない。眼も霞んできた……

微かな意識の中、少女は俺を静観し足を向かわせた。

何をされるかは知らないが、どうしようも無いと思う。意識も無

くなってきたな……でも、アレに喰われる……よりはマシ……な、死に方だろう……

……洋兄、ゴメン……

……今晚の飯……無理……みた……い……

……

そこまで考えて、俺の意識は完全に途絶えていった。

ブツン……

「お前は・・・？」（後書き）

香川 渚「かがわ なぎさ」 （16）

髪、瞳の色：茶

特技：料理

苦手：早口言葉

（あくまで）声優のイメージ：「かないみか」

「いや、信じるよ。」

ああ、これも走馬灯なんだろう。そうじゃなければ、俺の知らない夢が流れる筈が無い。

意識が覚め、最初に見えたのはコンクリートの天井だった。殺伐とした室内の空気とは相まって外は鳥の囀り、花の色、なんとなく羨ましくなる風景だった。

俺はこの光景に覚えが無い。いや、もしくは抜け落ちているだけで、実際に有ったのかもしれない。誰とも言えない、客観的な視線で、空ろにベッドで身体を起こした自分を見ていた。その自分が何をしたかと言うと、

「蓮くん、バカな事は止めてちょうだい！」

手にした果物ナイフの刃を自分の左目に押し込もうとするが、数人の看護師に抑えられている、奇妙な現場だった。看護師に取り上げられた果物ナイフを彼は光の無い瞳で見つめるだけだった。それからはなんの感情も見えない。

「つたく、気味が悪いわ。何考えているか分からないし・・・」

「噂じゃ、あの子そろそろ施設を移すって言うんでしょ？」

「はあ助かるわ。正直限界だったのよね、あの子の面倒見るの。」
その会話は病室の外から十分に聞こえる大きさだった。

思い出した。

事故直後の俺は精神状態が不安定になっている診断され、友達からの面会も謝絶され、特別な病棟に移されていた。けど、その当時不安定だったのは事故そのものが原因だからでは無い。

事故にあつてから視えるようになった、モノというモノに記されるようになった奇妙な線。

壁、床、天井、人、外の木、鳥。目に映るモノ全てにその線が現

れるようになった。その線は、なんだが見ていて気分が悪く、本当に吐き気がした。

だから俺は、それがイヤで左目を潰そうとするが、その度に止められては恨むように看護師を見つめるだけだった。それから眼帯で誤魔化すように着けた。

ある静かな夜だった。

看護師意外の誰が来るでもなく、かといって何か起きるわけもなく、空虚なだけの時間を持って余っていた俺は、ただ空を眺めていた。理由は無い。ただ見ている、それだけだ。

そんな時だ。

「どうしたんだい？そんな空虚な瞳をして」

予期せぬ声に驚き、俺は病室の扉に振り返った。そこには、全く見覚えのない男が佇んでいた。

妙なことに、その男の顔がどうしても思い出せない。

「きみの色んな話を耳にしたよ。糸が視えるって？」

「『ううん。おじさん、あんな作り話信じるの？』」

「いや、信じるよ。」

男は少しの迷いも見せず即答した。あまりに予想外で、俺には返す言葉が見つからなかった。そして男は言葉を紡いだ。

「少なからず世界は光があつて闇がある。聖があつて魔がある。

きみはその後者が視覚として感じとれるだけなんだ。運が無かったと言えばそれまでだが、それではあまりに不憫な境遇だ。僕の言っていること、分かるかな？」

首を横に振った。その言葉は当時の俺にはあまりに理解ができない内容だ。

男は、ふふっそうか、と軽く笑うだけだった。

「では、きみは正義の味方というものには憧れはないかな？」

また横に振った。

「そうか・・きみには彼のようになれとは言わない。けど、これだけは覚えていてほしい。きみは強い人間だろうと思う。だから他人を頼ってほしい。そして自分を勘定に入れてもらいたい。それだけだ。」

男は暖かく言って部屋に背を向けた。

「待っておじさん」

男は扉を開いたまま、動きを止めた。

「おじさん、名前は？」

男は振り、優しく暖かい声が俺に向けられた。

「僕はおじさんじゃないよ。僕は、エミ・・キ・・ツ・・」

「私は「シオン・ストライト」。調律者です。」

・・・アレはやっぱり夢だったらしい。

・・・てことは、俺は生きているのか。

朦朧としながらも、眼を次第に開けると、俺は重々しい鎧を被せられ、横になっていた。

「・・・重、くはないな、意外と」

「気が付きましたか。もう少し休まれた方がよろしいかと」

足元に佇むのは、さっき俺を助けた少女だった。少女がただの黒い衣姿のところを見て、俺のかぶっている鎧が少女のそれだと理解した。

意識がはつきりして、化物の傷が塞がっている事にやっと気が付いた。

「一体、何が・・・」

「貴方の思うとおりそれはただの頑強な鎧ではありません。身にするだけで傷を癒す武装です。しかし、もう完治されているとは驚きですね。」

少女に言われ胸の傷を見るが、深いと思っていた傷は既に塞がれていた。俺が思っていたより軽かったのだろうか。

少女は被せた鎧を拾い、再び纏い言った

「立ち話もなんです。歩きながらも話しましょう。」

「紹介が遅れました。わたしは「シオン・ストライト」。調律者です。貴方は？」

「・・・桐嶋蓮」

「キリシマ、レン、ですか・・・」

律儀にも、シオンと名乗る少女は初対面の俺に少しの抵抗も見せ

ず自己紹介をした。

ていうか、今聞きなれない妙単語が自然に現れたような・

「では。何処まで知ってます？「調律者」や「歪」に関して事柄については。」

「俺が知るわけないだろ。一通り全部教えてくれると助かるんだが・・・」

調律者だのイビツだの、意味が分からない。ただ、イビツってのは確かさつき・・・

「そうですね・・・では。貴方が「化物」と呼んでいたモノ、あれが歪イビツと呼ばれる存在です。そしてわたし、それらを排除する「調律者」という存ぞぎ」

「おい待て！」

唐突に分からない単語があまりに多すぎる。

シオンの話を黙って聞いてたら、ほとんど理解できないまま話が進みそうな気がする。

「悪いが、一気に言われてもよく分からない。一つ一つ、誰に聞いても理解できるように話してくれ。」

なんでコイツは、そんなに驚いた表情をするのだろう。

俺が既に知っていると思っていたからなのか？

「それは失礼しました。順を追って説明しましょう。」

意外なことに、シオンは微かに笑んだ。なんとなく、さつきまで化物を切り伏せたシオンが、年相応の女の子のそれなのだと、今気づいた。

「歪は、名の通り歪みなのです。」

「歪み？」

「そう。アレは人間を喰らうことで、その存在を得ようとすると不規則な存在です。」

「存在を得るって、どういう・・・」

突然、シオンの言葉の意味が分からなくなった。あまりに突ツ飛ツぎツて・・・

「勿論生存はしています。しかし認識されることがないので。歪は吸血鬼や精霊、幻想種の類でもないし、見ての通り人間でもない。故に中途半端な在り方をしている。」

「話が読めないな。曖昧あやふやな存在の化物がどんな過程で存在を手にするんだ？」

レンの疑問は尤もです。仮に、万一にわたしが喰われることで、その歪がどのような姿で立ち振る舞おうが、世界で誰が見てもそれは「シオン・ストライト」という存在として世界に認識されるのです。故に、少なくとも存在を得る前のアレらを確認するなど、人には不可能なのです。要は飽くまで殺されるのではなく喰われる、という方法で認識を得るということですが、理解はできましたか？」
分かったような、分かってないような・・・とにかく、頭が痛いだけだ。

シオンの言葉では理解が難しいと諦め、俺は自分なりに解釈をすることで納得することにした。

「・・・宇宙人が俺の身体を乗っ取るって感じで理解しても？」

「ふむ、遠くはない表現ですね。」

表現は少なからず間違いではないらしい。だが、

「それと、もう一つ、「調律者」ってなんなんだ？」

「私は歪を歪みと表現しましたが、比喻ではなく正にそうなのです。人間を喰らって存在を得ても、それは不完全な個人として認識されます。それらが「歪み」となって世界に悪影響を与えます。調律者とは世界の安定のため、歪を排除する者たちの総称です。」

今度は結構理解しやすかった。つまりところ、調律者は味方ってことか。

「・・・世界に悪影響って、そうなるかどうか？」

「知識でしかありませんが、抑止力が働く事でヒト、もしくは人の存続の為に世界のどちらかが消滅される、と聞きます。」

「・・・は？」

話が漠然としすぎて、全然現実味が沸かない

・・・聞くんじゃないかな。少しの沈黙の後、

「心配は不要です。敵の排除がわたしの役目ですから、貴方は普段通り過ごして頂ければよろしいので。では二度と逢うこともないでしょう。さよなら。」

珍しいものでも見つけたような、不敵な眼と僅かな笑顔を一瞬みせて、白い光は闇夜に姿を消して行った。

「なんなんだ今の」

携帯を開いて無意識に液晶を開いた。時刻は9時42分。

・・・

急いで家へと走り出した。足を急がせながら、ある思考が頭に浮かび続けた。

あの少女とはどこかで逢った気がする・・・
そんな違和感が離れなかった。

「私は「シオン・ストライト」。調律者です。」（後書き）

シオン・ストライト（年齢不詳）

髪の色：銀 瞳の色：碧

特技：不器用

身長：約150センチ

（あくまで）声優のイメージ：「桑島法子」

「おかえり」

時間はおよそ10時を回ったころだろう。家であるアパートに着くと、玄関前に洋兄と香川と平沢がいた。

三人はこんな俺の姿を見たからだろう、咄嗟に駆け寄ってきた。

「桐嶋くん！？無事だったの！？」

「おい蓮、大丈夫なのか！？」

「意識はある？大丈夫なんでしょうね！？」

なにせ、学生服が大きく引き裂かれている跡が残り、下の白いワイシャツは真っ赤に滲んでいるから三人の心配は当然だろう。

「とりあえず待つてくれ。ゆっくりさせてくれないか？」

俺は洋兄の住む教員アパートに住まわせてもらっている。家が分からないし、記憶が戻るまでの間だけという条件で居候させている。

「それにしても、なんで二人がここに？」

「なんで？このバカ！！」

平沢は形相を険しくさせた。平沢が感情的になることが珍しく、思わず驚いてしまった。

「渚から、あんたが通り魔に襲われたっていうから洋平先生と三人で助けに行こうとしたんだから、救急車も呼んで！したら現場には血の跡しかなかったから、もしかしたらって……」

平沢はそれまで言って、堪えきれなかった涙が一気に流れそれ以上の言葉を遮った。香川も同じ気持ちだったのが、平沢の隣で泣きじゃくるだけだった。

「まあ、俺はこの通り無事だから心配するなって」

この服装に落ち着かず、着替えを取りに部屋に足を向けると、

「俺たちは心配してたんだぞ。もう時間も遅いし、帰ってきた時も服とかボロボロだからな……」

平静に言っているようだが、洋兄の声は微かに震えていた。その

腕で洋兄は胸元に俺を顔を抱き寄せた。

「馬鹿言つなよ。俺たちは家族だし、友達だろ？心配くらい当たり前だろ？」

「・・・家族・・・友達・・・」

ああ、と洋兄が軽く頷いた。そして、思い出したように、俺に言った。

「おかえり」

「・・・ただいま」

顔を合わせないで言い返した。なんとなく、照れくさかったから、だと思つた。

今夜は蒼い三日月。そんな夜、俺とシオンは出逢つた。

思えば、この出逢いこそが、俺の持つ曖昧で乱雑な根底の記憶を知る物語の始まりになるとは、この時はまだ思いもしなかった。

・・・たとえ、記憶の正体が『希望』でも『絶望』でも・・・

「おかえり」(後書き)

アントワネット (???)

髪(毛?)の色:黒 瞳の色:栗色

趣味:散歩

好きなもの:ノア様.....

(あくまで)声優のイメージ:「福圓美里」

intermission 「私は神になりたいのだよ。」

……時は、シオンと蓮が帰路を同じくして……

人の気配など皆無な、荒廃とした建て物の中、一羽の黒い梟が舞うように飛んでいた。

梟は、窓辺の古びた椅子に座り、本を読む男の膝の上に降り立った。

白いシルクハットに白の燕尾服から靴まで、その容姿は実に紳士的だった。

「……アントワネットかい？どうしたのだい、そんなに慌てて……」

男は、囁くようにアントワネットと呼ばれた梟に語りかけた。

「ノア様、凶報ですございます。街に調律者が現われました。シオン・ストライトです。」

「ああ、彼の少女か。これは由々しき事態になったものだ。」

ノアと呼ばれる男は、口にした言葉とは異なり、焦燥のない実に冷静な佇まいを崩す事が無かった。

男は、話題に捕われる事なくただ本のページを捲っていた。続けて、また梟が口を開いた。

「その調律者がある人間の監視を行い始めるようです。」

「……監視？」

男はページを捲る手を止め、静かに耳を傾けていた。

「はい。理由は不明ですが、名前は「キリシマ、レン」という者です。」

ノアは訝し気に唸った。

「ふむ、調律者がたかが人間の監視とは気がかりだな……」

「あの人間には歪が視えているようで、その為の監視だと窺えませんが・・・」

「歪が視える・・・か」

そこまで聞くと男は、書物を閉じ微笑を浮かべた。

「・・・成る程。実に良い話を聞かせてもらったよ。君に感謝したい。」

「いえ、アンこそ、ノア様に感謝を頂くなど勿体ありません」

「いや、私がそうしたいのだよ・・・」

ノアは突然、鼻の口の中に薬指を入れ口内を弄んだ。

息を荒げ、悶えているアントワネットの様子を楽しむように見つめていた。

「もつと奥へ挿入れようか？」

囁くように尋ねるが、返事を聞くことも無くノアは更に指を奥へ押し込んだ。

鼻、いやアントワネットは息苦しく悶えているが、その姿は恍惚としているようにさえ見えた。

「私は神になりたいのだよ。その為に、私は理想郷を造りたいのだ。だが、その前にやるべきことがあるんだ。分かるかい、アントワネット？」

そこまで話して、ようやく指を抜いた。

息が切れながらもアントワネットは、やや官能的な声色でノアを見つめて言った。

「申し訳ありませんが、私には全ての理解はありません。ですが、できることならノア様の理想郷が作られた暁にアンは、貴方様だけに愛玩される使い魔となりたいです・・・」

「ああ・・・嬉しいよアントワネット。そんな約束が無くても、私は君と一緒にだよ。」

「ああ、ノア様・・・」

ノアは鼻のアントワネットを抱き上げ、耳元で囁いた。

窓の外からの月光で照らされた二つの影が、どこか異様な光景を

映し出していた。

「そつだ。明日直に対面してみよう。ふふっ、楽しみだ。」
空に浮かぶ蒼白あおの月を射抜みつめ、ノアは笑みを歪ませた。

intermission 「私は神になりたいのだよ。」 (後書き)

ノア・アークレイ (年齢不詳)

髪、瞳の色：青紫

趣味：読書

弱点：美しいもの

(あくまで) 声優のイメージ：「関俊彦」

chapter 1 「御早う御座います、レン。」

あの永い夜から翌日……

「洋兄、起きなよ。遅刻するぞ」

「ん……あと二十分……」

「それじゃ本当に遅刻するぞ。俺だつて眠いんだから。」

昨夜のあの後は、三人から日付が変わるまで激しい追及を受けたが、俺もあの説明やら出来事を口で言い表すことが難しく、結局うやむやにしたまま三人を渋々納得させた。

にも関わらずに、相変わらずこんな感じだ。いつも通りの清々しい朝だ。

そうだ、これが普通なんだ。

昨日の夜は歪つていう化物の大群に襲われたり、殺されかけたり、妙な少女に助けられたり、思えば全てが異常だった。

……確かシオン、だったか？あの俺と対して年の変わらないあの妙な少女は。

そう言えばアイツは確か「俺を監視する」とか言ってたな……
てことは、どこからか俺がこうしてまだ起きない洋兄を起こそうたり、その後の朝飯を作る様子を見ているんだろう。

といつても、二度と逢わないとか言ってたから関係の無いことだが……

でも目を閉じればすぐに思い出せる。あの夜の血生臭い舞踏「ダンス」の中、その中心に確かに存在した、銀髪の黒衣の少女……

「蓮、飯はある？」

不意に後ろから突然話しかけられ、ビクツとしたのが自覚した。

「？ どうした？」

「『いや、なんでもない。』どうかしたの洋兄？」

「いや、飯あるかなって……」

俺は軽く洋兄の叩いて諭した。

「悪いが朝飯分しかない。昼は我慢してくれ。じゃ俺は先に行くから」

最近妙に冷え込んできた。俺は黒い学生服に心許なくて昔から少し世話になつてる水色のマフラーを巻いて学校に登校した。

「桐嶋君、おはよう。」

教室に入るなり、香川は笑顔で迎えた。驚いたことに、昨日「通り魔」に襲われた筈の人間が、一日足らずで平常心を戻していた。

俺にはそれが奇妙に映った。自分が襲われたにも関わらず、その笑顔は明らかに俺に向けたものだと思えた。友達の目の前で殺されたというのに……

そうだ、そこが奇妙なんだ。目の前であんな事があつたというのに、いつもと変わらない笑顔の香川がむしろ異常だったことに初めて気がついた。

「大丈夫なのか香川さん。昨日高梨があんな事になつたのに」

「はい。でも本人が大丈夫だと言つてましたから大丈夫なのかと……」

耳を疑った。

本人が大丈夫と言つていた？香川の言つてるそれはまるで……

「……高梨は生きてるのか？」

「死んでないですよ。でも桐嶋くんは知らなかつたみたいだから仕方ないけど……」

そんな筈が無い。有り得る訳が無い。あの傷を見たなら普通の人間が生きている確率なんて無いに決まつてる。しかし、香川が嘘を言っているようには見えなかつた。だが、昨夜のあの香川の様子は……

なにかがおかしい……なにかが狂っている……

「ああ、高梨さん！」

香川が立ち上がり、教室の扉へ駆けていった。

実際に見に行く事も考えたが、そんな事より今起こっている異常を知らなくてはいけない。しかし、どうやって？香川がアレだと多分平沢に聞いても同じ返答が返ってくるかもしれない・・・

しばらくして、会話が終わったのらしく、香川は俺の二つ隣の自分の席に腰をかけた。

ガタツ、と後ろから椅子に座る音。そう、後ろは紛れも無い、高梨葵の席。

振り返る事が恐ろしくなった。混乱した脳あたみで理解できていることは、俺の後ろには高梨葵じゃない誰かが腰を降ろしたという不自然な行為。

「御早う御座います、レン。」
俺に尋ねるその声に覚えを感じた。

確認するようにゆっくり後ろを振り返ってみたが、それでも自分の目を信じられなかった。

後ろで括られた背中まで流れる銀の髪、碧眼、なぜか女子の制服を着ているが、間違える筈がない・・・

高梨葵、いや、シオン・ストライトと名乗る少女が、昨夜の無表情で俺を見つめていた。

「気分が悪い……」

「……一体何の真似だ？」

「真似とは失礼ですね。貴方こそ突然何を言い出すのですか、レ
ン」

俺に会話を合わせる気が無く、飽くまで高梨は対話を行っていた。その誤魔化す気配も感じないシオンに少し苛立ちを感じた。

「昨日の今日でまた逢えるとは驚きだな。シオン・ストライト、
だっただか？」

皮肉で言った言葉にシオンはようやく反応を見せた。だが、
「まさか……わたしの存在が正確に傍受できるのですか？」

「ああ」

それは、明らかかな動揺だった。理由は分からないが、シオンにと
っては俺のこの状況が余程意外だったらしい。

「しかし、遷移は完全の筈……落ち度は皆無と思ったのですが、
・何処かで溢したのか……」

顔を伏せて一人言を唱えるが、やはり何を言ってるのかはさっぱ
りだった。

「高梨さーん」

その女生徒は高梨の友人なんだろう。その友人は悩むシオンの席
の隣に来た。

「この間借りたCDさ、昨日忘れてたから今返すね。ごめんね、
お気に入りって言うてたのに。」

「特に構いませんよ。」

何の冗談だ、コレは？

高梨に対してそれほど面識があるわけではないが、それは間違い
なく別人である「高梨葵」と友人は、少しの違和感を感じさせるこ
となく会話をしていた。

それが、俺の目にはそれが酷く異様に映った。

しばらくすると、会話も終わったらしく後ろも静かになっていた。「うむ、どうやら遷移自体に問題は無いですね。」

気が付けば俺は、振り返ってシオンに話し掛けていた。

「今のはなんだ!? 一体どうなってる?」

「・・・昨日、タカナシ アオイという人間がどうなったかは、貴方ならご存知でしょう?」

「・・・ああ」

分からない筈がない。高梨は俺の、香川の目の前であの巨大な爪に引き裂かれて死んだ。しかし、今のシオンの言葉の中に、ある疑問が出てきた。

「・・・待て。お前まさか高梨がああなったのを・・・」

「見過ごしていた、というわけではありません。わたしが察知した頃に貴方方が歪から逃げ出していたのです。早急の排除も考えましたが、その前にわたしは自身が保有する特性を使用したのです。」

「とく、せい・・・」

シオンは無表情を崩すことなく、冷たく言った。

「タカナシ アオイという存在をわたしに移させたのです。」

存在を移す・・・? 何か嫌な感じがした。

それじゃシオンの言ってることがまるで

「その言い方だと今のお前は「高梨葵」であって、シオン・ストライトでもある、て聞こえるんだが・・・」

そこまで言っつて、ようやく気づいた。シオンがやった存在の遷移、というのは、

「お前のそれって、あの化物と・・・」

周囲には音が流れているに関わらず、耳に針が入ったような鋭い沈黙。

出来る事なら否定してを望んでいたが、

「確かに、行為そのものに相違はありませんね。」

声色や表情に変化も無く、シオンの涼しげな返事が返ってきた。相違ない、だと・・・

俺は自分が気付くより速く、勢いよく立ち上がって教室を背にした。

「待つてください。落ち着いて聞いて下さ・・・」

「触るな！」

シオンを手を払った。クラスや平沢、香川の目が集中していた。

「・・・ちつ。変な奴とは思ってたが、これじゃどっちが化物か分かったもんじゃないな。お前の場合は「魔女」て言葉がお似合いだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シオンは不意に顔を哀しげに俯かせ、言葉を失くした。

シオンにとって、何か嫌ななにかがあるのか、無表情から作られるものとは違う沈黙が流れていた。

「気分が悪い・・・」

俺は空気が変わり始めた教室から逃げ去った。

「いつてらっしゃい」

「………」

結局、屋上むきに来てしまった。

仰向けになつて一人で空を眺めているのに、嫌悪感が少しも失せることはなかった。

いや、あるいはこれは罪悪感、かもしれない。

あの時シオンは、触れてほしくないモノに触れられた表情だ。嫌なことでも思い出したような……

俺はそれを不用意に、無遠慮に、不躰になぞってしまったらしい。まさかあんな顔までするなんて……

「一体何だつていうんだ、あいつは」

と、危ない危ない。あまりに考えすぎた。そんなこと考えたら余計な火種を撒くはめになるから、俺は気持ちを落ち着けて目を閉じた。

「あ、やっぱりここにいたんだ」

屋上の扉が開いたと同時に、声が鳴った。

この声に話し方にテンションは明らかに平沢のものと、見ないでも分かった。

「朝のホームルームまだ終わってないんだろ？」

「残念！今日は早く終わっちゃってさ。」

平沢の声は徐々に近づき、俺の隣に、よっ、と仰向けに倒れこんだ。

「そういえば、あんたところするのって久々だよ。覚えてる？小学の時、勉強サボる時には、やっぱり屋上だったっけー」

「……あつたな、そんなこと……高梨から何か言われたのか？」

悪いが、平沢の言ったことは全く覚えてない。俺は平沢を見ないよう、身体を横に向けて寝かせた。

「まさか、様子を見にきたただけだよ。」

「ふうん・・・」

基本的に平沢は人の為に動く人間だ。だから頼まれて来たわけがないのなら、答えはもう一つの方だろう。

「・・・高梨が落ち込んだ、てか？」

「ええそうよ。だから、あんたに謝ってほしいの」

多分、平沢は横になりながら俺を真っ直ぐに見て言っているんだろう。けど、その気は全く無かった。「なんでだよ？」

「なんでって・・・何とも思わなかったの！？葵あの顔、私初めて見たんだから。蓮が何言っただは知らないけど、それにも非があると思うよ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静けさを取り戻した空の下、冷静にシオン・ストライトという奴を思い返してみた。

出逢って間もないが、知っているところを挙げるなら、彼女は冷静沈着で冷酷、基本的に無表情なところを見ると、大よそ物事に無頓着な気がするし、化物を退ける程の強大な力を持っている。

けど昨夜、その力によって俺は助けられ、俺を狙う化物の正体までも語った。俺の疑問には余すことなく全て答えてくれた、表情に映さない優しい少女。

そんな少女が、たかが文句一つであんな消え入りそうな、儂い表情で俯いた。あの強い少女にも、触れてほしくない、気の病むことがあるのだろうか・・・

はあ、と深く溜息を吐いた。焼きが回ったというのはこういうことなのかもしれない。

目を瞑ることが苦痛なっていた。視界が塞がる度、シオンのあの顔が鮮明に表れる・・・

なぜか、それが浮かび上がる度、無視できなくなり俺は気がつけば身体を起こしていた。

「・・・・・・・・・・『トイレ』」

横になったせいだろう、学生服の埃を振り払い、屋上の扉に身体を向けた。

「いつてらっしゃい」

平沢は身体を起こさなのまま、どこか嬉しそうな声を俺に向けた。

教室に戻り、いつも通り窓際の後ろから二つ目の自分の席に腰を掛けた。直前、後ろのシオンを流し見たが、元の無表情に戻っていた。

「レン、貴方に話が・・・」

「待った。それは後にして、言っておきたい事がある。」

「なんですか？」

「お前、さっきの気にしてるのか？」

「『いえ全く。』過去から言われ続けていた事ですので『慣れていきますから。』」

シオンは飽くまで無表情を崩さなかったが、それが嘘だと聞き終わるのを待つ前に分かった。気にしていない人間があんな表情を浮かべるのが有り得ないんだ。ともあれ、俺の言うことは最初から決まっていた。

「そうか。けどな、俺にはそれが気持ち悪く感じたから、余計な言葉は控えさせてもらうぞ。大体、命の恩人に対して、アレは無いからな・・・」

シオンは、意外そうに俺を見つめた。これ以上は何を言えばいいか分からない・・・

そこを、授業開始のチャイムに助けられた。

「優しいんですね、レンは」

「？ 何か言ったか？」

チャイムのせいによく聞き取れなかったから訪ねてみるが、

「い、いえ別に」

シオンは慌てて何かを否定した。あまりに妙な反応に戸惑ったが、教室の扉に教員が入ってきて、身体の向きを前に戻した。

「・・・何故俺はそうならない？」

昼の休憩時間、まだこんな時間だがなんだか疲れた気がする。

朝から、シオンと仲違いをしたり、とりあえず悪い方向に行かないよう修正はしたもの、あれからシオンは俺が授業をサボらないよう捕まえては席に座らせられた。授業の参加自体はそれほどでもないが、そこに監視が付くと話は随分変わる。また、話があると言つては、俺をどこかに連れて行くこととするのも目立った。

そのせいで、周囲から俺と高梨との関係について話題が出てきて厄介になった。俺自身がよく分かってないのに、周囲からは

あの昼行灯に、あんな綺麗な彼女が・・・

と言う声が飛び交い、次第にクラス公認のカップルとして、勝手に祭り上げられて迷惑極まりなかった。それに対して、平沢は俺の肩を軽く叩きながら複雑な苦笑いを浮かべ、香川に限っては公認されてすぐ次の授業時間に早退したという。

一番の問題は、クラスメイトから聞かれた俺との関係についてこつ言つたことだ。

「彼には興味が湧きましたので。生憎ですが、貴方方には彼ほどの感じるものが無いようなので」

いつもの無表情で言い切つた。思い出すだけで胃が痛くなる・・・

俺の持つシオンのイメージが鎧姿のものだから全く気付かなかつたが、クラスメイトから口々に言われて気付いた。確かにあの姿だと、シオンは綺麗で、華奢ながら同級生にない気品を持ち合わせていた。だがしかし、飽くまで俺にはそれが高梨葵とは見えず、やはりシオンにしか映らない。

・・・いや・・・待てよ

確かシオンは「高梨葵」の存在を自分に遷移、つまり移したと言っていた。

つまりは今のアイツは「高梨葵」なんだ。

例えば香川もその友達も平沢も、アイツを高梨と、葵と呼んでいた。そこが問題だ。

「・・・何故俺はそうならない？」

仮にそうなれば、普通俺もアイツを高梨と呼んでいたはず。

けど、俺は彼女をシオン・ストライトとして確認している。

何故俺だけ？

俺はおかしくなっているのか？狂っているのか？いや、もしくは世界そのものがそうになっているなんて考えられないだろうか？俺に思い当たるものはありはしな・・・

「きやつ！」

色々難しい事を考えて歩いていたせいで、誰かとぶつかってしまった。

その相手はやたら大きな丸い眼鏡が印象的な見掛けない女生徒だった。

「つてててて・・・」

「あ、すいません」

こんな時の勘はよく当たる。それが言っている、コイツは面倒だと。

一言謝ってその場を通り抜けようとしたときだった。

「ちよつとお、こんなかわいい娘とぶつかって一言も無いの?!」

本気なのか冗談なのか分からないけど、俺の目の前に鋭く人差し指を立てて、変わった怒りを露わにしていた。なるほど、確かに面倒なのに関わってしまった。

「いや、だから今謝って・・・」

「言い訳は無用！君が苦しむだけよ！てなわけで、罰としてこれからの昼食付き合ってもらうからね。覚悟しなさい！」

まずい、逃げ

ろ、と思った頃には手遅れで、女生徒は強引に俺の学生服の袖を掴むと、有無を言わずにどこかに連れ去られていった。

連れ去られた先は、人ごみのある食堂だった。

の学生はパンやら弁当やら食べるものだが、この人は大量に購入した肉まんを丁寧にかつ迅速に食べていた。

ただ、口周りの食べ残しの跡が目立つが・・・

「そうそう、私、雫しずくって言うの。気さくに雫しずくって呼んでね。」

雫と名乗る女生徒はあっさり紹介した。それに、それは気さくとは言わないと思うが・・・

でも雫という名前は聞いたことの無い名前だった。

「ふうん。雫ってどのクラス？」

「んー？C組だよ」

C組？おかしい・・・俺もC組だけど、名前を知らないならともかく、教室で見たことすら無い。もしかしたら・・・

「・・・雫って、まさか先輩？」

「へ？そうだけど・・・君もしかして一年？」

「まあ」

「なるほど、どうりで知らない顔な訳ね。あ、ちなみにわたし、二年ね」

やはり先輩だった。

さつきまでため口だったけど・・・立てられた親指と笑顔が眩しい気がする。

「ん？どしたの？」

「・・・いえ、なんでもないです」

経験はないだろうか？同級生と思っていた人に対して馴れ馴れしくしていたが、実は先輩だったと分かった途端、顔が幼くてもこの人は先輩なんだと頭が認識してしまうことが。

「えと、雫先輩・・・」

「雫でいいんだって。ていうかわたし、普通に会話する方が好きだからそうしてほしいな」

今ので機嫌を損ねたらしく、そっぽ向いた。多分、そう言わないとずっとこうなるんだろうな、この人・・・

「・・・雫、先輩はそんなに食べて大丈夫？」
やっぱり無理だった。

ちらつと雫先輩の手に持つてるビニール袋に眼を向けたが、まだ重量感が感じられ、数は正確に数えなくても七、八個は残っていた。といっても買った当初ははこんなものではなかったが・・・

「肉まんなら二十個でも三十個でもイケる気がするんだよねえ」
この自信はどこから湧いてくるのだろう？俺には理解しづらい。

「それにしても、友達と食べようにも、委員会とかでいなくなっちゃってさ。一人で食べるのだけは嫌だから、とにかく誰かと食べたかったのよね〜。蓮くんも肉まん食べてくれないし・・・」

雫先輩は肉まんを頬張るも、その言い方は明らかに拗ねていた。というより、その肉まん食べて良かったことに今更驚いた。

一つ口にしようとビニール袋に手を伸ばそうとするが、既に中は空だった。

雫先輩はまるで当たり前のようにハンカチを取り出し、ちゃんと口周りを拭った。

・・・

今、何か違和感があったような・・・

その感じた方向、肩を見て確認すると糸が繋がっていた。

「ああ、そういうことか」

その先を追っていくと、談笑している男子の背後に化物がそれを眺めるように立っていた。

といっても、誰にも見えない訳だが・・・

「・・・ちよつとトイレ」

俺は席を立って、化物の所へ足を進めてしまった。

「・・・何故俺はそうならない？」（後書き）

雫 「しずく」 （17）

髪、瞳の色：黒 眼鏡

好きな食べ物：肉まんありき

好きな動物：カピバラ

（あくまで）声優のイメージ：「井上麻里奈」

「気は進まないが、やるか」

どうする？どうする！？

ほぼ無意識に化物の所に動いてしまったが、その後の事なんか考えていなかった。

俺には関係ない人とはいえ、目の前で喰われるのをただ見ることは絶対にごめんだ。

「気は進まないが、やるか」

その前に、食堂からの逃げ道を確認した。

まず廊下まで走り、通ったら窓から外へ逃げる。後は人のいない所まで逃げ切れればそれでいい。

よし、これで大丈夫の筈。

歪との距離を取り、頭に「糸」をイメージした。

理由は知らないが、人と同様、歪にも糸が繋がれるらしく、そうなると思様に凶暴になって俺だけを襲うようになってくる。

・・・よし、糸は繋がった。次だ・

繋がった糸の色を元の白色から赤色を強くイメージした。このイメージは好きじゃない、一番始めに血を連想してしまうからだ。

・・・できた

すると歪は身体をこっちに向け、重々しい身体を走らせきた。

「っし、後は・・・」

予定の通り、逃げるだけだ。しかし、逃げて生き延びるだけで俺の勝利は確定なのだ。

その理由が、糸の色によって異なるが色濃い程消滅の時間が早まるようだ。

俺は予定通り、食堂から離れ人のいないだろう場所へ走っていった。

「はっ・・・はっ、はあ・・・」

走って数十分、逃げ込んだ先は体育館の裏。人もいないし、たった今チャイムが聞こえたところを見ると授業開始のものらしい。

危機感はまるで無い、好都合だ。強いて不利な点を言うなら、足が棒になり、身体が鉛に変わったところだろう。

そう言えば、昨日からよく走ってるような気がする。糸はまだあるし、ここで歪に見つかったら・・・

「・・・ヤバイな」

不意に、糸が上に伸びた。そこを見上げると、体育館の屋根から目の前に振ってきた歪の巨体と視線がすれ違った。

「え？」

反応が一つ遅れ、恐怖を感じる前に歪は腕を振り上げた時だった。

「やあああああああ！」

一閃、光が奔ったことが理解した後、歪の後ろから昨夜の白い鎧を纏ったシオンが大剣を上振り抜いていた。

さっきの一撃だろうか、歪の振り上げた腕は斬られ苦しむように吠えていた。

「離れて下さい。ここはわたしが・・・」

「いや、大丈夫」

歪が壁になっっているせいで見えないが、シオンはどんな表情をしたのだろう。

言葉が止まり、整えられた構えの姿が乱れる程だ。

「終わったよ。」

歪は風景に溶けこむように光を散らしながら徐々に透明になり、次第に完全に消え去っていった。

静寂が流れてからも、シオンは構えを緩めたまま微動だにしない。俺は背を向けて、立ち去ろうとした時、

「待ちなさい！」

シオンが力強く制止させた。

「貴方、一体な」

シオンの声と広がる視界はそこで突然途切れた。前触れもなく全ての機能が停止した。

「行くしかないのか」

これは・・・？

次々と映し出される音のない映像は、視点が低く子供の頃の自分から見ているようだった。

映し出された映像は、笑顔の父に撫でられている「俺」、父が乗る自転車の後ろから背中を見ている俺、母親に叱られる俺、人混みの多い遊園地で一人の俺、母親の墓に手を合わせる俺、家族と賑やかに食事をしている俺たち。

光景は様々なのに、一つおかしかった。

映像に映った家族は、誰も彼も別人、同じ父親でもそれぞれ風貌も性格も、全て異なっていた。

これの中に俺の記憶が？

目まぐるしく変わっていく映像の中、停電が起きたようにブツと途切れた。

不気味な暗闇だけが広がるだけだった。

.....

動く事も話しこともできず、闇の中を待っていると徐々に映像が現れ始めた。

音も色もなくなった、モノクロの映像。

広がる景色は、どこかの広い屋敷のようだ。

それはまるで洋館。

音の無いせいもあるのか、人気のいない広いだけの静けさが余計に耳を痛めた。

「俺」は辺りを見渡し、これから何処へ向かうのか俺は広間から二階に上がり、長い廊下を走っていた。やがて一つの部屋の扉の前

に立ち止まり、扉にノックをする。

開かれた灯りの点いた部屋の中に、少女の姿がいた。顔は見えないのに、口元が嬉しそうに笑っているように見えた。

そして少女は俺に向けて言った。

「お兄ちゃん」

「・・・た、一体何をしたのですか？」

徐々に意識が覚めると、目の前には先の形でシオンが険しい表情で尋ねていた。

さっきとの会話が繋がってるところを見ると、アレは時間にして一瞬のようだったのだろう。

でも今のは夢・・・だったのか？

「レン、答えて下さい！貴方は」

「話すと長くなるから、放課後にでも話させてくれ・・・今は疲れてるんだ・・・」

今のシオンの剣幕では話すまで動かないかもしれないが、事實は今はずになったこの足を回復させることに専念させたかった。それでも、シオンは不満を崩さなかった。

「そうしたいのですが、私も貴方も学びを終えてもそのゆとりは無いようです。これを・・・」

シオンが差し出したのは、既に開けられている白い便箋に入った手紙だった。

手紙の中央に綺麗な手書きの繋ぎ文字でこう記されていた。

『from Noah』

「・・・ノ、ア？・・・これは？」

「調律者の敵です。歪を束ねる強力な魔術師です。」
束ねる？それって・・・

「敵の親玉でことだよな？なんでそんな奴が俺たちにそんな・・・」

「

「目的は不明です。ただ内容は、私と貴方で放課後の六時、1 - この教室に来い、とのことです」

「その教室、俺たちの・・・」

なんだ・・・何が狙いなんだ？なんで関係のない俺まで巻き込まれてるんだ？敵が何を考えてるのか分からないから、下手に行かないわけにはいかない・・・だから仕方無い・・・

「行くしかないのか」

けど幸い、この時間までは全然時間はある。

それまでに考えていよう。敵の目的を・・・

「まるで他人を拒むように・・・」

今は五時限目。

教員の不在によって自習で賑わうただの教室だが、それがどこか誰かに仕組まれた二セモノの光景にしか見えなかった。

「レン」

敵の大將が現れる。そうならたらどうなるか・・・考えたくない。

それを考えるだけで、とても目の前の課題に集中出来なかった。

「レン」

そうならたらどうなる？闘うことになるのか？なにせ、ノアとか言う奴は調律者の敵と言っていたから、そうならない方が有り得ないだろう・・・

第一、シオンに勝算はあるのか？といってもあの手紙を見ても焦った様子は全く見えなかったのだが・・・

「レン」

「うわっ！」

不意なシオンの呼びかけに思わず声を上げてしまった。

教師はいないもの、クラスメイトの視線が集中していたが、何でも無いなかった事が分かったらしく、またそれぞれの行動に戻った。俺はまた静かに腰を下ろし、シオンに椅子を向けた。

「おいシオン。驚かすなって・・・」

「学舎でのシオンは控えて下さい。今のわたしは飽くまで「高梨葵」です。それに、アオイ自身も貴方をそう呼んでおられたようなので」

「・・・まあ別になんでもいいさ。」

考えてみると、学校でシオンと呼ばれようがコイツは誰から見てもシオンではないから、正体が割れることなど無いと思ったが、それを催促したのは何かの警戒の為だろう。確かにややこしくはなり

そうではあるが・・・

考えてもどうしようも無い。俺は椅子から立ち上がって、身体を教室の扉に向けた。

「レン、何処へ行くのですか？」

「別に。すぐ戻るから」

「・・・遅い」

彼はすぐ戻ると言っていたが、流石に二十六分は長い。もしかすると・・・

「まあいいでしょう。そんなことより・・・」

彼に関しての疑問は尽きない。歪の認識、先に見せたあの奇妙な赤い糸。

これは疑問ではなく不理解なものが、彼の人格、なのかもしれない・・・

私はレンという人間をよく知らないが、今朝の私への憤慨確かに行為は歪のそれと大差はない、だから理解出来なくもない。しかしその後、彼はわたしに謝罪を述べた。それが予想外だった。

昨日からのことだが、彼は友人が側にいながらどこか一人だった。彼は普通のヒトかもしれない。しかしその行動には常に矛盾が付き纏っている。

「まるで他人を拒むように・・・」

一体レンはどのように生きてきたのだろう。

他人に対しての衝突ついたてが尋常じゃない。それならば彼と学友との付き合いも表面上のすぎないことになる。何故？

「高梨さん」

声の方を向くと、ナギサは歯切れの悪い語調で問い掛けてきた。

「あの、桐嶋君の事興味があるって言ってましたけど、どうなんですか？」

言っている事がよく理解出来ないが、心成こころなしかナギサが赤面して

いるように窺えた。どうしたのだろうか？体調の不良だろうか？

ともかく、少し考えた後わたしは今の心情を簡潔に述べた。

「ふむ。彼に関わる程興味が尽きませんね。」

「え？」

たった今、授業終了を示す鐘が響いた。

探索も思案したが、彼が何処にいるのかわたしには皆目見当もつかない。

ということと彼の性格上、戻ってくる事が予測されたから一先ず「ほーむるーむ」というものを待つことにした。

「契約させて頂きたい。」

・・・授業が終わったのか

仮病の保健室でチャイムを確認すると、ベッドから降りて保健室を出て行った。課題も終わったし、ホームルームは受けたいから教室に戻る事にした。

「遅いです。」

表情の変化こそ薄いのが、微かにシオンの表情は機嫌を損ねていた。シオンには珍しく俺に目を合わせようとせず、橙の夕空を眺めていた。

「『悪い。急に体調が悪くなってな』」

「貴方、この後この場で戦闘の可能性も考えうるというのに。そうなると、最悪貴方の命は落とされる場合だつてあるのです。ですから、貴方は常に狙われている身なので慎重に行動してください。」
全く、と小さく悪態を吐き、俺の嘘に気付かずシオンはそれとは別の所を指摘した。

確かに、あれからまた歪が現れることも考えられたし、ノアつてのが俺を殺しに来た可能性も十分あった。

「・・・分かってるさ。まだ死にたくないからな。」

「よろしい。では、時間ももう少しありますので、別の場所でゆるりしましょう。」

どうやら今ので機嫌が直つたらしく、普通通りの落ち着いた話しか方に戻っていた。

立ち上がったシオンは俺の手首を掴み、教室の外へ向かっていた。

「いや、お前ホームルーム・・・」

「貴方にまだ話してないことがありますので」

「だからってココは・・・」

結局、また屋上に来てしまった。今日だけで俺以外の来訪者が何人訪れたことか・・・

もうここで落ち着けないかもしれない・・・嫌になる。

深く溜息を吐くが、そんな俺に眼もくれずにシオンはフェンスの外の運動場を眺めていた。

「此処は良い場所ですね。」

「そうだな」

お前が来るまでは、な。

・・・はあ・・・まだ溜息が止まらない。

「では、話というのは、わたしを正しく理解してもらいたくて此処に来たのです。」

フェンスを振り返って、シオンが俺を見据えた。

「正しく理解？どういう・・・」

「その前に一つ、貴方は歪が排除された際の最後がどうなるか、ご存知ですか？」

「確か・・・昨日みたいに砂になって消えるんだよな？」

「はい」

今更どうなるかくらひは俺にだって理解出来るつもりだ。

「厳密に言いますと、あれは消滅したのです。では、その歪が人の存在を得たまま斃されとしたら？」

そう言えば思い出した。存在を得て世界に認識がどうか・・・

一応化物でも、半分は人間って考え方をするなら・・・

「その人間が死んだことに」

「なりません」

遮るように割り込んだ声。

死んだ事にならない？じゃあ、どうなるんだ？

「歪は極めて不完全な存在です。故に消滅させると同時に、手にしていた人間の存在も抹消されるのです。」

つまり、排除された歪は「最初から存在しなかった人間」として

認識されるのです。」

・・・一瞬、風が強く吹いた。

・本気で言ってるのか？出来る事なら、風が運んだ空耳であつてほしいと願った。

「一体、どうして」

「言つてしまいますと、ヒト為らざるモノがヒトになるなど、有り得ることではありません。中途半端に世界に刷り込まれた存在を配置させるくらいならと、抑止力は忘却として発生するのです。」

少しの表情を曇らせる事無く、冷たく言い放った。今程シオンが憎たらしく思っている俺は、右手の拳を握り締めることでしか怒りを露わに出来なかった。

「今朝の貴方の憤慨も理解できません。わたしの行動は確かにアレと同様ですが、わたしたち調律者の場合は死んだとしても、「タカナシ アオイ」という存在を外れても、彼女が存在したという確固たる証明は残ります。写真や映像、ヒトの記憶にも」

思わず、話の中に出た「わたしたち」という言葉に食いついた。

「調律者つて、お前以外にもいるのか？」

「はい。元よりその規模は世界に広がっていますので、わたしの他にも調律者が動いています。」

世界・・・そんな大規模な話なつてくるとは思いもしなかった。

一つ咳を溢して、シオンは話を戻した。

「少々外れましたが、わたしは昨日のような犠牲を払いたくありません。貴方が憎むというなら一向に憎んでも構いません。」

シオンの瞳は揺るぎの無い、凜々しい目で俺を真っ直ぐ見つめていた。

曇りや迷いもない、強い瞳。イカれた人間ならともかく、こんな瞳をした人間は憎むより昨夜のように背中を預けた方が無難だろう。

「ですがレン。一つだけよろしいですか？」

フェンスを振り返り、俺に歩み寄ってきた。

「本来なら陰ながら、貴方の観察活動が優先でしたが、この通り

貴方には存在遷移は無意味ですし、その上ノアにも目を付けられませんでした。つまり、この時点で貴方は普通の人間とは異なっています。」
何も言い返せない・・・自分でもその自覚は薄々あったから否定はできない。

「そこです。」

貴方と契約させて頂きたい。恐らく、ノアも先の意見と同様の事を考えている筈です。なので、わたしは貴方という希少な人物を、常にあらゆる敵から守らせて頂きます。なので貴方を絶対に死なせません。この身勝手な契約、交わしても構いませんか？」

俺の前に来たシオンはおもむろに右手を差し出した。

ここまで言っておいて身勝手という方が勝手だ。シオンのこの言い回しだと契約というより自身に対する誓いだった。なら、その誓いにどう応える？

決まってる・・・

「『お前を信用した訳じゃない。俺はまだ死にたくない、それだけだからな』」

そうは言うが、俺を右手を差し出した。シオンはそれが嬉しかったのか、穏やかに笑み右手を交わした。

握った少女の右手は小さく、この寒空の中ではやや暖かった。

気が付けば、チャイムが鳴っていた。

これからホームルームだが、今更行くこともない。俺は残りの時間をここで過ごす事にした。

多少なりだが、背中を預けられるこの少女と・・・

「私がノアだ。お見知り置きを。」

現在、時刻は夕方の六時。場所は教室の扉の前。

いつもの見慣れている只の広い部屋の筈なのに、どこか異様な空気が流れている気がした。

普通、こんな時間にも校内には生徒はいるはずだが、心なしかこの階だけには何らかの気配すらも感じず、ただ静寂しずかなだけだった。

分かる、今俺は冷静になりきれいていない。その証拠に手の震えが全く止まらない。

なんだ？俺はこの中に入ったらどうなるんだ？無事に済むのか？そもそも生きて帰れるのか？

その不確かな指先が扉の取っ手に手を伸ばした時、

「レン、落ち着いてください」

シオンが肩に手を置いた。ただそれだけのことなのだが、飛びあがりそうな程驚いた。胸の奥が不安で渦巻いていた。

「わたしが先に入ります。契約を容易に反故するほどわたしは愚かではありません。」

シオンの声は今の俺にはとても安らげる、穏やかな風だった。

そうだ、落ち着こう。コイツなら大丈夫。シオンならきつと・・二回ほど呼吸を整え、シオンは俺が少し落ち着いたのを見計らう

とゆっくり扉を開けた。

その先は、

なんの代わり映えのない、橙の夕陽が射すいつもの教室があるだけだった。

「入りましょう。油断はしないで下さい。」

「・・分かつてる」

シオン、続いて俺が教室に入った。中に誰の姿があるでもなく、沈んだ赤に染まった只の広い箱。

深く息を吐いた。それは拍子抜けのものでは無く、安堵のものであった。

ここには誰もいない。俺は振り返って教室の扉に振り返った時だった。

「ようこそ、お二方。」

それは、突然だった。

振り返った目の前に現われたのは、なんの違和感も無く天井に立っている、白いシルクハットをまぶか目深に被った青紫の長髪の男だった。「うわあ！」

ふふつ、と男が笑みとともに出た吐息が顔にかかり、酷い嫌悪感と動揺に襲われ男から距離をとることで精一杯だった。

「この邂逅の為に少々趣向を凝らしてみたがね、喜んでもらえて何よりだよ。」

男は楽しく笑みながら天井から床に、ひらりと舞い降りるように軽やかに着地した。

そのスラっとした長身の男はつば鍔の深い白いシルクハットを深々と被り、右眼には微かに見える片眼鏡モノクル、白い燕尾服と、靴までの全身が白く染まっていた。

色合いこそシオンと同じ感じだが、この男から感じる気配が無い。まるで、そこに存在しない人の形をした悪夢のような……

直感で分かった。多分この男が、

「私がノアだ。お見知り置きを。」

白い手袋に覆われた手を胸に置き、軽く礼をする様が屋敷の召使のようだった。

しかし、

これが、ノア？化物の親玉？まるでイメージと違う。その容姿は人間そのものだった。そういえばシオンは魔術師と言っていたから、少なからず見た目は普通の人であることにまた動揺を隠せなかった。

「全く無粋な人間だね、わざわざ手紙まで出したというのに。歪風情にそんな上等な芸当などできはしないよ。尤も、君の思慮分別

通り、私自身ほとんど人間でもないがね。」

ノアとろくな会話はしていないのに、それは成立していた。その返事は俺の考えていたものそのもに対してのものだった。

まさか、心を読んだ!?

思えば、さっきの紹介だって何も言っていないのに、ノアは会話でもするように合わせていた。

シルクハットの鍔で顔は見えないが、その向こう側は楽しむように俺を眺めているかもしれない。

「ノア！貴方の真意を聞かせてもらおう！」

途端、シオンの身体が煌いた、と思った後一瞬にしてあの戦闘時に身に着ける鎧に早変わりしていた。

そして背にした大剣を取り、その切っ先をノアに向けて吼えた。

「そうだね。では単刀直入に述べよう。その前に」

「ferme」

と誰かが唱えだした。それは少女の声だった。

その声はわざとなのか、俺の席に座る人形のような少女から発せられたものだった。それは比喻ではなく、本当に人形のようなだった。それは着せ替え人形のような黒いドレスを纏い、色の無い瞳で俺たちではないどこかに目を向けたまま静かに佇む姿がそうとしか映らなかった。

だが、少女の言葉は、周囲になんらかの変化が起こしたわけでもなく、再び静寂を戻っただけだった。

「これは・・・」

シオンは辺り見渡しだした。反応が尋常じゃない、多分、何か起きたのかもしれない。

ノアは悪戯に笑って、言った。

「外界からの接触はこれで無くなった。さて、私の真意を問うていたよね？」

かつつ、と甲高い靴音を鳴らして無造作に俺たちに近づいてきた。一連の行動から、ノアの口が開いた時俺にはその真意が分かった。

といっても、シオンには最初から分かっていたかも知れないが。

「なに、君たちに消えてもらっただけだよ」

ノアは唄うように告げた。

「耐ってくれよ・・・」

こんな展開は、十分予想できた筈だった。しかし、実際言われると納得できないものがあつた。

「待てよ！シオンはともかく、なんで俺まで殺されなきゃなんないんだ！」

「何故？君の持つをその糸が少々目に余る能力なのでね、そちらの調律者共々（もろとも）死んでもらおうとね。」

友達と会話でもするように、あまりに気軽すぎる宣言に返す返事が全く浮かばなかつた。ノアが一步、足を前に運んだ時だった。

「させません！」

大剣を水平に構え、足元に踏み込みの力を加え、一瞬で間合いに飛び込む姿勢をとつた。刹那、俺が目で追いついた頃にシオンはノアの懐に入り、大剣を横薙ぎに斬り払つていた。

ノアを捉えた！

「ふむ、悪くない。だがまだ甘い。」

と思われた一撃の筈が、振り抜いた大剣の上にノアが悠然と立っていた。いつ避けたのか分からないほど、俺には全く見えなかつた。シオンも気付かなかつたのか即座に声の方を向くが、ノアの放つ顔面への蹴りの方が速かつた。吹き飛ばされた身体は黒板に叩きつけられた。特に頭を打つたらしく顔に血が流れるが、目の戦意はまだ消えていなかった。

ノアは鈍くなったシオンから一度目を離し、

「いいのかい？君、そのままでは死ぬよ？」

その声は明らかに俺に向けられていた。認めたくないが、そのおかけである事実を思い出した。

さつき呪文を唱えた、着せ替え人形の容姿の少女、アントワネットは腰掛けていた俺の机から姿を消していた。咄嗟に辺りを忙すと、左側の眼帯の死角から少女は手にした細い何かを構え、俺に向かつ

ていた。

「っわー!!」

運の良い事に、中途半端な回避行動のおかげで足を纏れさせ、後ろに情けなく倒れた身体はアントワネットの振り抜いたモノを回避した。この時、その手の中のモノがトランプのカードである事がここで確認できた。

が、その振り抜いた先の椅子をそのカードは難無く切り裂いてみせた。少女は少しの表情も変える事なく、尻餅をついた俺を静かに見下ろすだけだった。

ようやく気付いた。俺は今、確実に命を狙われている事を・・

「成る程、先の神具しんぐは隔離ゲイツされた白い獄門ヘヴンでしたか。このような場所で使用するととなると、大方扉を媒体とした特定の空間の創造がその能力の真価、と言ったところでしょう。装飾アクセサリは恐らく鍵、でしょう」

「ほう、聡明じゃないか調律者。しかし気付いたとて打開は可能ではないか？」

そう、わたしの眼前の敵の言うとおりその神具を理解したところで、拒絶空間を編むあの能力を破ることは困難だろう。しかし、策は全くの皆無というわけではない。

「ならその神具を破壊するまでです。生憎、貴方だけに構うほどの余裕は少しばかり無いので早々に片をつけさせてもらいます」

アントワネット、と名乗ったあの少女の手にするあと一つの神具そのものは強力ではないが、相手が人間なら十二分に強大なものだ。ましてや使い方次第では調律者と戦い渡れるやもしれない。あの少女を

ノアを横切る教壇の上にシオンが乗っていた。だが、今はこれが最善だろう。

わたしはノアを見据えた

「ほう、あの口振りだとアントワネットを切り伏せに行くと思っていたのだが」

「易々とわたしを通すほど、貴方は間抜けでは無いでしょう？」

「ふむ、確かに君が仮に焦ってあの人間を助けに向かっていたなら私は即座にその隙を狙って首を四肢をと解体していたのだが、予想より冷静なようだ。本音を言えばそれはそれでつまらないのだが。」

途端、ノアの背後の空間が僅かに歪んだ。一つ揺れる水面から、ノアはわたしのそれとは異なる細身の剣を取り出した。

「それはどういう意味でしょう？それでわたしと白兵戦を挑もうと？」

「ふふつ、己に自信を持つのは結構だがそれを過信してはいけないな。いや、それとも自らを鼓舞する為の強がりの類の言葉だったのかな？」

「吐かすな！」

始まった。今正に、そこでシオンの大剣とノアの剣がぶつかり合う、鉄の音が響きだした。反響を繰り返す音、炸裂を続ける火花、その様子は全くの互角といったように映った。

だが、それ以上に意識を向ける余裕が無い。椅子を切り裂いたあのカードは俺を殺そうと奔っている。それも、アントワネットは確実に俺の死角から攻め、首や左胸、一閃をかわせてもその先が頸動脈といった急所を狙い続け、果てにはその凶器を投擲さえもした。その一撃一撃を、自分が回避できている事に幸運を感じているが、その実、急所を守っていれば死にはしない、という事実を発見した俺は作業のように回避を続けた。幸い、この程度の相手だ。このままいけば、シオンが来て助けが間に合うかもしれない。

幾度そうしただろう、アントワネットは例の如く俺の死角に回り込んだ。その行動はもう知っている。俺は一瞬で視界の外に消えた

少女を補足する為、顔を左に向けた。

だが、そのいるべき場所にアントワネットの姿はなかった。

「……………え？」

思わず動きを止めてしまった。その硬直は不測の事態から来たものではなく、背中を鋭い刃物カードで切られてしまい、痛いより先に驚きが露わになったからだだった。

この程度の相手……………？我ながら馬鹿らしい発想をしてしまった。このままでは……………

俺は何をするでもなく、ただ闇雲に背後に振り返っただけだった。それを目にして、俺は激しい悪寒に襲われた。

アントワネットの周囲には、彼女を守護するようにカードの群れが宙に浮いていた。不思議な事に、次の瞬間、自分の身に何が起るのか容易に想像出来た。俺の感じたそれは、寸分の狂いも無く実行された。

「穿て、ブラック五十四人の遊兵士。」

浮いたカードは俺に狙いを定めるように倒れ、矢は雨のように降り注いだ。

予想は出来たのだから対策はある。近くの机を予め壁にし、椅子で急所だけを隠す要領で身体を覆った。だが、それで守りきれる保障は限りなく無い。あるいは無意味かもしれないが、傷のせいでろくに動けない今の俺にはこうするしかない。

「耐もつてくれよ……………」

文字通り、今の俺には祈ることしか出来なかった。

やがて矢は俺と壁を覆い隠すように、一点だけに降り注ぐ。カードは机に刺さって動きを止めるものもあつたが、中には壁を貫通し、俺の身体に突き刺さる矢の方が多いと言えた。不幸中の幸いというか、直撃したカードは机や椅子のおかげで威力が落ちたのか、俺の身体を通り抜けることが無かった。

「……………あつ、が……………ぐうっ……………つ……………あ……………」

それでも痛い事は全く変わらない。だが、この壁となる椅子だけ

は下げられない。間違えてしまえばそれすら感じない場所に行きかねない・・・

・・・矢が止んだ。

凌いだ、もう大丈夫なのか。

向こうからの矢の攻撃が止んだ。赤く塗れた震える手で椅子をずらし、顔を覗かせて霞み始めた視界で捕らえたのは

最後の一枚、ジョーカーのカードを指に挟んだ黒衣の人形の姿だった。

「ハハッ、冗談じゃ」

ないって、と言いつつ前にそのカードは俺の左胸に突き刺さった・・・

「耐ってくれよ・・・」(後書き)

アントワネット (人化時年齢不詳)

髪、瞳の色：黒

特徴：極度の無口

好きな月：満月

「さあイクがいい、少年よ！」

「レン！」

「思いの外、時間を掛けてしまった。ノアの言うように己を過信していたわけではない。ただ彼が純粹に強い、それだけの単純なことなのだ。」

「あつちは終わったようだ。やれやれ、一先ず厄介者を始末できて少々安心したよ。」

「ノア！貴様！」

接触しあつた剣同士を強引に押し返し、ノアとの距離を取つた。

横目でレンを見るが、意識はとうに・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・つうう」

それにはノアやアントワネットも驚きを見せていた。とはいえ、わたしもそれを隠せない。確かに少女の五十四人の遊兵士フラックは心の臓ジャックに突き立っている。

いや、突き立っているから無事、ということなのだろう。

今は理由はどうだっていい、まだ彼は無事なのだ。それでいい。

「では、今すぐにも決着をつけましょう。出し惜しみを行つて討てる相手では無いと再確認できましたので遠慮なく使わせて頂きます。」

ほう、と愉快に笑むノア。一方のアントワネットはレンへと歩み寄る。

大剣に魔力を注ぐ・・・これならば時間を多く割くことも無い・・・僥倖というべきか、ノアはわたしの様子を笑んだまま窺っているだけだった。

「わたしも嘗められたものだ。ならその笑み、打ち消して見せよう。」

やがて我が大剣は剣の先から柄の隅までその姿を消している。厳密に言うなら、風を纏わせ姿を眩ましているいる、という方が正確だろう。

そして、十分に大剣に纏わせた風を突発的に拡散させた。

「爆ぜろ！風王結界！！」
インレシブリア

その威力は爆発や暴風、の類と値するだろう。ましてやこの密室、この教室内の置物は残らず中心から飛ばされ、アントワネットもろともノアの身体も軽々しく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。荒療治になったが、これで敵の隙は出来た。早急にレンの元に向かった。

「レン、しっかりして下さい！無事ですか！？」

「……………反響して聞こえる。これは……………シオンの声、か？」
「……………かり……………い！無事ですか！？」

目の前には、顔に細かい切り傷にまみれ、鎧も汚れてしまってるに関わらず、他人の心配をする少女の姿が映った。

「……………なんとかな。殺傷力が元から低かったのか、これのおかげなのかは知らないが」

学生服のポケットから携帯電話を取り出した。それでもカードは携帯を貫き、左胸に食い込み、血が滲んでいた。それにどこかぶつけたのか、斬られたものとは違う痛みが全身に広がっているし、教室内の状態がなにか爆発でもあったように荒れ果てていた。

「つつつう……………何があった、一体？」

「大丈夫です。あとはノアに一太刀をあた」

落ち着いた表情から転じて、途端にシオンは険しくさせ俺から離れるように後方に飛び退いた。

「実にそその光景だ。ながめさしずめ、今の君は娼館の踊れる淑女と言ったところかな。」

意識ははつきりしていないが、それがノアの声であることはすぐ

に分かった。アントワネットはシオンに手を指し向けたまま動かないままだ。

よく分らない・・・一体どうなって・・・

「クツ！まさかこんな神具まで所持していたとは・・・なんたる不覚・・・」

シオンはなんらかのぎこちなく身体を動かすが、靴音は次第に近づき、ノアはその小さな顎先を指で軽く上げて口を開いた。

「無駄だよ。この虚しい舞踊者シヨバは対象者を操る。何を足掻こうが、この糸に捕らえられた者はただの傀儡かいらいとなる、私のお気に入りの神具の一つだ。」

しんぐ？なんだ、それは・・・確か、さっきも言っていたが一体・

いや、そんなことを考える余裕はない。

とにかく、この状況をまとめると、シオンはアントワネットが使ってる糸つてのにに操られてる、ということになる。でも、なんの為に？

アントワネットは向けた指を遊ばせた。すると、シオンは大剣を構えこつちに足を動かした。本来のシオンなら、平然と使う筈の大剣をゆつくり、徐々に、壊れたブリキみたいなスロー再生のような動きで持ち上げた。それは、ノアの言うとおり、その操られた人形の動きだった。

「くうう・・・あああ！」

必死で抵抗する、しかし、抗うことが出来ずシオンは苦痛に表情を歪ませ、歩を止めることは無かった。

アントワネットはその無機質な黒い瞳で、ノアは口の端を釣り上げてその様子を眺めていた。

俺は次第に怒りが募っていた。その矛先は無力な自分にでなく、アントワネットの無表情でなく、ノアの笑みでなく、シオンのその不甲斐のなさだった。

わたしは貴方という希少な人物を、常にあらゆる敵から守らせて

頂きます。

シオンはそう言って自信あり気に契約しておいて、短時間の内に破棄しようとしている。簡単に反故しない？鏡を見て言ってほしい。

・・・だが、こいつはまだ諦めていない。多分、シオンはあの契約を本気で果たそうとしている。いや、違たがえさせない様になっている。このままシオンが自分の手で俺を殺したらどうなるんだろう？まさかとは思うが悲しむのか？少なくとも香川も平沢も洋兄もうるさくなりそうだ。だが、俺自身の感情ではつきりしてることが一つある。

契約相手に殺されるのだけは死んでも御免だ！ならどうする？・・・殺す？ふざけるな、それは絶対却下だ。

「さあイクがいい、少年よ！」

ノアの声と同時に、アントワネットは指をまた遊ばせた。そうしてシオンは大剣をゆっくり振り上げた。恐怖は無い。別に死を認めたらじゃない。

決めたからだ、俺がどうするか。後の事はその時考える。

「お前を嘔吐きにさせねえ！」

俺は左目の眼帯を乱暴に投げ捨てた。左目でその糸の線を即座に全て把握した。

シオンを操る糸は全部で七つ・・・俺は足元に落ちていたアントワネットの放ったカードを一枚拾い、糸に浮かぶ線をなぞった。その感覚は確かに糸を切ったものだが、感覚異常にそれはひどくあっさり切れてしまった。

それは、自分でも驚く程迅速で丁寧、無駄のない動きだった。ほとんど一瞬にして、シオンを捕らえたその操り糸は力無く、床にひらりと落ちた。

「ありがとう、レン。」

「……………!」

急速に流れる吐き気と、激しい頭痛。数えられる程しかこの目を使ったことは無いが、その度にこんな酷い状態になってしまふ。

手で口を押さえるが、耐え切れる筈も無く膝を付いて簡単に吐瀉ていせつした。吐瀉しても、その頭痛は治まりはしない。

「っはあ、はあ……つづう……つくうう……!」

「レン……しつかり」

シオンは俺を抱き寄せ、大剣をノアに向けたまま、動かなかった。いや、動けなかった、かもしれない。

だが、それはノアも同じらしく妙な事に口を閉ざしたままだった。

「ノア様……神具の修復が起きません。これは……」

「……………恐らく……直死の、魔眼のようだ……」

ノアは無言を保ったまま、俺とシオンに近づいてくる。さっきと雰囲気が変わり、違った不気味さが漂っていた。シオンの俺を抱き寄せた腕に力が込められる。

「……シオン・ストライト。戦闘の意思は無い。だが彼に尋ねた
い事があるのでね。なに、瑣末なことだ。」

シオンは大剣を下ろさないまま無言を保った。ノアはその返事をよしと受け取ったのだろう。

「もしかして君は、七年前にバスの横転事故で一年間、天美病院
にいた子、かな？」

「……………あ、ああ……」

ようやく頭痛が落ち着き言葉が出るようになったが、今のノアの質問はおかしい。明らかに俺を知っている。それを聞こうとしても頭が痛くて言葉は上手く出てこない。

「そうか……アントワネット。今日はもう帰ろう」

それは更に意外だった。何をするでもなく、ノア引き退がろうと

言ったのだ。

「・・・待、て」

「大丈夫。また今度逢おうじゃないか。今度は君が落ち着いた時にでもね、レン」

ノアは俺に言い残しながらアントワネットと教室の扉に向かい、

「ouvert」

と少女が唱え、扉を開けた。出る直前、ノアは振り返った。

「旧知に出逢えて私も気分が良い。御二方、今日はもうお休み。

君は無理だが、レンの方は歪に襲わせる行為を控えさせておこう。」

そう言い残して、教室から出て行った。気が付くと、教室内は俺たちが入る前の、机の配置が整ったままの教室に戻っていた。

敵はいなくなった。それだけのこともかもしれないが、それだけで室内を包んだ異様で濁っていた空気が無くなっていった気がした。

悪夢から覚めた、実感ある表現をするならこの言葉ほどしっくり来る。

「さてレン」

シオンは寄せていた俺の身体をロッカーに預けさせた。

「わたしからも貴方に尋ねたい事は多々ありますが、今はそんな状態ではないでしょう。癩ですが、ノアの言うとおり今日は休みましょう。」

シオンは立ち上がって俺の身体を立たせ、腕を肩に回した。確かに、シオンの方が傷は軽いとは言っても少女にそうされるとは思わなかった。そして改めて気付いた。

この調律者の小軀こがらで華奢な細い身体。

そうか、シオンも一応、女の子って奴だしな。俺と同じか一つ下に見えるし。

「・・・すまない、助かった」

自然に、俺の口が言った。シオンは顔を向けるが、

「わたしからは感謝をさせてもらいたい。ありがとう、レン。」
なぜかは知らない。けど、シオンは本当に嬉しそうに微笑んだ。

それは薄い笑みでなく、不器用だけど力の抜けた、自然な笑みだった。一つ惜しいことに、その笑顔が霞んだ目で認識され、はつきりと見えなかったことだ。シオンの声が、感覚が遠くなる。

それはただ眠いだけのか、血の流しすぎなのかは、あるいは両方かははっきりしないが、糸が切れたように、俺の身体は倒れこんだ。恐らく、シオンを巻き込んだかも知れないが、俺にはもう意識が無かったから、なにも感じないし、聞こえもしない……

「そんなの、絶対ダメだよ」

「へえ、ということは君は一年半も寝ていた訳だね。」

「・・・みたいだよ、自分ではそんな実感無いからよく分かんないけど」

それは妙に暖かい長閑な一月の昼頃、見知らぬ中年との男のいる夢だった。といっても、多分この時にも互いのことはよく分かってないかもしれない、そう思ったのだが俺は、いつからだろう、男を名前で呼んでいた。

「ねえキリツグ。キリツグは魔法使いだって言ってたけど、本当なの？」

「うん、本当だよ。」

「じゃあさ。俺のこの左目の治せる？」

「・・・」

尋ねられたキリツグは、どこか申し訳なさそうに下を見た。俺に悪気があった訳じゃないと思うけど、自分が悪いことを聞いた気がして、それ以上は聞けなかった。

代わりに、逢った時から気になっていた質問を聞いてみた。

「どうしてキリツグは、俺に時々こうして逢いに来るの？関係ないのに」

「そうだね。僕と君には接点も無いし、一緒に道理も無い。けど、君が彼だから、かな？」

時々、キリツグの言っていることは分からない。俺は訝しく頭を傾げた。

「息子がいてね。彼は君同様の境遇なんだ。僕が助けられたの他の誰かだったのかもしれない、彼じゃなかったのかもしれない。けど僕は彼を選んだ。彼が士郎だからじゃなく、そこに士郎が偶々いた、ただそれだけだったんだ。」

「シロウって、キリツグの息子だよ？でも今の話・・・」

「うん。僕は本当の親では無いんだ。話すと難しいけど、そういうことなんだ」

実際、俺はそれ以上は聞かなかった。話の内容が抽象的であるがそれ以上に、なんとなく、深入りしたらいけない気がして、俺は窓の外を見て沈黙を保った。

それにこの頃、気のせいかキリツグは体調を崩していたのだろう、顔色は決して良いとは言えなかった。以前少し追求したが、まさかと言って誤魔化していたが、柔らかい、とは違う力の抜けた表情がやけに気になった。きつと何を言っても彼は誤魔化すだろう、俺は追求を止めていつものように彼との会話を行っていた。

「・・・それならば、家に帰ったら？」

「え？」

珍しくキリツグは驚いていた。家にも帰らずこんな場所にいる彼の方に俺は驚いているというのに・・・椅子に腰掛ける彼は、ふうむ、と一度悩ました。

「・・・弱音を言ってしまうとね、僕は戻りたくないんだ。君は僕の体調を窺うかがっていただろう？察しているかもしれないが、僕はもうあまり長くないと思うんだ。」

それは俺の予想の外だった。精々風邪とか筋肉痛だの、悪くても重度の病気をこじらせたものと思ってなかった俺には、シヨックが大きかった。

長くない、それは子供でも大体の意味は掴めるかもしれない・・・

「・・・な、なんで」

「出来ることならそれも聞かないで欲しい。君にはとても隠し事が多くなってしまったけど、これは聞いて欲しい。そう、僕は一人で死のうと思う。元より僕は魔法使い。ましてや異端いじょうと月並ふつうが交わるなんて、痴おこがましいと思わないかい？だから僕は元の世界かえに戻るだけだよ。だから」

「そんなの、絶対ダメだよ」

やっぱりキリツグの言っていることはよく分からない。けど俺には快く思えなかった。

「俺、キリツグの言ってること、難しくて分かんないけど、それはダメだと思う。キリツグがそれで良くて、息子はどうするんだよ？血が繋がってないからどうでもいいって言うんじゃないよね？」

「いやまさか」

彼は涼しげに言った。それが他人事に聞こえ無性に怒りが込み上げた。

「・・・ねえキリツグ。俺、今記憶があやふやだからよく覚えてないけど、子供は親といるのが普通なんだ。親が変わっていても、子供にとって親は代えが無い、と俺は思うんだ。そんな弱音は俺じゃなくて、息子に言っただけいいんだ。だからお願いだよキリツグ、自分が選んだ選択を途中で投げないでくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらくの沈黙の後、キリツグは溜息を吐いた。それは不幸なことではなく、むしろ悪いものを吐き出したような、清々しいものだった。世間で言う憑き物が落ちたような、と言ったところか。

「そうか・・・そうだね。今の僕は親、だったね。そうだったね」
自分に確認するように、彼は何度も口にした。

「蓮は優しいんだね」

「べ、別に・・・普通だろ、そんなこと」

「・・・そうだね、僕はまだ親だ。やっぱり帰るよ。太郎のいる家に。まだ色々教えてないからね。そうだ、君も機会があれば冬木に来るといい。僕はいないかもしれないが、自慢の息子ならいるから何時でも訪れたらいい」

キリツグは立ち上がって、俺に背を向けて病室の扉に足を向けた。

「キリツグ」

彼は振り返った。恐らく最後の会話になるかもしれない。だから、言っておきたかった。

「あんたに逢えて良かったよ。キリツグが親だったら誰だって真

似するから、あんまり悪いことは教えないですよ。」

俺とキリツグは互いに笑い返した。

光は、彼の背中を見送るように徐々に差しだした。

俺が知るはずも無い余談だが、その約半年後に、キリツグは亡くなったという。もし知っていたら病院を抜け出してもキリツグに逢いに行っていたかもしれないが、過ぎたことはもうどうしようも無い。

……この一月を期に俺の短かった、日数にして15日の優しく穏やかな日常もそうして終わってしまったわけ……

よく聞くだろ？ 好い事はそれほど長続きしないって……

intermission 「じつじつとだったんだ」

そこは廃墟の建て物。主と使い魔は悠然と戻るが、それはとても穏やかな表情では無かった。

「まったく、少々手痛く遭ってしまったものだ。」

受けた傷からではなく、ノアは単純に、その身の燕尾服が薄汚れ細かく刻まれている事に不満を小さく吐いていた。脱いだ上着を普段にかけている古びた椅子の背に渋々掛けると、

「アハハハハハ！ノアボッコボコじゃん！ダツサっ！」

カツツ、と軽い靴音と共にワンピースを着た少女が、舞い踊るように身体を回転させ、ノアの前に現れた。

肩に掛かった緑色の長髪を後ろにかきあげ、言葉を続けた。

「でもアンタでも殺せない奴っているんだねえ。それってアレ？相手が強かったから？それともアンタが弱かったから？」

無邪気に悪態を浴びせる少女に対して、アントワネットは静かに睨んだ。

恐らく視線に気付いているのだろう。少女は咎めることなく、少女は高笑いをしていた。

「ふうむ、明らかな後者だろう。事実、彼女の力量を見誤ったしまったのは私の失態。しかし、この程度の傷で済んだことは運が良いい言えよう。」

「ふーん。ま、私はどっちでもいいけどね。」

「……ノア様を愚弄するな」

少女は横向きだった身体を少女に、正面から見据える。

「ハア！？なんで私が文句言われなきゃなんないのよ！別に私に関係ない話じゃない！」

怒りを露わにする少女。

更に追い討ちを掛けるようにペンを走らせた。

「というより 前々からあなたのこと嫌いだったのよ。ノア様を愚弄するその愚行、見置くことは困難ですね。」

ノイズは怒りに歯を噛み締め、ギリツ、と擦りあわせた。

「奇遇ね、私もアンタが死ぬ程嫌いなよ！いつもノアにベタベタしちゃってさあ！・・・正直目障りなのよ。」

ノイズは徐々に落ち着いたらしく、悪戯に笑っていた。

対してアントワネットは、ノイズを睨んだまま小さな手で拳をつくっていた。

「なあに、ヤル気い？アンタみたいなのがウザいんだよね。ノアの腰巾着風情が生意気言っ」

「その辺でいいだろう？」

二人、特にノイズは驚愕していた。

今さつきまで椅子に座って本を読んでいたはずのノアが、二人の気付かない内にノイズの後ろに回り込み、その小さな頭に左手を乗せていた。

「ノイズ、続きは私に対してなら幾らでも構わない。だがアントワネットに対しての侮辱だけは聞き逃さないな。ノイズ、ここで君は私に何をすれば許されると思う？」

表情や口調は穏やかだが、放たれる異様な気配にその視線にお圧されこの場の二人は、動くことも話すこともできなかつた。

「・・・ゴメンね。少しやりすぎた。しかし、私の目の前でだけでも、彼女への罵倒は控えてもらおう。いいかな？」

ノアの手は頭から耳元、肩にと順番に優しく撫で下ろした。

「は・・・はい、すみません・・・」

無邪気な声に明るさは無くなり、震えだけが顕著だった。

「君もそれでは会話に困るだろう？戻るといい」

アントワネットの顔は縦に動いた。

白い日傘を畳み、先端を床に二回軽く叩くと、座り込むと自身を覆い包むように傘を広げた。

すると、手品のように傘から梟がサツと現れ、ノアの肩に着地した。

「ノア様、失礼ながら、先程のノイズの無粋な声で思い出しましたが、昨日、あの男を始末しなかったの如何様な理由で？」

ノアは読んでいた本を閉じ、その手でアントワネットの頭を撫でながら優しく言った。

「私が以前少し話した「ルーツ」の話覚えてるかい？」

「はい。でもその話とあの男になんの関係が？」

「まだ君にしか見せられないが、こういうことだったんだ。」

ノアはシルクハットの鍔を上げ、右目の片眼鏡モノクルを外し、少し帽子から覗かせた顔をアントワネットだけに現した。

「これは・・・」

「まだ確信はない。恐らく彼は黒だろう。だがそれでもまだ漆黒とは言えない。」

言葉を失ったアントワネットを置いて、ノアは片眼鏡モノクルとシルクハットを戻した。

「なんかよく分かんないけど、あの男は殺さないって感じ？」

「そういうことになるね。しかし調律者の方は始末しても構わない。」

「じゃ調律者は私！でも今の言い方だと、アンタは行く気が無いみたいね」

ノアは口元を歪あやしく釣り上げ、笑みを浮かべた。

「少々私用でね。明日やりたいことがあるから、君もどうかね？」

ノイズは悪戯に笑みを含ませ、強調するように顔を近づけて訊ねた。

「面白そうね、私もさせてもらおうじゃないの！ナニをするか聞かせてごらん！」

intermission 「じつじつとだっ たんだ」 (後書き)

ノイズ (年齢不詳)

髪の色：緑 瞳の色：赤

短所：気が短い

嫌いな状況：静かな場所

(あくまで) 声優のイメージ：「小清水亜美」

chapter 1.5 「それは無理だろ」

「・・・ん・・・」

「ここは？たしかさつきまで保健室にいたはず・・・」

「まったく、まさか電話に出ないなんて困ったもんだな。」

玄関奥から洋兄の困惑する声が聞こえてくる。暗がりにも目が慣れると、今自分が職員アパートに帰ってきて、自分の部屋で横になっていることに気がつく。多分、洋兄が抱えたのだらう。

仰向けに横たわった身体を不意に転がした。

「うおっ！」

すぐ目の前の、ぶつかりそうな程の距離にシオンの顔が視界に埋まる。

「・・・いや待て。なんでシオンもここにいる？」

色々疑問があるが、疲れのせいで頭で考えるの面倒だし、腹も減ったからとりあえず身体を起こすことにした。

「お、やつと起きたか。随分疲れてたんだな。」

電話を耳に当てながら、洋兄は俺に目を向ける。今の言い方として時間が結構経っているらしい。壁にかかった時計をしてみる。

時計は10時22分、をさしていた。

あれからたったの三時間ちよつとも経っていたことに驚いていた。間違えば死んでいたかもしれないあの場所からそう遠くない場所だからなおのことだった。よく見てみたら着ている服が制服から私服に着替えられていた。

「なあ洋兄。これ・・・」

「案外大変だったんだぜ。二人を背負ってここまで来るのは」

「そうじゃなくて、俺は着替えられてるんだが、まさか・・・」

敢えて何も言わず、布団を被されたシオンに目を向けた。

「それは無理だろ」

まあそうだろうな、さすがにするわけないか。

と、こんなことしてる場合じゃないな。とりあえずどうしようか。飯を食べる気力も無いし、風呂でも入って・・・

「ううん」

部屋の中から、シオンの頂垂れ声と共に身体をゆっくり起こした。

「大丈夫、なのか？」

「少々痛みますが平気です。」

シオンはそう言うが、左腕を庇うように押さえ、表情から微かに苦痛が見えた。

「さて高梨さん。こんな状況で言うのもなんだが、保護者に連絡付かないんだ。だから少し落ち着いたら家まで送るよ。それで大丈夫かい？」

「保護者？それってさっきの電話のやつ？」

「ああ」

なるほど、そういうことか。洋兄の対応は教師としては至極普通だが今の俺にはそれが有り難い。厄介なのからひとまず解放される訳だ。

「『・・・恥ずかしながら、わたしの両親は蒸発してしまい、自宅には誰も居ないので。』」

シオンは突然両膝を曲げるなり、丁寧に両手ついてそう言い出した。

「・・・は？」

シオンの言ってることが分からない。俺にとってはそれがなんでもないバカな嘘だというのは分かっている。一体なんのために・・・？

「・・・まさか

「『かと言って、一人で生活するほどの術を持ち合わせていない故に帰るに帰ることも出来ません。出来ることでしたらこちらで世話になってもらってもよろしいでしょうか？』」

本当に言いやがった、クソッ！しかし、ここで止めなければ面倒

なことに・・・

「いいか高梨。そういうのは他の」

「まあまあ訳アリなら良いじゃないのか。なんならこのまま住みなよ。多い方が楽しいだろう？」

マジかこの人！しかも何気に話が飛躍してる！

「ちよつと待て！それ本気なのか？！本当かどうかも知らないで

・・・

言葉を遮るように、頭にポン、と手を置かれた。

「それに、俺の勝手な考えだけどほんの少しお前に似てたからさ
洋兄は少し苦笑いを浮かべていた。

「・・・はあ」

諦めて溜め息を吐く。言い出したら聞かないのは知っていたのに、
この場面で発揮してしまうなんて・・・

「・・・分かったよ。今日は泊めよう」

「よっしゃ！そうと決まったら飯・・・」

「とりあえず高梨は適当に着替えてこいよ」

「そうですね。ではお言葉に甘えましょう」

したり顔を微かに浮かべていたシオンに着替えを促して、とりあ
えず俺は部屋から出て台所へ向かう。

「・・・なんだよ」

「いや、なんでも」

やけに後ろの洋兄の機嫌の良さが妙に気になったが、あまり気に
しないようにした。

「所詮俺は嘔吐きだから。」

「さて、どうするかな・・・」

料理自体はなんでもいいと思うけど、別に手軽なでもいいのだろつ。

シオンはともかく今の洋兄が、

「レ〜ン〜、お兄さんはお腹空いて死んじゃいそうだよ〜」

こんな感じだし。しゃんとしてくれ、体育教師。

「・・・よし、今日は雑炊だな」

「待った！まさかとは思うが、蓮、体育教師の胃袋の容量を知らないだろ？」

「はいはい。その分、明日たくさん作ってやるから我慢しなよ」

「よし、言ったな！確かに聞いたからな！」

そう言うつと、部屋に戻って着ていたスーツを着替えに行く。

「たく、子供か、この人・・・」

「一応、アイツにも聞いてみるか」

一瞬考えたが、何はともあれ、シオンは俺の命を救った。それは事実だ。感謝、とは言わないがその借りは小出しに返さなきゃ自分が許せない。

仕方なしに、洋兄とは別の、閉じられた俺の四畳半の部屋をおもむろに開いた。

「なあ、お前は雑炊っ・・・」

「・・・」

「ツットン！」

勢いよく、壊れたかと思えるくらいの速度で戸を閉める。

「蓮？どうかしたのか？」

「『な、なんでもない！』」

・・・シオンはまだ着替えの最中だった。完全に油断した・・・
(くそっ・・・思わず一瞬見惚れてしまった・・・)

それは全くの事実だった。焼きついた光景は、月に照らされた銀髪が静かに流れるカーテンのように美しく、その中に佇む肢体は白磁のようだった。それらが、部屋の明かりが点いていない暗がりだったからなおさら強調されていた。

あの鎧姿から考えていなかったが、膨らみのあるソレや身体付きにはクラスメイトから感じない魅力に満ちていた。

「……いや、あくまで事故なんだが、こうしてシオンを見てみると……ちよつときれ

バスッ!

頬元に冷たい戦慄が走る……

大剣は閉じられた戸から俺の顔の真横ギリギリを通過した。

そうだった、俺は今大罪を犯したんだ……戸に空いた穴の向こうから覗かれたあの碧の眼は羞恥と怒りに震えているのが、不思議と確認できた……

「……その勇氣は買いましょう。ですが、相手が悪かったようですね」

「ち、違うんだ!」

何が違うのか分からないが、少なくとも、故意ではないことを理解してほしくて、ただただ否定する。

「気に病むことはありません。ですが、相応の痛み分けは覚悟して下さい。いえなに、少々この剣で殴打されるだけで事は済みますので心配はいりません。」

やばい、もの凄い心配になってきた……

心中穏やかじゃない、という状況に真剣に出くわしたは初めてだ。いつもと変わらない声色で話しているが、あの夕方の教室に入る時の奇妙な感覚を、閉ざされた四畳半から感じた。

「……いや、ていうか待て。」

今シオンは「殴打」と言ったが、その直前に間違いなく突いてきたよな?

「……ヤバイ、このままだと殺される！俺はどうすれば？助かる？そもそもなんで同盟相手に命を狙われなきゃならない！？」

「……弁明があるなら遠慮無く申して下さい！」

よし！チャンスだ！ここでどうにか！

「いいか。アレは事故で」

バスッ！

二つ目の穴から鈍い光が足元に現れた。

「うわっ！」

「酷く見苦しい言い訳を！貴方のその腐抜けた性根を矯正しましょうー！」

全然遠慮させる気全くないぞ、コイツ！

今気付いたことだが、さっきから妙に静かだと思っただらこんな時に洋兄もいないし……

こんなことで死ぬ？ふざけるな！

そっちがその気なら、こっちも……俺は眼帯に指をかける。

グウウウウー

四畳半から響く気の抜ける音。

この間抜けな音、まさか……

「……お腹空いたのか？」

「……」

のようだ。

さっきまでの暴挙と変わって、急に大人しくなるシオン。それが可笑しくて、つい少しだけ笑ってしまった。

「着替えたら出てこいよ。飯作っとくから」

ガラッ

「はい」

部屋から洋兄のワイシャツを着て俺の半ズボンを易々身につけていると、普段とは印象の違う軽い服装のシオンが現れた。

まさかと思うがあのもやり取りをしながら着替えてたのか？どこにそんな間があったのか分からないんだが……

ただそれ以上の驚きが、今が原因だからか、隠しきれていない羞恥の表情を逸らしながら部屋を出て、黙々とダイニングの小さな卓袱台に小動物みたいに正座をした。

「・・・怒ってるのか」

「怒ってなんかいません！」

「ふうん。じゃさっきの音は？」

「別に空腹だった訳ではありません！『わたしはただ食事を取りたい気分でしたので部屋から出ただけです！』余計な詮索はいいですから、早急に夕食を作って下さい！」

恥ずかしそうにうつ向き、覇気を感じさせない今のシオンは、どこにでもいる普通の女の子の姿、だった。

「確かに、これ以上は本当に死にかねない。止めておこう。」

「・・・はいはい。すぐ作ってやるから待ってるよ」

近くの冷蔵庫を開けるが、大した材料が入ってなかった。

そうか、洋兄が買いに行っているのだろうか。きっとそういうことだろう。

「リエから聞いていた印象とは随分異なりますね。思いの外、人との会話も饒舌じょうぜつじゃないですか。」

「・・・さあな、分からない。というより、自信が無い。」

冷蔵庫を閉めた。

「今までもろくに話をした人間が洋兄と理恵だけだったからさ。『ある事情』で友達つてのがいらなくなつてさ・・・」

気が付けば、シオンはこんな下らない話を真面目に聞いていた。

それに気付かず俺は冷蔵庫を見たまま、一息吐いて言った。

「なんで俺は俺なんだ・・・いつ考えてもつくづく嫌になる・・・」

台所の棚を背にし、疲れたように凭れた。いや、疲れてるんだと思う。そうに決まってる。じゃなきゃこんな独り言、言っわけがない。

「わたしで良ければ、話を聞きましょうか？」

シオンは一時前のうるたえる顔から、元の冷静な表情に戻った。

「別に真面目に聞く必要はない。所詮俺は嘔吐きだから。」
もう嫌だ、風呂も飯は明日にしよう。今日はそんな気分じゃない。
とにかく楽になりたい・・・

「・・・わかりました。わたしからは何も言及致しません。」

俺が傷の入った四畳半に足を運び、戸を引くと後ろから声がした。
「ですが、あまり一人で抱え込まないで下さい。貴方がそれを重
く感じたら、遠慮なくわたしに分けさせて下さい。」

お節介な奴だ

「・・・それなら明日理恵から分けてもらえよ。一応、アイツも少
しは知ってるみたいだから」

言いながら部屋に入り、戸を閉めた。

そして、俺は何かから隠れるように布団に覆い被さって目を閉じ
た。

chapter 2 「……何をしたんだ、高梨」

ジリリリリリリ……

毎朝の甲高い目覚まし時計のアラームで目が覚める。

「だるい……」

棚の上の眼帯を着け、疲労が回復しきってない身体を無理矢理起こした。

「……ん？」

身体を起き上げよう手を床につけるが、布団とは違う柔らかな感触が手を包んだ。

その正体は……

「ああああああ！」

「どうした蓮！」

慌ただしく洋兄が、戸を勢いよく開け、その光景に眼を疑わせていた。俺、いや誰だつてびっくりするだろう。俺の布団の隣に「高梨」が無防備に眠りについていた。

更に、その手の先を追うと太腿に伸びていた。当たり前だがしたくてしたんじゃない。完全な事故だ。

続いて、恐る恐る顔に向けると、覇気を帯びた怒りの瞳が俺を捉えていた。

「蓮……朝、いや昨日からナニして？」

洋兄の声が動揺で震えてる。

「よ、洋兄。ちょっと信じられないと思うけど、俺は何もしてない！」

「……てことは、この高梨さんからってことか？」

いや、性格上それも違う気がする。しかし、実際に隣で寝ているから真意が全く分からない……答えに迷っていると、

「……ほう、貴方は私の裸体を覗いただけでは飽きたらず、こ

のような破廉痴な事を・・・」

やはり、目が本気だ・・・洋兄の目の前であの大剣を見せる訳にはいかない。

その洋兄も唾然したまま動かない。

「兎に角、その手をどけて下さい。・・・早々に矯正を行います」
完全に言い切る前に手をどけた。簡単に命を差し出せるほどバカじゃないし。

「それより良いのですか？もうそろそろ通学の時間では？」

「まさか。今日は一時間早く起き」

シオンが真面目な顔を見て悪寒が走った。携帯電話を開いて液晶を眺める。

8時16分

・・・

俺を起こした目覚まし時計に振り返ると、問題無く8時17分（一分経過）を指していた。

早起するべき洋兄の仕業ではない。俺なら尚更。

「・・・何をしたんだ、高梨」

「何をつて、通学に最も適した時間に起床しただけですよ。」

実に完璧ですね、と口にしそうな程自信満々に腕を組んでいた。

「いいか？もつと早く起きないと、この「洋平先生」は確実に遅刻するの。それは分かってる？」

「・・・」

やはり、先生がいることを完全に計算に入れてなかったようだ。

シオンは目を上に逃がしたまま沈黙しただけだった。

「・・・学校行くか」

8時21分。

朝飯も風呂も無理だから、着替えだけしてアパートを出た。

「そう言えば、昨日ノアが言ってた「しんぐ」って何？」

「ああ、神具ですか？」

席に着くなり、不意に鞆に入っていた英語の教科書を見てなんだか思い出した。なぜかは知らないけど。俺は前を見たまま椅子を後ろの席に預けさせ、シオンの話を注意して聞いた。

「よく覚えていましたね。神具とは、魔法を促進させる道具です。例えば、生物を操るジョバイロは「糸」、別空間へと繋げる扉のゲイツ・オブ・ヘブンは「鍵」。それらのように、其々の能力が道具を媒体として発動出来るのです。故に、能力次第では破壊の必要があるのです。」

「待て。壊す必要があるのか？」

「ええ。その前にレンは、この世界に存在する「魔術」と「魔法」というものをご存知ですか？」

魔術、と、魔法。それは一緒じゃないのか？

俺は首を傾げる。

「ではそこから。確かに、語感こそ酷似していますが、その実、全く違うのです。魔術は人為的に奇跡を再現する手段の総称です。魔力の使用によってルールの起動、又は安定を行い奇跡を発動させるものですが、魔術は等価交換が原則となっています。決して万能ではありません。対して魔法は、それとは異なり、実現が不可能とされる事柄を可能とする為、現代において魔法使いは僅か五人と確認されています。故に、神具の所持者は魔術師であろうと一般人であろうと、魔法使いに変貌させる恐れもある為、原則的に破壊を優先しています。」

……難しすぎて言葉の半分も理解できていないかもしれないが、神具がどういったモノかは分かった気がする。

「一般人でも使えるって言ってたけど、俺でも使えるてしまうのか？」

「使用条件によりますが、不可能ではありません。」

「ふーん」

まるで漫画やアニメみたいな話だ。でもそうは言われても、意味が伝わっていないのもあるし漠然としすぎているせいでピンと来ないからだと思う。

「いよっ、蓮。」

不意に横から声がした。それはいつもの明朗な幼馴染の声だった。

「なんだ、平沢か」

「なんだとは何よ、失礼ね」

機嫌が相当良さそうだ。平沢を俺の肩を叩くなり、自分の席に走って行く。

「ふふっ、微笑ましいですね」

「そうか？いつもより機嫌が良さそうなくらいだろ？」

「・・・そうですね」

顔は見えないが、その声色はどこか高揚しているのが分かる。一体何がなんだか・・・

「何も言わないでくれ。」

平沢は一息吐いて、俺を真っ直ぐ見た。

「あんた昨日、俺に関わらないことが理解の証拠、とか何か言っ
てたよね？」

確かに言ったが、それがなんだろう。

頷きもせず、黙って聞いていた。

「私はね、それは違うと思う。ううん、絶対に違う。人と関わら
ないでその人をことを知ろうなんてアホな話、いくら考えてもやっ
ぱ有り得ないから。」

内心、少し驚いていた。

昨日あれだけのことを言った筈なのに、平沢はむしろ近づいてき
たような気がした。

「だからいい？私はそんなアホな真似をするより、真っ向から仲
良くなって、理解して、そうなって知り合いとか友達になるんだと
思う。昔も私たちがみたいに。」

昔の私たち？

なにがあつたんだ、一体？

一気に話したせいか、平沢は机に置いていた500ミリリットル
のお茶の蓋を開け、勢いよく一口飲んだ。

それ、俺の買ったヤツ

「・・・てな訳で、私は我が道を行くやり方で理解していくから。
蓮が何言おうと、勝手に付きまとしてやるから、覚悟しなさいね！」
平沢はすっかり眼鏡の位置を直し、へへっ、と笑った。

妙な迫力に少し圧倒され、不覚にもたじろいってしまった。

「・・・お好きにどうぞ」

投げやりな返事にも気にすることも無く、平沢は俺のお茶を取り、
今度は全て飲み干した。

「っぷう。やっぱり、あんたの作る弁当はいいんだけど、選ぶ飲

み物はなんか微妙なんだよね」

「じゃ飲むなよ。ていうか、さっきから知ってて飲んだのか。」

「へへっ、まあね。」

誇らしげにピースサインを送る。

いつにも増して笑顔の眩しい奴・・・

「・・・そろそろ席に着けば？ホームルーム始まるぞ。」

「やつば！じゃ、またね」

忙しく机と机の間を縫いながら、席に戻っていった。

平沢の離れたこの周辺に、また落ち着いた空気が流れた。

「またね、か」

「レンは良い友達に恵まれましたね。」

何故シオンが嬉しそうなんだ？

振り返るのが面倒だから、そのまま前の黒板を眺めながら答えた。

「人のことを考えようとしな、うっとおしいだけの奴さ。」

「うっとおしいなら、最初から話を聞かないことが得策だったでしょう？」

シオンに言われて初めて気が付いた。

確かに、あんなこと全部聞く必要無かったと思う。

「気付いています？貴方は周囲の人間に恵まれています。思う人も心配してくれる人も居ます。貴方自身が何を思おうとも、皆は貴方のことを」

「頼む。何も言わないでくれ。」

少し振り返り、シオンを横眼に呟いた。

「俺は、そうしていい人間じゃない。」

また前に向き戻った。

そうさ・・・

死神の俺に、そんなものを求めさせるなんて、そんな馬鹿な話は無い方がいいに決まってる。

「・・・・・・・・！！」

咄嗟に外側の窓を向いた。

今、はつきり化物の気配が
・・・・・・・・なくなつた？

今確かに・・・

「どうかしましたか？」

「『いや、なんでもない』」

多分気のせいなんだろう。

最近色々あつて気が張つてるんだろ。

あまり考えないようにして、また前に向き戻した。

「そうですね。一時限目はご存知で？」

「体育だろ？ 『俺は風邪気味だからちよつと保健し

体育はおおよそサボる気だったが、

「それはいけません！」

シオンは唐突に両肩を掴み、俺を強引に机に引き寄せた。

「そういう時にこそ、運動が一番なのです。運動は身体の鍛錬に

もなりますから、逃避は私が許しません。」

そう言っているが、その声ははしゃぐ子供のトーンだぞ、シオン。

自分が楽しみただけだろう。

かといってしつこいから、言っても離れないだろうし・・・

「授業出るから静かにしてくれ・・・」

折れざるをえなかつた・・・

「むしろ有り難い話だ。」

おおよそ一ヶ月半ぶりに体育着を来て、グラウンドに来た気がする。

成績の問題もあるからそろそろとは思っていたが、ただ他人に言われて授業の参加はどこか忌々しいが、仕方なく出ることにした。

「お、蓮。体育久々じゃん！やつと外の空気が恋しくなつたみたいなの？」

「高梨がしつこいから来ただけだよ」

「へえ。ホント仲がよろしいんですねえ、お二人は」

なんなんだこの平沢の奇妙なテンションは・・・

ちなみに俺にとっては、体育もクラス行事と大した差も無いほど、避けたいものだった。

人との距離が近くなる授業が体育、イベントが行事だからだろう。嫌になるんだよな、この距離感・・・

「おおーしい。授業始めつぞ。桐嶋、しばらく来てなかったがどうした？またサボりだったか？」

体育教師の大田が嫌味らしく俺に言った。

やっぱり、久しぶりに見ても鼻につく話し方をする・・・

「ええ、そうですよ。さすが先生、よくご存知で」

自身と皮肉を混めて、堂々と答えた。

言ってることはまったくの事実だし。

今の発言が気に入らなかつたらしく、憤怒した大田は体育着の胸ぐらを握り、強く手元に引いた。

「お前、大人をなめてるのか？」

「まさか。俺は本当の事を言っただけですよ。何をそんなに怒ってガッ

不意に頭上に鉄拳が降ってきた。

しかし、その威力は男にしては軽いが、痛みは広がるように表面がやたら痛かった。

「彼には私から言っておきますので、お気になさらないで下さい。穏便に授業を開始しましょう。」

シオンがつくった右拳が少し赤い。

コイツか、犯人は・・・

シオンは大田の指を優しく解き、元居た場所に座らせた。

険悪だった空気は、シオンの登場である程度緩和された気がした。

「何するんだよ急に」

「いえ、これからの授業の環境の悪化を望んでなかったの。」

悪化・・・

間違っではないが、他に言葉はなかったのか？

「桐嶋君、大丈夫？」

隣の香川さんから心配そうに小声で尋ねてきた。

「大丈夫。怪我してる訳じゃないし。」

ほっ、と小さく息を吐いた。

「そう言えば、これから何をしますか？」

言われてみたらそうだ。

俺にも大体の授業がほとんど知らないから、シオンが聞くのはち

ようどよかった。

「今はサッカーなの。桐嶋君が昔得意だったの」

「俺が・・・得意？」

まったく身に覚えがない。

昔って言ってたから多分事故以前の記憶かもしれない。

「あの、ごめんなさい。よく覚えてないというのに、つい・・・」

・・・いや

「むしろ有り難い話だ。」

多少でも記憶のヒントになるなら、やってみる価値はありそうだ。

「レン」

後ろから、やや不安そうなシオンの声が耳に入った。

「サッカーって、何ですか？」

「……理恵にでも聞いてくれ」

コイツって奴は……

「いよー連。」

聞き覚えのある男の声が、足音と共に後ろから近づいてきた。

間違えるはずがない、この声は

「洋兄！なんでここに?!」

振り返ると同時に、白い何か

カッ

と額に命中した。

額を押さえながら、膝に落ちたそれを確認すると、チョークだと確認した。

「洋平先生、だ。久々にお前が外での授業に居るから、はりきっちゃってよ。てわけで大田センセ、俺も混ぜてね。」

分かったよ、大田が渋々了承した。

思わぬ事故ハプニングが発生した。

これには、クラスの生徒全員驚いていたが、ある意味、俺が一番かもしれない。

なんて自由な人。

一見、筋肉質で肉食的印象のごつい外見の大田に比べ、顔も性格も良く整った容姿で、今二人が着ているジャージすら洋兄の方がおしゃれに見えた。

この事故は、クラスには有り難いものだろう。

「ほんじゃあ、いつちよチーム作りましょうか。」

大田をそっちのけで、洋兄1 - 2のクラスを先導した。

「キックオフだ！」

ちよつと待てよ……

確かに学校生活のほとんどを一人で過ごしてきた。

それは認める。

だがこのチームはいくらなんでも酷い……

俺、「高梨」、平沢、香川さん、洋兄。

人数の都合で数が足りないとは言え、あまりに少ない（他に四チームあるが、それらには七人居る）上に、ある意味戦力も問題になっている。

洋兄と平沢は良いとして、多分香川さんはこういうのは苦手そうだし、一人に限っては無知も居る。

俺に関しては、文字通り未知数すぎる。自分でも全く分からない。

「やっぱり来なきゃ良かった……」

「大丈夫よ蓮！安心して私に任せなさいって」

「そうですね。始める前から諦めては良い結果は望めません。」

「どうしよう。サッカーしたことないんですけど……どうしたらいいのかな？」

「いやー、たまには生徒達と一緒に試合するのも悪くないかもな……微妙に協調性が無い。まあ、別にいいけど。」

当然のことだけど、基本こっちのチームの試合の時は、相手はこっちに合わせて二人を抜いてもらい、五対五、の試合に変更してもらった。

「じゃ始めつか。キックオフだ！」

ピイイイイ！

洋兄のホイッスルが、高らかに青い空の下に渡った。

「え、つと、平沢さん！」

始まりのボールは、香川さんから平沢に届けられた。

来たボールを受け止めず、そのまま前に転がしドリブルをした。続いて洋兄、シオン、俺、香川さんと後を追うが、前の平沢が二人に阻まれた。

「高梨さん！」

平沢は敵の居ないシオンにボールを放った。

「高梨さん、こっち空いてるぜ」

洋兄は声を出して手を上げて合図をした。

「先生、お願い！」

「あいよ！」

頼りがいのある返事をし、颯爽と相手の壁を難なくすり抜けていった。

結構、本気でやってるよな、アレ・・・

「そこまでだ桐嶋！」

快調に走る中、洋兄の前に筋肉の壁（ていうか大田）が現れた。その眼には、どこか怒りを感じた。

「前々からお前が気に入らなかつたんだよお！顔が良いってだけで女生徒からチャホヤされて！こころで引導くれてやる！！！」

「へえ、俺そんなに人気あつたんだ。これは先生、冥利に尽きて感じただな」

「黙れ！殺してやる！」

「おいおい、本気ですか。悪いけど俺は逃げさせてもらおうよ。な、高梨さん！」

大田と顔を合わせたまま、その左後方のシオンに的確なパスを出した。

ボールが、吸い寄せれていく。

そこで頭に入った。

そうだ。アイツ、素人だ。

「高梨、ボールよこせ！」

あの最強の素人が何するか分かったもんじゃない。

間違ったら、たかがサッカーで死人が出る事に・・・
だが遅かった

足元に訪れたボールを、無造作に右足で振り抜いた。
次の瞬間

ボールのあつた足元が爆発したように、土が飛び散った。

テレビで見たゴルフで、砂場から打つ時に砂を叩いて弾けさせる
映像を見たことあるが、それと酷似していた。

「「「うわあああ！」「」」

敵チームは吹き飛ばされ、大きなダメージを与えた。

これはいくらなんでもやりす・・・

「うっわ、こりや凄いな。」

洋兄の苦笑い以外、全員が呆然としていた。

なんていうか、それでもやっぱり凶太い。

コツツ

俺の足にボールが触れた。

「・・・多分いいよな」

シオンに視線が集中している隙に、（気乗りしないせいで）ボール
を連れて相手のゴールまで歩き、

チヨソツ

爪先で軽くつついて、ゴールネットに優しく触れさせた。

む・・・虚しい

現実にかかるのか？こんな静寂で、拳動も無い、朝の集団。

ピイイイイイイイ！

始める時よりもホイッスルを強く騒がせた。

洋兄は青ざめた笑顔で俺たちに言った。

「えーっと・・・グラウンドの状態が悪化したんで、今日はこ
れで終わり・・・」

洋兄の声は、多分恐怖で震えていた。

「聞かせて貰えますか。彼の過去を」

あれから数時間、昼休み。

にも関わらず、未だに話題はすっかりアレで盛り上がっていた。

「高梨さんって実は凄い人なんですね。」

「いや、でもあの破壊力はちょっと向いてないね。えと、ドンマイ高梨さん・・・」

ただ驚く香川さんとフォローに回る平沢。

しかし、シオンは机に顔を埋めたまま、起き上がる気配が無かった。

「私ともあるう者が・・・何故、一体どうして？」

珍しくかなり真剣に悩んでいるようだ。

「はりきりすぎなんだろ。お前ならかなり控えても大丈夫だろ」

「・・・いえ、あれでも幾分抑えたのですが・・・難しいですね、スポーツというのは」

サッカー自体大して難しくないと思うが・・・

つか、アレで幾分？本気で言ってるのか？

いや、コイツがそんな冗談を言う奴とは思えない、本当のようだ。

「今度からキーパーだな、お前。走り回るだけでどんな被害が

「よければ今だけはこの話題を避けて頂ければ、大変有り難いのですが・・・」

シオンにとつて「サッカー」はたった今トラウマになったらしい。そういつた単語すら聞こうとしない。

「はいはい、お好きに」

そう言っただけは、手にしていたペットボトルの茶を口に含めた。

「あ」

突然思い出したように、平沢は声を上げた。

「そうだ。悪い蓮。席外してもらっていい？」

「は？」

「女同士の会話、ガールズトークってヤツよ。ほら、お邪魔な男子は行った行った。」

「あ、ああ、分かった。」

妙に平沢のニヤついた笑みが引つ掛かるが・・・

ここは言つとおりにして、一人になっておこう。

そんな時は・・・

・・・食堂行こう。

「さあて高梨さん。本人も居ないし、本音聞かせてもらおうよ！」

シオンの席の隣に香川、前の（蓮の）席に平沢が腰を下ろし、椅子を近付けた。

「本音、と言いますと？」

ようやく顔を上げたシオンは、元の表情に戻っていた。

「いやいや、最近蓮と一緒に居るの見掛けるから、ちょっと気になつてさ。」

「レンですか。彼は只のか・・・」

シオンは「観察対象」を言い止めた。

つい真実を話そうとするが、当然、二人は蓮のような特殊な人間ではない。

咄嗟に眼を逸らした。

「か・・・？ 続きは？」

「もしかして、彼氏、ではないですよね？」

「決して違います！ 私達はそのような間柄ではありません！ 断じて！」

香川の答えに対して、シオンは顔を赤くしながら全否定した。

「ん、なんかうさん臭いのよねえ。ムキになって違つと言われちゃうと」

「私も・・・」

「繰り返し申しますが、違います！ 『私は性格の割に陰気な印象

を感じた、と言述べようとしただけです。『よろしいですか!?!』
シオンの言葉は、必死の苦しい言い訳にしか聞こえなくなってい
た。

「陰気、か。確かにね。でも昔のアイツ、今とは全然違うし
・・・」

不意に平沢は自分が座る蓮の机に眼をやった。

その明朗な眼に少し影が差した。

そこまで言われ、シオンは昨夜言われた言葉を思い出した。

平沢は昔の彼を知ってる・・・

「聞かせて貰えますか。彼の過去を」

「私も聞いてもいい? 私も、なんで桐嶋君がそうなったのか知り
たい。私、当事者じゃないから・・・」

平沢は小さく溜め息を吐き、二人に向き直った。

「ちよつと長くなるけど、いい?」

香川とシオンは、静かに首を縦に振った。

「・・・分かった。けど、信じるか信じないかは、二人次第だから
ね。その前に・・・」

平沢はシオンに顔を近づけ、言いつらいように伝えた。

「高梨さん、最近知り合ったばかりだから知らないと思うけど、
昔のアイツ、眼鏡も掛けてなかったし、苗字も違ってたけど、明る
くて熱い奴ってことは知ってほしいの。」

シオンは黙って、次の言葉を待った。

それから、平沢は窓の外を遠い景色をぼんやり眺めた。

「・・・あれから、まだ四年しか経ってないんだね・・・
・・・」

chapter 3 「それは、四年前の話・・・」

車の通りが少ない町の通学路。

基本的に団体登校での通学が原則だったこの小学校の影響で、朝は特に大勢の小学生が仲の良い友達同士での登校が目立っていた。

「おい、待てよ！」

その中のある男子が、団体を横切っていく、一人の女子を追うように走ってきた。

女子は足を止め、それに男子は追いつくと、肩で大きく息を整えた。

しばらくして落ち着くと、男子は顔を上げた。

「少しは手加減しろよ。競走で理恵に勝てる訳無いって。」

「それは無いって。蓮が体力無さすぎだって。悔しかったら、サッカー部に毎日行きなさい！」

「ジョーナーだ！見てろよ！絶対、まいったって言わせてやるからな！」

それは、四年前の話・・・

それは、小学五年の時の、いやに暑い六月の頃の話・・・

それは、シオンも蓮自身も知らない過去の話・・・

その頃の彼等は、今より子供らしく、ずっと自由で、距離だってもっと近かった気がした・・・

「お、おはよう・・・」

「おう、おはよう。朝見たぜ。お前、いつになったら日課の競走、理恵に勝てるんだ？ノートの記録で「今日で141連敗」を書いてあるぞ。」

いつからのメモだ？

気になったが、口にするのをやめた。

「お前サッカー部なんだろう？けどアレは無いつて」

「体力無いのは生まれつきだから、しゃあないって。明日こそは勝てるさ」

「悪いけどソレ、私はもう聞き飽きちゃったのよね」

不意に後ろから平沢理恵の声が、耳を擦るように入ってきた。同時に悪戯に、耳に吐息を吹かれた。

「のわああ！」

「アハハハハハハ！やっぱ蓮からかうの面白いな。」

「理恵！頼むからそれやめろ！恥ずかしいだろ！」

「おお始まったぞ。みんな、いつものフーフ喧嘩だぞ！」

クラスにはやしたてられ、二人は

「フーフ違う！！」

羞恥で照れながらも、否定の声が重なった。

「はぁ・・・」

一通り落ち着くと、憂鬱な低い溜め息が、蓮の口から吐きだされた。

「どうしたのよ。そんなことしたら幸せが逃げてくよ」

「いや、足がめっちゃめっちゃ痛くてさ。動くのが凄く嫌なんだよね。ところで、今日部活休むわ。」

「ちよつとあんた！せつかくスポーツ上手いんだから、部活続きなよ。」

「冗談だよ、冗談。部活はしっかりやるさ。黒星はもうゴメンだし」

足を手でかばいながら、笑って対応する蓮。

それに気づいた彼女は、より明るく振る舞い、連に親指を立てた。

「その意気や良しよ！頑張れ、男の子！そういえばさ、知ってる？」

「何が？」

「今日さ、転校生が来るんだって。チラッと見てきたけど、可愛い娘だったよ。ま、私には今一步、なところだけどさ。」

「当てにならないな。お前はその気になったらゴジラか、ブロリーじゃん。」

「連、殺すよ？」

言い過ぎた、笑ってるけど眼鏡の奥の眼が本当に殺ル^ヤ気だ。

「おおい、みんな席に着けえ」

教室のドアから、先生が入ってきた。

助かった。先生、感謝する。

生徒は騒がしい教室を縫い歩きながら、それぞれの席に戻っていた。

隣に座った理恵が、小さく舌を打ったのが聞こえた。

「えっと、今日からみんなの新しい友達が、このクラスに来ることになったよ。」

突然の転入生の話題。

再び教室は騒ぎに包まれた。

「静かに。今から紹介するからね。入ってきて」

ドアが静かに開き、廊下から入ってきたのは、下を向きながら、控え目に歩く大人しい女子。

教壇の前に立つ先生の隣に並ぶと、女子は誰とも眼を合わせず、顔を無造作に泳がせていた。

「紹介するね。香川渚さんよ。みんな、仲良くしてね。」

「はじまりの歌」

香川小さくお辞儀をすると、何処を見るわけでもなく、ただ床を見ていた。

「じゃ、渚さんはあっちの席で」

先生は、蓮の隣の、窓際の空いている席に指を向けた。

「こっちこっち」

蓮は椅子を立ち、分かりやすいように隣の机を軽く叩いた。

香川は様子を落ち着かせられず、恐る恐る、ゆつくり歩いてくる。

「ちよつと、早く座ってくれない？ 休み時間終わっちゃうじゃない」

「そうだよ。トイレ行けないだろー」

あまりに行動に時間をかけているせいで、生徒内で不満が溢れ始めた。

その影響で、香川の挙動は鈍り、足を止めた。

「なんだよー！ さつさと座れよ！」

更に罵声が広がってきた。

それに耐えきれず、香川の眼に涙が溜まった瞬間だった。

ダンッ！

強く机を叩かれた、重く乾いた音が響いた。

全員が音の方に顔を追うと、蓮の手が自分の机に強く置かれていた。

すると、彼は怒るわけではなく、眩しい笑顔で言った。

「先生！ 一時間目は自習にしてください！」

静かな教室の中で、その一言は全員には意外だったらしい。

理恵も香川も、先生すら呆然としていた。

「その方が香川さん、いろんな人と話せるから、自習にしてください。ほら、委員長も」

え、と戸惑いの色を出すのが、咄嗟に立ち上がって

「私からもお願いします！あの副委員長には後で言っときますので」

頭を下げながら、横眼で蓮を睨んだ。

「げっ、やばい。」

蓮はそれに気付き、逃げるように頭を下げた。

先生は一つ深く溜め息を吐いて、苦笑って言った。

「必要以上に騒がないこと。いいね？」

二人は言われて頭を上げた。

「ありがとうございます！」

「さすが先生、太っ腹ー！」

「蓮、後で職員室ね」

一時間目、自習。

「えと、お二人のおかげで助かりました。ありがとうございます。」

「大げさだって。俺はただ勉強しなくなっただけだから、あまり気にしな」

「香川さん、蓮は恥ずかしかつてごまかしてるだけだから気にしないでね」

蓮は照れくさそうに下を向きながら鼻の頭を掻いた。

香川の席に蓮と理恵が訪れ、三人で一つの机に固まっていた。

「でも、さっきは怖かったですでしょう？少し間違ったら、あんなのからイジメになってたかもしれないし」

「うん、確かに怖かったです・・・けど、この人のおかげでなんだか、ほんの少し怖くなかったんです」

香川は覗きこむように、蓮の顔を眺めた。

「嬉しいんだけどねこの人はちよつと」

「ご、ごめんなさい！まだよく分からないもので」

「いいっていいって、そういうもんだから。俺は副委員長の蓮。」

ハスって花の名前と同じ漢字だから、かなり難しいけど。で、こっ

ちは

「ちよつと、こつちなんて半端な呼び方は遠慮してよね。私は委員長の理恵。「理」科の理に「恵」みって書くから、よろしくね。」

「そう言われてもあんまり知らないですけど・・・」

「そりやそつか。ハスつて漢字そう書かないし。」

「お前も人のこと言えないぞ。知ってるぞ。未だに理恵の「恵」のどこ、こう書いてるんだろ？」

蓮は手にした鉛筆で、自分のノートにこう書いた。

『理恵』

「ちよつとあんた！なんでそこまで知ってるのよ！」

「いや、微妙に難しい漢字書いて間違ってるから、気が付いたらなんか覚えてさ。」

ハハツ、と軽く笑って話す蓮のノートを奪い、理恵は実際に書き比べた。

恵・・・・・・・・

恵・・・・・・・・

「・・・ホントだ。微妙に下のが簡単だ。」

「だろ。本当にお前はどこか抜けてるからな。へへ・・・はははは。」

「ま、賢くなれたから結果オーライかな？アハハハハ」

「なんだかおかしいですね、二人は」

馬鹿馬鹿しい光景だけど、彼女にとってそれは確かに可笑しいと言えるだろう。

決して理恵のように大声ではないが、香川はクスクスと口元を手で隠して、控え目に小さく笑った。

知り合ったばかりなのに、今の三人は、確かに旧知のように笑い合っていた。

「そこの三人！静かに！」

が、あまりに笑いすぎて、怒鳴られた。

笑い声は治まったが、その顔からは笑顔が少しも曇らなかった。

結ばれたばかりだが、確かに強い絆が生まれた。
少なくとも、その時はそんな気がした。

「願い事ひとつだけ」

その出逢いから三週間と少し後・・・
彼等がそう呼べるような仲へとなったのは、その七夕の日のこと
だった。

「蓮は願い事、なんて書いたの？」

「いや、まだ。あるようで案外無いんだよな、さすがにまいるぜ」
短冊と睨み合う蓮を、理恵は隣で嫌味な笑顔を向けていた。

「へえ？私なんかすぐ書けたから、あんたの苦勞はよく分かんないなあ」

「ほお、そこまで言うなら見せてもらおうぞ！」

理恵の手にしていた黄色の短冊をひよいと軽く奪い、シャーペンで書かれた細い文字を眼にした。

「理想どつりの彼しを下さい」

「ちちちちよつと、何勝手に見てるのよー！」

乱暴に短冊を取り返すが、羞恥によつてズボンのポケットに無理矢理突っ込ませた。

「なんていうか、ドンマイ・・・」

「ちよつと！なんで同情するのよー！？」

蓮は肩を軽く叩いて優しく言ってみたが、彼女にはどうも悪く聞こえたようだ。

「蓮は願い事とか、ほんとに無いわけ？」

「うーん・・・宝くじの一等賞を当てたい、かな？」

そつだ間違いない、と彼は閃いたように口にするが、

（私のよりひどい・・・）

彼女は頭を抱えながら呟いた。

「まあでも、理恵のよりは悪くな

「そうだ蓮。あんた他の人の見てきたら？写すんじゃない参考のために、ね？」

遮るように、声を強くした。

蓮はその言い様のない威圧を感じたのか、

「・・・はい」

と小さく答えただけだった。

蓮は理恵から逃げるように、机の間から間をゆっくり横切り、横目で短冊を確認するが、誰も彼もが書いてる訳ではなく、友達と話をしていたり、寝ていたり、先生がいないことを良いことにやらしい放題だった。

「たく、最近の小学生ってやつは」

蓮が最終的に考えた手段が、

（教室中にある学級通信の貼り紙とか、国語の教科書に何かヒントがあるかもしれない！）

という限りなく苦しい方法だった。

思い立った彼は、自分の席に足を運ぶときだった。

ある一席に四人の女子の人集りが眼に入った。ある種の希望を期待して、その席に向かうと、

その状況は、虚ろに机の短冊を眺める香川を、楽し気に見ている女子たち。

「え？何この状況？」

「香川さん、筆箱無くしたみたいでさ。本当バカだよね」

蓮はその女子の言動にひどく嫌悪した。

香川に顔を向けると、眼には涙が微かに滲み、彼女らはそれを見て笑ってる、彼にはそれが気持ち悪かった。

けど、彼は確信した。

コイツらの中の誰かが隠してるかも・・・

「・・・香川さん、ちょっといい？」

他人に聞かれないために、香川に耳を打った。女子は訳も分から

ず、その様子をただ見ていた。

やがて顔を離すと、香川は驚いたように言いはなった。

「アレ、ですよね？」

そう言われると女子たちは、即座に顔だけを僅かに後ろ向かせた。すると蓮は女子を横切り、ある席まで移動し、机の中を無造作に漁りまわすと、

「これ？」

机の中からクマの刺繍のある可愛らしい筆箱を取りだし、香川に手渡しにきた。

「はい、私のです。けどなんであの席って分かったんですか？」

「そうだよ！どんな超能力使ったんだよ」

方や不思議そうに、方や納得のいかない声が同時に降りかかった。不敵に笑って、蓮は説明を始めた。

「デイレクシヨン、て手品の用語があるらしくてね。望む方向に意識を向けさせる誘導のトリックでさ。さっきお前ら、香川さんの反応であの辺りの席を見ただろ？だから探せば見つかる、て寸法。」

「じゃ、仮に机になかったら？」

「実はもつと簡単。持っていない人全員が持つてる人を見ていただろうし、本人だけが知ってても反応するのは本人だけだし、誰も持っていないなら反応は無し。さて、分かったら謝りなさい。」

「・・・」、「ごめんなさい」

女子は謝ると、そそくさにそれぞれの席に戻っていった。

「蓮さんは物知りなんですね」

「いやいや、最近集めてる漫画であつてさ。かつこいいからなんとなく覚えていたんだけど、まさかこんなに役に立つとは・・・でもさ」

一度言葉を切って、蓮は香川の前の席に座り、向かい合うように腰掛けた。

「俺も、あつちにいる理恵もいるんだから、困ったら遠慮なく言ってもいいのに。友達じゃん、俺たちは」

「とも、だ・・ち？」

「うん。理恵も俺もそう思ってるぞ・・てどうしたの?!」

「れーん、あんた遅・・何してんのよ、あんた」

蓮と理恵が戸惑うのも無理は無い。

さつきまでは溜まっていただけの滴が、突然溢れだしたのだから。

「こ・・んな、こんな私でも、友達って呼んでもらってもいいんですか？」

「なんかよく分からないけど、転入したあの日から私はそう思ってたけどねえ。あんたは？」

「委員長に同じ。て訳で、改めてヨロシク！」

二人は、勢いよく親指を立てた。

泣き腫らした赤い目元に、明るみが出て笑顔が現れた。

「あ、あんた達、早く短冊書かないとヤバイんじゃない？」

「マジかあ！もう「世界平和」でもいいかな？全く悪いことでも無いし。香川さんも速く書かないとマズイから」

「私はいいの・・もう叶っちゃったから」

香川は蓮と理恵を交互に見て、柔らかい笑顔を浮かべた。

その笑顔を見て、蓮はさつきの耳打ちのことを思い出した。

(さつきの、なんで俺の席分かったんだろ？向きはほぼ合ってるし・・まあいつか)

シャーペンを手にし、自分の短冊に芯を走らせた。

「おれたち、ずーっと友達な！」

「finale」

後で知った話だが、香川は転入したその日から、ずっと特定の女子からイジメを受けていたらしい。

助けてもらおうとしても、全員がそうなのかもしれない、という不安から誰にも言うことも頼ることもできなかったという。

そして、あれから二週間弱の23日。

「あー、明日で一学期最後か。めんどくさかったな」

「あんた、毎回学期末にそれ言ってるじゃない？」

「まあまあ、実際この暑さだから仕方ないよ。」

蓮、理恵、香川の三人は、やけに蒸し暑い七月の帰路を歩いていた。

授業自体は早目に終わり、空の太陽がまだ白く光るほど時間はさほど経っていなかった。

「まだ二時ちょいか。俺どうせ帰ってもヒマだし、ちょっと遠くまで寄り道するけど。どうする？」

「私は賛成。渚は？」

「いえ、私はもう疲れたからそのまま帰るね。で、理恵さん」

理恵を連れ、蓮から少し距離を取りだした。

「『ちよつと蓮君に明日のことで聞きたいから、理恵さんは先に帰ってもいい？』」

「明日って、特に日程とか・・・」

香川からの耳打ちを不可解に感じ言葉を返そうとしたが、微かに赤い頬をうつ向かせたその表情から、理恵はその真意を理解した。

「おーい、さっきから何して

「『蓮遅いから、先にあのバス停で私待つとくよ』。それと渚が蓮になんとかって行ってたよー」

「は？」

蓮は状況に追い付けず戸惑う間に、十数メートル先のバス停まで駆け抜けていった。

「あ、ああ、バスで遠出するのか。そういうことか」

呆気にとられて足を止めた蓮は、見送った後、自分の前方で立ち止まっている香川に眼を移した。

「渚さん？疲れたの？」

「蓮、君。話聞いてもらってもいい？」

「ん？別にいいけど。」

少しも鼻に掛けることもなく、蓮は次の言葉を待った。

が、香川は人の気配が薄くなった静かな通りの影響ど、

「あ、さ、たな、ぬ・・・わた、わわたし」

ひどく間の悪い口調が出てくるだけで、ある種、時間が止まったようだった。

「え、えっと・・・バス停行こっか。ここ暑いし話なら落ち着いて

「ダメ！今ここで蓮君に聞いてほしいの！」

大人しい印象の香川の放つ剣幕に、思わず蓮を不意に震わせた。

我に返り、ごめんさい、と小さく謝り、香川は大きく息を吸い込み、一つ頷いて、言った。

「私、れ、蓮君のこっ

ブウオオオ・・・

蓮は、音のなる後ろ振り返ると、

「やべ、バスじゃん！」

一目散にバス停へ駆けて行った。

「ゴメン！明日はちゃんと話聞くんよ！じゃあね」

身を返しながら手を振ると、蓮はバスに乗り込み、彼を乗せたそれは立ち去るようにまた走り出した。

「・・・まだドキドキしてる」

左胸に置いた手に伝わるやけに速い鼓動が心地好く感じ、香川は顔を上げた。

「・・・明日。明日はちゃんと言わなきゃ。・・・蓮君が好き、って」

香川は空気より軽いだろう今の自身の身体を、無理矢理家へと運ばせた。

「はあ！？よく分からない、てどういうことよ？」

「落ち着けて。分からないっていうか、聞こうとしたらバスが来たから聞けなかったんだよ。そりゃ悪いとは思ってるよ」

「鈍感・・・」

「？何か言った？」

「別に」

なんとかバスに間に合ったはずなのに、なぜか不機嫌の理恵に戸惑っていた。

「あ」

窓の外の景色に眼を移した蓮は、何かに気付いたらしく声を上げた。

「何？いつものアレ？」

「うん。また「糸」が繋がった」

「ふうん。いつ聞いても有り得ない話だけだね。」

「全然本当だぞ。俺もよく分かんないけど、凄いんだからな！」

「ていうかウソなんでしょ？」

「マジ」

「いやいやまさか」

「だから本当だって！」

「まあまあ、若いお二人が喧嘩しちゃいけないだろ？」

後ろの座席から、突然スーツ姿の男が入り込んできた。

二人はただ男を呆然と眺め、反応に困っていた。

「あ、ゴメンね。何か面白い話がちょっと聞こえてさ。良かった

ら、お兄さんにも聞かせてくれない？」

少なくとも、蓮には助け船に見えたらしく、笑顔を向けた男性に饒舌に語りだした。

「俺さ、時々変な糸が出てきて、いろんな人に繋がったりしてるんだ！でもほとんどが知らない人に繋がるちゃうから、なんなのか分かんないけど。」

男は興味深げに、ふうん、と頷き、少し考えると、

「アレじゃない？運命の赤い糸的なヤツ。繋がった相手みんなが、実は君に何かの影響とか与える、出逢うべくした出逢った、という人を糸が示してるんじゃないか？よく、縁があるって言葉聞くだろ？」

男の解釈に蓮と理恵は、思わず納得したように眼を輝かせた。

「ウソ！？今の話信じるんですか？」

「うん。何だかこの子、嘘を吐いてない眼をしてるから」

「さすがおじさん！ダテに長生きしてないね！」

彼の一言で、男は幾つかの不満を感じたらしく、表情を少し曇らせた。

「いいかい君？俺まだ23歳だから、おじさんでも無いし全然長生きでもないんだよ？」

「でも、知らない人に私はお兄さんは抵抗あるな」

「俺も」

男は悲しげに溜め息を吐き、胸ポケットのボールペンと手帳を取りだし、ペンを走らせたページを破ると、その紙を蓮に手渡した。

桐嶋 洋平

と紙には、粗く記されていた。

「……ヨ、ウ、ハイ？」

「そう。今は天美中学で教育実習中だった、きりしまようへいって言うんだ。よろしく。」

「平沢理恵って言います。でこっちが」

「自己紹介くらいするって。神月蓮みづきです。」

「みづき？神月って何処でか聞いたような・・・」
そんな平凡極まりない、日常の対話は突如、ある男によって崩れ
始まった。

「そうだ洋平さん。俺の糸、この人にも繋がって・・・」

蓮はその人に指を向けると、その男によって突如首を絞められた。
理恵がその手を離させようとするが、力の込められた両手が解け
る気配が無かった。

「ウ・・・グツ・・・カハツ・・・キ・・・ガ・・・」

「ちよつと！何するのよ！死んじゃうじゃない！」

「あんた、子ども相手になに

洋平の言葉は、男の姿を見た途端途切れた。

「おいおい、ちよつと待てよ。何で運転手が」

本来そこに居るべきであるそれは、そこから離れ、居るべきでな
いこちらにいるのだ。

人の離れたハンドルは右へと回り、徐々に車体がそこへ動くと、
対向車と激突した。

だけに終わらず、バスは右に傾き、やがて横に倒れた。

キイイイイッ！！

ゴシャツ・・・

「・・・痛い」

洋平は幸いに、シートに身体を強打しただけだったが、辺りを見
渡すと、運転手の姿は無くなり、乗客の数人には息すらしていない
人も見掛けた。

「私は大丈夫・・・蓮は・・・いますか？」

理恵も運良く、足の捻挫ですんでいたが、他に痛めているらしく、
満足に言葉を繋げられなかった。

洋平は忙しく車内を見渡すが、蓮の姿が無い。

不安定な足場で前列に向かいつつ、辺りを探すが全く見つからな
い。

そして、

「レン！」

彼の小さな身体は、バスのフロントガラスを破り、外に放り出されていった。

頭を打ち付けたらしく、頭から血を流し少しも動く気配が僅かも感じなかった・・・

「忘却の空」

それから蓮は集中治療室に運ばれ、意識不明の重体だったらしいが一週間後、容態が回復したという話を聞き、理恵は洋平や香川を含めた蓮の友人と見舞いに訪れた。

「オツス蓮。よく生きてたな。大丈夫か？」

「なんか言えるか？大丈夫か？」

口々にクラスメイトが話し掛けるが、一向に返事を返さない。それどころか、虚ろに前を向いたまま静止したままだった。

「ちよつと蓮？本当に大丈夫なの？」

理恵は不安の籠った声で尋ねていた。

彼女に反応したのか、ゆっくり顔を理恵に向け、

「ああ理恵？何で俺ここに居るんだっけ？覚えてる？」

不可解な一言を溢した。

理恵も見たことない、黒かったはずのその左の蒼い瞳が、彼女を見つめた。

が、奇妙な言動は続いた。

「それにそんなにお前の友達連れてさ。いつの間に男友達増えたんだよ？あ、バスで逢ったおじさんだ。てことはおじさんの知り合いが入院してるんだ？そうそう、ナカクラは来てる？まさか親友が来ないはずが・・・」

一同は言葉が詰まった。

事故を覚えてないどころか、クラスメイトの名前をほぼ無くし、知り合ったばかりの洋平もうろ覚え。

ナカクラ、という苗字は少なくともクラスには居ないことは気付いていた。

「君、名前は言える？」

「神月蓮」

洋平の考えた記憶喪失の可能性は即答によって無くなった。がまだ確証はではない。

「生年月日は？」

「12月6日」

「家族構成は？」

「えっと、父さんと母さんと兄さ、いや、兄さんは居なくて二つ下に弟が・・・違うな。じいちゃんと兄さんと生まれたての妹、アレ？父さんは居なくて母さんと姉さんで・・・」

延々と流されるバラバラの構成。

普通、単純に家族構成を言うなら十秒かからないかもしれないが、彼はそれを何度も訂正し一分近く語り続けていた。

クラスメイトもこの異常な空気に何も言えなくなっていた。

「レ・・・レン。この中で・・・君の友達は？」

詰まりそうな声を懸命に吐きだした。

「バカにするなよ！理恵とヤマトと・・・後は見たことあるんだけどなあ・・・」

クラスメイトの顔を一人一人覗いていくが、時折怪訝な表情を見せた。

理恵は恐る恐る口を開いた。

「香川渚は知ってる？」

幸いと言うべきか、今この場には彼女はいない。

クラスメイト全員が三人の関係を知ってる、だからそれを言っただけほしい願いはあった。

知ってたらそれでいい。

だが、もし知らなかったら・・・

彼は軽く一息吸って、答えた。

「いや？理恵の知り合い？」

「彼の記憶は失くなった訳じゃなくて、入り乱れている、としか言

い様がありません。恐らく自身以外の他人の記憶も入り、例えば、学校行事で遠足に行ったがその帰りに家族と釣りに行った、と言うように一部の記憶に上書きされていると考えられます。こんな非科学てきなもの、手に負えないですよ」

検査を行い続けても異常が見当たらない、医者の不合理的な見解だった。

が、今の彼の状態を説明するには、それらが実に合理的だった。それでも、理恵は、蓮は思い出すだろうという希望を持ち見舞いを繰り返し、その度に最近の話をし、蓮自身の話を重ねた。

「ねえ蓮。最近やつれてるけど、入院食るくに食べてないでしょ？学校来たかつたらちゃんと食べなさい。」

「たく、手厳しいな。・・・なあ理恵」

「ん？」

青白い顔の蓮が弱々しく呟いた。

「いやいい、なんでもない」

「こおら、今さら汗臭いな。私たち友達だろ？はつきり言っちゃいなよ」

屈託のない笑顔を向けられ、蓮は落ち着いたらしく強ばった表情が少し和らいだ。

「・・・俺の糸のことは知ってるよね？」

「うん」

「人にも繋がるけど、なんか俺を殺そうとする変な化物にも繋がるんだ。」

「へえ、化物の話は聞いたことあるけど、糸が繋がるって初めて聞いたよ。」

「糸に繋がった化物は皆砂みだいになって、無くなるんだ。その糸が人にも伸びてる・・・これがどういう意味分かる？」

（化物が死ぬ糸が人にも伸びる・・・てことは）

やつれてるせいもあってか、その笑みがやけに哀しく見えた。

「俺、今まで人を殺してたらしいんだ。そして今も・・・」

「あんなに一緒だったのに」

それから蓮は語りだした。入院中に知り合った老人やおじさんが糸で繋がりが、眼の前で発狂して息絶えたり、何も言わない肢体になっているのを幾度と見たこと。

気晴らしに外に出ても化物に狙われ一時の安らぎさえ無かったこと。

「もうこんな時間か・遅いから帰った方がよいよ」

病室の時計は午後七時半過ぎを指していた。空にはまだ薄い赤が少し残っていた。

「そうだね。そろそろ夕飯も出来てる頃だと思うし。また明日ね」
みかんとバナナの入った手提げ袋をベッドの側に置き、病室を戸を引くと

「理恵」

呼び止められ、声の方に振り返った。

「さっきの汗臭いじゃなくて、水臭い、な。また間違えそうだから、今度言ったら美味い飯くれよ」

「そう言ってたの私!? 一生の不覚! いいわ、その約束乗ったわ」
「言ったからな。・・・それと」

一度言葉を切って、時計を眺めて溢した。

「・・・じゃあな」

「? うん。あなたの海みたいな青い左眼、案外似合ってるよ。」
陽気に返事を返し、病室を後にした。

この会話を最後に、彼に繋がっていた確かな絆は、ゆっくり解けていった。

「なあ知ってるか? 天美病院が火事になった話」

二学期、クラスの話題は集中していた。

「天美病院って近いからみんな知ってるだろ！いっぱい死んだらしいって」

「ねえ理恵さん。蓮君はどうしてるの？あれから全然逢ってないみたいけど」

「そう、同級生が入院してる病院ということもあって、特に炎上していた。」

夏休み入る前のあの日以降、香川は彼に全く逢っていなかったため、安否を気遣った。

「うん。変なことに家に連絡したんだけど、ウチにそんな人はいない、て冷たく返されちゃって・・・」

ガラツ・・・

教室の戸が静かに開かれた。クラスメイトがその方向に眼をやるのと、蓮の姿があった。

「「「おおー！！」「」」

「何だよ、全然生きてるじゃん！」

「蓮おかえり。なにその眼鏡？入院中そんな属性に

「前に言っただよな？化物に狙われてる、て。あの火事はソイツが原因なんだ。」

理恵の手が止まった。

「化物ってあの・・・」

「化物？平沢何か知ってる？」

「私は見たことないけど、昔から蓮、よく分かんない糸が伸びるみたいで。それとは別で、怪物みたいな化物に襲われるみたい。」

理恵は振り返って、大まかにクラスに説明した。

口々に対話が始まった。

「化物？アニメの見すぎだって」

「入院生活ってこうなるのかな？」

小声で耳打ちされる会話の中で、その一言で事態は動いた。

「ていうか、火着けたのお前じゃね？」

会話がピタリと止み、ある男子の言葉を待つように耳を傾けた。

「テレビで見たんだけど、生き残ってる人が少ないって言ったけど、火傷があつたらしいのに、なんでお前はどこもケガが無いんだよ？」

「だから俺は

「いるわけない化物のせいにして、入院中でのストレスで火を着けたんだろ？だから無傷なんだ！」

「なるほど！あっちゃん、頭良い！」

瞬く間に教室は、罵声と皮肉に包まれた。

反論をしようにも、元々気の弱い香川は、何も言えずクラスに溶け込んでしまっていた。

「ちよつと！一方的に決め付けは良くないよ」

庇うように蓮の前に立つが、せせら笑いながら女子が理恵に尋ねた。

「え？じゃあ理恵はこいつの話信じるの？」

「理恵も見たことないんでしょ？なのに信じる証拠なんか無いでしょ？」

「ま、私にはどうでもいいけど。関わらなければいい訳だし。」

理恵は一瞬想像してしまった。

もし、このまま蓮を庇ってしまった後の、自身に起きるかもしれない不吉な未来を。

理恵は不意に蓮から離れ、クラスの群れに溶けていった。

(そうだ・・・信じられる証拠なんか無い)

「・・・り・・・え？」

「あんたの話は面白かったけどさ！言い訳に使われてもバカみたいだから！ある訳ないでしょ、糸とか！化物とか！！あんたおかしいよ」

誰かの顔を見て言うのが辛くて、下を向いて当たり散らすように叫んだ。

「うわー、蓮がこんなにウソツキだったって知らなかったな」

「ほんと。きつと何かにつけ嘘について、騙される俺たちを笑っ

てたんだな」

蓮を一度も見ることもなく、それぞれの席に戻っていった。

「俺はウソツキ、か・・・」

ククツと軽く笑い、窓ガラスにほんやり映った自分に皮肉を呟いた。

「実にお似合いじゃないか。なあ、桐嶋蓮？」

「あんなに一緒だったのに」(後書き)

実はこの章のタイトルは全てが曲名になります。
分かったらちょっとうれい、と思っています。

chapter 4 「お得な話をするだけよ？」

洋平から聞いた話では、蓮は神月家から縁を完全に絶たれ、神月を名乗ることを許されない、ただの蓮だった。

のだが、洋平は身寄りの無い彼を引き取り、桐嶋の苗字を与えた、という経緯いきつがあつた、らしい。

「それからあいつは、人が変わったように他人を拒絶して、一人を選ぶようになったの・・・」

喉かな昼下がりと呼ぶにはひどく重く、嫌に静かな一席だった。

「あれ以来私は忘れられたみたいで、いくら話してもあの頃みたいにかかないんだよね・・・」

「時々思うの。あの時、蓮をもっと信じていたら、今とは違う現いま在まを送れたのかな？」

理恵の声にいつもの明るさが弱まり、蠟燭の灯のように頼りなく小さくなっていた。

「今もレンは信用できませんか？」

「・・・正直、半信半疑だったの。けど・・・」

理恵の灯が、ちらりと勢いをました。

「一昨日のことを渚から聞いて確信したわ。蓮は嘘を言ってない。化物の話も糸も実話よ、間違いない！」

「うん、私もそう思う。」

シオンには意外な返答だったらしく、眼を大きくして二人を交互に見た。

「貴女にとって、その確たる証明はあるのですか？」

「ううん、ぶつちやけ無いよ」

シオンは再び大きくした。

「確かに、あいつが何を抱えてるかは知らないけど、知らない」と

信じるも信じないもないからね。私、ガンガン近づくけど、簡単には死なないからね！」

「理恵さん凄い・・・そこまでは言えないけど、私も桐嶋君の力になりたい。」

二人の力強い瞳に、シオンはただただ感心していた。

「本当にレンは良い友を持っていてるのでね。それにしてもナギサは、彼の様な男性が好みなのでね。少々驚きですね。」

「しかも健気なのよねえ。忘れられて以来、ほとんど他人同様で蓮と接しているから。それでも渚は別にいいみたいだけど」

「ちよつと理恵さん、話しすぎ！」

重苦しい会話から、変哲のない、学生の会話に花を咲かせていた。(とは言え、心に衝立のある者は容易に真意を明かさないのでしょ。・・・貴方にもその日が来るのでしょうか、レン・・・)

「つくし!!」

風邪か？あまり深刻にならなければいいが・・・

それにしても、食堂に来るんじゃないかな。

食べたいと思っていた昼飯が無くなるっていう惨状は、多少は不快になるからな

「「はあ」」

妥協であんぱんを買い、テーブルに着くなり溜め息を吐くが、隣の誰かと重なった。

横を向くと

「あ、蓮君じゃない。そんなことしたら幸せが逃げてくよ？」

大きな丸眼鏡が似合う雫先輩。

しかし元気とは言いつらい、落ち込んでいるらしい。

「大丈夫ですよ。先輩からも逃げていきましたから。」

「もう、何で肉まんが無いのよ。」

「別に餡まんでもいいんじゃないですか？」

「甘い！果汁100%より甘い！それじゃ140%よ！」

気に障ったのか、ムキになったのかよく分からないが、雫先輩が椅子ごと身体を俺に向けた。

「いい？ 餡まんとうまんは、正に似て非なる存在なのよ。眼鏡とサングラスなのよ！！その差は歴然よ！！！」

喋りに熱が入りすぎて、声は次第に食堂に響き渡った。

「・・・ま、まあそんなとこね」

かなり気まずく終わった。

雫先輩も自重したらしく、大人しく手にしている携帯を打っていた。多分、友達とメールでもしてるんだろう。

「そっだ蓮君」

携帯を閉じ、また俺に顔を向けた。

「昨日の昼、トイレに行ったまま戻ってこなかったけどどうしたの？」

思いがけず、少し動揺してしまった。

だが焦る程じゃない。

「『大したことじゃないですよ。図書館の本を返しに行っただけです。』」

「蓮君、嘘はダメだよ？」

一瞬、ゾツとした。

俺を見る雫先輩の眼が、言い様のない不気味な色を増したことにどこか恐怖を感じた。

「私ね、他人の嘘には敏感なの。だから昨日のことも気付いてたよ？ 本当はどうなの？」

その眼で見るな・・・

なぜか見透かされそうで、嫌な気分になる・・・

どうする！？

「YouはShock 愛で空が落ちてくる」

「あ、ごめんメールだからちよっと待ってて。」

着信音でその曲は・・・凄いなこの人は・・・

「ゴメン！この後友達とサボるんだった私帰るね。バイバイ！！！」

疾風の如く、テーブルを立ち数秒としない内に食堂から姿を消してしまった。

なんか忙しい人……

手元の茶に手を伸ばした時だった。

「身長約163センチ、特徴は眼鏡を掛けた地味な印象の男子、髪質は自然な直毛……」

カツツ

騒がしい筈の食堂に、幼げな少女の声と甲高い靴音がやけに耳に入ってきた。

「名前は桐嶋蓮。成る程、気味が悪いくらいノアの言う通りの人ね。」

反応、というより反射に近いかもしれない。

その口から「ノア」の名が出るとは少しも思わず、咄嗟に声の方に振り返った。

眼に入った主は、背中まで掛かる緑の長髪が眼に映りやすく、白いワンピースを着た、この場に相応しいとは言えない少女の姿だった。

「ちよつと落ち着いてくれない？お得な話をするだけよ？」

少女は不敵に笑った。

「ノアが逢いたがってるの。」

「そんなこと信用できる訳が無い。何が狙いだ？また俺の命か！？」

「だから落ち着きなさいよ。みつともないったら無いわね。」

面倒臭そうに言い放つも、どこか上機嫌に俺の向かいの椅子に座った。

「細かいことは忘れちゃったけど、ノアが逢いたがってるの。」
耳を疑った。

ノアが、俺に？

「ふざけるな！話は俺を殺せる得な話のことか？」

「だからちゃんと聞きなさいよ。アンタ、自分の記憶知りたくない？」

俺の記憶、と確かに確かに言ったよな。

少女は構わず続けた。

「ノアはアンタの事知ってるってさ。そもそも、アイツが人間に興味を持つこと自体が有り得ないんだから。」

そうか、ノアにとっては人間はそういう風に映っているのか。

その中で俺を感心を持つ、確かに奇妙だ。

信じていいのか？この話・・・

「もしだ。もし断つたらどうなる？」

ただの質問、だが相手がどう出てくるかはあまり期待はしてないが。

「言霊って知ってる？」

あまりに突拍子な話題で、言葉を失った。

「昔さ、人の話す言葉に不思議な力が宿っていると信じられてたみたいでさ。その発した言葉が発現するの。分かる？」

要は、浮けと言うと宙に浮くとか、そんなものだろう。

「ったく鈍いわねえ、文字通り私の一声でアンタを殺すことも簡

単、てことよ。ちなみに」

少女は唇の端を上げた。

「アンタに拒否権は無いからね。この中にいる歪みに「こいつが断つたらてきとうなエサを喰っていい」って、言っといいたから。どうする？」

歪み？化物のことか？

雑談でもするように少女は軽く放った。

化物を見つげようと食堂中を見渡すが、全く見当たらず、ただ人が増えてくるばかりだった。

「バカねえ。存在は取得済みだから、外観は暦とした人間よ。いくらアンタが視えてもそこまでは知らないでしょ？」

コイツ、俺で楽しんでやがる・・・

「アンタが出せる答えは二つ！イエスか、この中の人間達エサがなくなるまでノーを唱えるか！さあ選んでちょうだい！！」

決壊したダムのように言葉が溢れ、語調を強めていった。

それに伴い、あどけなかった少女の顔が徐々に歪み、ひどく興奮しているのが明らかだった。

「さあ！さあ！！」

少女は急かすように眼を覗きこんだ。

根拠は無いが、答えを長引かせると厄介になる、と何かが言っている。

「・・・・・・わか

分かった、と口にしようとした時だった。

ヒュッ

と鋭い風切り音が頭上から響いたように聞こえたが、それは全くの気のせいではなく、そこから細身の何かが通過した。

その何かの存在に少女は、一瞬、驚きで笑みが消え反応が鈍ったもの、テーブルを蹴って身体を倒すと、何かを回避した。

通過したものを眼で追うと、文字の様な跡が刻まれている細身の剣。

「貴方は退がって下さい。こちらはどうか執行しますので」
左からの女性の声に顔を向けると、女性は修道服を纏い、顔を覆い隠すように服からのフードを被っていた。

手にした装備を見る限り、多分こいつも

「やってくれるわね！まさか「執行者」を使うなんて。」

シッコウシヤ？

調律者じゃないのか！？

「悪くない策だけど詰めが甘かったみたいね。アンタの行動は、
ノーで取ってもいいよね？」

やって、と少女は俺でも分かる合図を化物を出した。

これじゃ誰かが・

ところが、最初に怪訝な表情を浮かべたのは、意外にも少女だった。

「素行の悪そうな貴女の友人なら、執行させてもらいました。すっかり話に夢中だったので」

「チツ、ゲスが！」

少女は容姿から想像出来ない暴言を吐くが、俺を見た途端、機嫌を良くしたように笑みを浮かべた。

「けど、そっちのアンタはツイてないね。もしもの為にとって、ノアが人質を欲しがってたから。ヨウヘイ、あのかっこいいの。私はちよつとタイプだけど、アイツも同じこと言ってたから」

洋兄が、人質？

「ノアはもう動いたから。バイバーイ」

少女は陽気にスキップを踏みながら、食堂を出ていこうとするが、
「逃がさない！」

執行者と呼ばれた女性が地面を踏みしめた、と思いきや、一瞬にして直線上の少女の元に距離を詰め、剣で切る体勢をとった。

「『燃える』」

少女はただ咳いただけかもしれない筈なのに、少女の声だけが、はつきりと響くように耳に入った。

瞬間、執行者の身体中が擦ったマッチのように、突如燃え出した。

「おい！人が燃えてるぞ！！」

この騒動で、食堂内は一気にパニックに陥った。

「アツハハハハハハハハハ！ハハハッハハハハハハハ！」

逃げ惑う群集に紛れ、少女は姿を消してしまった。

「あんた、大丈夫なのか！？」

多少弱まったもの、まだ消えない身体を包む炎を消そうと、学生服を脱ごうとするが

「私は大丈夫！貴方は洋平先生を！」

女性はフードの奥を振り向かせず、促せた。

そうだ、洋兄が危ない・・・

俺は振り返って、食堂を後にした。

が、職員室の前に絶対行くべき場所がある。

まだ居るなら、そこに行かないと何の話にもならないからな。

「アイツ、俺を知ってる？」

ガラッ

教室の戸を引くなり、

「高梨は居るか？」

多少不躰かもしれないが、ノアに関する話はコイツ以外に仕様がない。

「少々待って下さい。今リエの愛犬の絶技の話を押聴しておりますので。」

「そうか。白い燕尾服の男の話、お前なら興味が湧くと思ったが・・・」

今そんな話を聞く余裕はない。

シオンなら伝わるだろうヒントを与えると、思った通り表情が変わった。

「興味深いですね。御二方、申し訳ないのですが少々席を外します。」

椅子からゆっくり立ち上がると、俺の後から教室を出ていった。

「理恵さん、どうしよう・・・なんだかあの二人妙に画になる」

「・・・否めない。あいつも男だからね、このままいけば二人共付き合

「理恵さん！」

教室からの会話はよく聞こえないが、なんだか騒がしいな。

「それでレン。ノアが現れたのですか？」

「間違ってたなかったらな。その前に、執行者、て何だ？」

シオンは歩を止めた。

「歩きながらでいいから教える」

「以前ディスプレイに関する話で、アレらは倒されると存在が消滅する、と言いましたが、正確に述べると二通り有ります。」

さっきまでの穏やかな表情が薄まり、険しさが表れた。

「一つは時間経過による自然消滅、もう一つが執行者による断罪の執行。この世界に存在しえないディスコードも調律者^{わたし}も、執行者の属する教会からすれば全て歪みの対象と見られます。」

この世界、教会、歪みの対象。

聞くほどに訳が分からない。

「つまり、簡単に言つと執行者は敵じゃないのか？」

「少なくとも、同志と呼べる程の間柄では有りませんね。」

話をまとめると、

ノア、調律機関、教会の三つ巴

難儀な話だ。

「言い遅れましたが、調律者がディスコードを倒した影響は、直ぐには忘れず、流水が溶けるように次第に忘れていくのです。」

成る程、以前の説明は飽くまで結果が同じだからそう言ったのか。

「それにしても何処まで行くのですか？此処に来られては遅刻

「いやここでいい筈だ。」

職員室の前に足を止めた。

洋兄、無事でいてくれ・・・

ガラッ

「おやおや、思いの外お速い御到着で。ノイズの奔放にも少々参るものだ。」

扉の奥には、抱き抱えるように洋兄を羽交い締めしたノアの姿があった。

そんな状況下で室内の教員は眠りについていた。

「な、何だよあんた。顔近いからマジ離れてくれ！」

「洋兄を離せ！関係ないだろ！」

「私にはな。だが君にはあるだろう？」

下らん屁理屈を・・・

「ノイズから聞いたと思うが、私は君と話がしたいだけだよ。」

ノイズ？さつき食堂で逢ったあの少女か。

いや、それより

「話なら今ここでやればいいだろ？人質は必要無い」

「そうしたいところだが、それだとお互い都合が悪くなるから無理な話だ。」

都合？どういう意味だ？

「君とは今晩逢いたい。陽が落ちた頃に、君が『よく空と向き合う場所』にでもどうかかな？」

言われてすぐ、不思議とそこがどこかすぐに思いついた。

「ちよつと待て！俺はどうなる！？人質がどうのつて聞こえたけど」

洋兄は腕の中で抵抗をするも、ノアの腕が解ける気配が少しも感じなかった。

こちらから動くこうにも、何故か身体が言うことを拒否した。

「すまないね。レンは昔から強情だから、こうでもしないと来ないんだ。人質の君は殺さないよ。でも美味しそうだから我慢は難しいか・・・」

ノアの溢した笑みに、洋兄の顔から血の気がサツと引いていった。「れれれれ、れ蓮？今この人、サラツと怖いこと口走った気がするが、もしかして俺の貞操ピンチ？」

「ふむ、前戯としては中々の発想だ。それも視野に入れよう。」
「いよいよまずい展開になってきたな。」

「つと、一先ずの話は終了だ。私も退散させてもらおうよ。」

「蓮！」

「洋兄！」

洋兄が差し出した手に手を伸ばすが、無情にも届かず、ノアは洋兄を抱えたまま、二階の職員室の窓から身を投げるように飛び降りた。

「洋兄！！」

駆け寄り窓の外を見渡すが、一瞬の内に姿は無くなっていた。

助けられなかった・・・・・・洋兄を・・・

だが、引っ掛かることがある。

「アイツ、俺を知ってる？」

あの口振り、場所、なぜノアが知ってる？

アイツはなんなんだ？

「取り込みの様ですが、早速次の場所へ行きましょう。」

シオンは俺の手を取り、職員室を出ていった。

「今度は何だ!？」

「舎内に歪みが多量に発生してます。排除に向かいます。」

「そう、執行者は私です。」

「分かっているのか!? 今は昼休みじゃないんだぞ!」

「それは向こうに言ってお下さい。私に激昂されても困りますので。」

「クツ・・・」

その通りすぎて、反論の気も起きない。

ガシャアツ!

突然ガラス窓の割れる音がすぐ側で高く響いた。

陽の光を遮り、後光が差してもよく分かる大柄なシルエットが、

俺に目掛けて鋭利な刃を振り上げていた。

マズイ! 殺られ・・・

と思った、が、近づくシルエットの影を別の小さな影が素早く横切ると、その上半身は宙を舞い、力無く落ちた。

「大丈夫ですか?」

影の正体は大剣を携えたシオンだった。

西洋的な騎士の鎧を纏ったシオンが、座りこんだ俺に手を差し出した。

「借りが出来たな。」

それを拒否し、自力で立ち上がった。

・・・

「シオンはあっちをどうにかしてくれ。」

俺は1-2の教室を指した。

「何故気付いたのですか?」

「『勘だよ』」

糸が三本伸びていたが、コイツなら大丈夫だろう。

「しかしそれでは貴方は危険です。」

「ノア直々の招待客は簡単に殺さない筈さ。それに、逃げ回るだけなら昔から慣れてるからな。」

「・・・嘘は皆無ですね。信頼します。その前に」

シオンは近くの掃除用具棚から箒を取りだし、手に取ってただ眼を閉じた。

・・・今身体がぼんやり光ったような・・・

「どうぞ。物体を強化する単純な魔術を施しただけですが、護身の為に所持して下さい。では」

俺に箒を手渡すと、颯爽と教室に駆けて行った。

何なのかよく分からんが、手にしても何も感じない只の箒を護身

武器にとは・・・

・・・頼りなく見えるのは俺だけか？まあアテにはしてないが。

とりあえず、他に繋がってる大量の糸の先に向かうことにした。

多分この糸の先に、執行者が居る筈。

俺の考えが正しかったら、あの執行者はこの学校のヤツの筈。

アイツは洋兄を「先生」と呼んだ。

根拠はそれだけだが、嫌に引掛かる。

・・・それにしても・・・

・・・今あつちはどうしてるんだらう

教室前の廊下にて

授業中、黒板を走るチヨークを音と教員の声と静寂が流れる中、

シオンは教室の前のディスプレイを確認した。

「レンは大丈夫なんでしょうか。早急に終わらせて向かわなければ」

シオンは眼前に居るディスプレイに、大剣を横水平に構え、
ドッ

と、床が炸裂し、刹那、化物の巨躯な身体に大剣が通過した。

更に、奥の後方にいる同種を確認すると、そのまま足を走らせ、

続く二体目共々刃を突き刺し、廊下を疾った。

無論、一連の廊下の出来事は、生徒に気付かれず、眼の端で微かに捉えようとも、詳細を知ることが不可能で、気のせいだと思っていた。

シオンは刺さっている二つの串団子を、大剣を横に振って裂いた。大剣一度振り払い、

「少々厄介になりましたね」

振り返ると廊下中は化物で溢れ、離れてしまった教室への道が塞がれ、阻まれていた。

「ですが所詮は烏合の群。敵では有りません。」

シオンは微塵の怯みも迷いも見せず、群れに飛び込んでいくが、発言通り、圧倒していた。

敵の攻撃を界潜り、直後の隙を狙って両断し、あるいは攻撃を出させる間も与えず一振りをで仕留める、という作業を全て足を止めることなく、擦れ違い際に行っていた。

「終いです！」

最後の一振りを、教室のドアに近付いた化物に振り下ろした。

縦に二分割された化物は、重々しい身体から糸が切れたように床に落ち、砂となった。

誰も知らない闘いは、静かに決着した。

「こちらは一先ず解決です。直ぐにでもレンの元へ向かわなければ・・・」

人知れず当面の問題を処理し、シオンは廊下の窓から降り、連の気配を探りながら教室を後にした。

「見つけた！」

食堂の外の広場に、修道服を纏った執行者が、大量の化物と既に戦闘をしていた。

当然、あの中に入れる訳がない俺に、出来ることなんか高が知れ

てる。

眼に映る範囲で、複数の糸を化物に伸ばした。

が、一体に気付かれたらしく、化物はこちらに襲いかかってきた。
「マジイ！こいつだけ糸が太い！」

咄嗟。正に自然に、手にしていたあの箒で化物が仕掛けた腕を払い退けると

ベキツツ！

鈍い音が響いた。

だが、折れた訳ではなく只の箒の一振りで、巨大な身体は吹き飛ばされていた。

「……マジかよ」

信用していなかったとは言え、これ程とは……

「何をしてるですか！？此処は危険ですから離れて

「危ない！」

背後からの化物の気配に反応したものの、その一撃は被っていたフードが引き裂かれる程、辛うじての回避だった。

……え？

執行者は、化物の頭部と思わしき膨らみに剣を突き立て、化物が痙攣を起こすと、無情に引き抜いた。

確かに、俺は執行者は学校の生徒と仮定した。

けど何故？

眼鏡こそ無いが、そこには、確実に雫先輩があった。

「執行者って、まさか……」

「そう、執行者は私です。蓮君。」

いつもの軽々しい印象は薄まり、俺の知ってる調律者と同じ瞳で、俺に言った。

「お前が俺をおかしくしてるのか!？」

出来の悪い冗談だ。

あんな人がこんなこと出来る訳がな

ドッ

後ろのやや上から、何か鈍い音がした。

「まだ終わってないよ、蓮君」

振り返ると、化物の頭部にあの細身の剣が立っていた。

よく周りを見渡すと、その言う通りまだ化物は群れを成していた。妙な事に、不思議と恐怖は少ない。多分手にした武器と強力な助っ人、そしてここ最近の騒動の連続で身体が慣れてきたからか？

どっちでもいいさ、死ぬ気はサラサラ無い!

「雫先輩。もし生き延びたら色々聞かせてもらいますよ。あなたのことを」

「嬉しいね。ほんと、モテる先輩は忙しいわ」

「そうじゃなくて・・・」

表情に微かに笑みが浮かんだ。

だが、もう時間だ。

「・・・これは？」

俺達を囲んでいた化物の群れは一体ずつ、徐々に消えた。
.....

静けさを戻した広場。

「自然消滅?しかし、今は・・・」

「さて、話してもらいますよ?素性を」

一つ咳をし、

「何処まで知ってる?」

と俺に尋ねたが、難しいことに、シオンから聞いたあの説明を簡潔に言うのは

「調律者と相反するとか、教会がどうの、てくらい」

とするしか無かった。

時間がもう少しあれば今のよりマシに出来る自信があるのに。

「私の素性よね。まあはつきり言っちゃうと零っていつ名前も、生まれも育ちも年齢も、総て嘘よ。」

全て嘘？本当に言ってるのか？

「そうそう、シオン・ストライトに伝えて貰えます？」「今晚あの男を狩るのは私だ」て

シオン？まさか知っていたのか！？

いや、それ以上にこの関係まで気付いている。

「レン！無事ですか！？」

シオンの声で、飛んでいた感覚が返ってきた。

「ああ、何とかな。執行者が居なかつたらやばかつたな」

「此処に執行者が居たのですか？」

会話がおかしい・・・

まさか

振り返るが、そこには零先輩の姿が全く無くなっていた。

「兎に角、貴方が無事で何よりです」

「何だ、心配してたのか？これは有り難いな」

「ただ、確かに不安は感じていましたが、それは貴方が稀有な人間であり、監視の対象であるからでして！貴方も性格に合わない冗談は控えて下さい！！」

はいはい、分かってる・・・

・・・待て、冗談？俺が言ったのか？それこそ何かの冗談だろ？

・・・いや落ち着け。

俺は疲れてる、それだけだ。

確かに、コイツと逢ってからろくな事になって・・・

・・・そうか

「シオン・・・そうかお前か」

そうだ。記憶を辿っていくと、調子が狂うのも、妙なトラブルに逢うのも

「お前か！？お前が俺をおかしくしてるのか！？お前に逢わなければ、俺は！俺は！！」

気が付けば感情を怒りに任せ、胸ぐらを掴んでいた。

「・・・何を勘違いしているか存じませんが、私は傍観致すつもりでしたが？」

何？

握る手の力が微かに治まった。

「当初は貴方を監視し、貴方を狙う歪みを秘密裏に排除する筈だったのですが・・・私をありのままにシオンと認識していた挙げ句、振りかかる疑問を私に尋ねる。現状、総てが範囲外の行動です。」

・・・つまり何だ？

俺は今どういう状態なんだ？

「貴方は他人を拒んでいるみたいですが、その実、貴方は孤独を拒んでいるという見解が有るのですが・・・」

「黙れ！」

握っていた胸ぐらを投げるように突き放した。

「憶測で喋るな！てきとうに物を考えるな！俺はそんなに甘い人間じゃない！」

シオンは何も言わず、静かに俺を眺めるだけだった。

「・・・今の貴方は疲労で平常を欠いています。一度学舎へ戻りましょう。」

「・・・言われなくても戻るさ」

ガラッ

「蓮、高梨君、そろそろ授業終わるんだぞ？」

「すみません」

俺は教員の声を無視した。

それが気に入らなかつたらしく、

「蓮。遅れてきて反省の色も無いのか？ま、授業に中々来ない人

に言ってもしょうがないか。」

わざと癪に障る口調で言った。

普段なら適当に流してそれまでだった筈なのに、

「先生、ウザイ」

隠せない本音が溢れ出た。

教室中が静まり、ほぼ全員の啞然とした顔が、可笑しかった。

静寂の中、終了のチャイムが割り込んだ。

振り返り、また教室の戸に向かった。

「蓮、何処に行く!？」

「何処って、今休憩時間ですよ？トイレに決まってるじゃないですか。」

ボタン……

「役者が集ったようだ。」

その後、結局家に戻ることにした。

数時間過ぎているが、なんのやる気も起きない。

何だろう、この虚無感。

洋兄がいない、それだけの筈なのに部屋が広く感じ、やけに静かに聞こえる。

望んだ筈の完全な孤独。

なのに、何故思考が混濁する？

「案外広いんだな、この部屋・・・」

ガチャツ・・・

玄関の開く音・・・

「洋に・・・」

「戻りました。変わり有りませんでした？」

違った・・・シオンか・・・

「別に」

窓に不意に眼をやると、空の太陽は落ち、もうすぐで夜に変わろうとしていた。

「行くのですか？」

「ああ。だが洋兄の為じゃない、俺の為だ。」

「私も同行します。一人になるのは危険です。」

「お前も行けば俺どころか、洋兄も危ない。お前は来るな！」

こればかりは反論させてもらう。

「いけません！或いは罠の可能性が濃厚です。私も同行すれば仕掛けられているであろう展開式の魔術の消去など容易く・・・」

「まだ分からののか？邪魔だつて言ってるんだよ！！」

夕暮れ時の部屋に消えゆくオレンジ。

伴って沈黙と針時計の音が流れる。

「・・・分かりました。貴方がそこまで言うのでしたら止めませ

ん。御自由になさってください。」

シオンは俺を止めることを止め、身体を退かして玄関への道を開いた。

面倒だから学生服から着替えず、そのままスニーカーを履いた。

「そうだ、テーブルに今晚の食材書いてあるから、ちゃんと買い物くらいしてこいよ。お前でもよく分かるヤツだからできるだろ？」

玄関のドアを静かに閉めた。

カチャン……

「……ん……う……」

洋平の意識が醒め、おぼろげ臆気に辺りを見渡すとあることに気付いた。

「……ここ、学校の屋上だよな？」

動こうとするが、手足がワイヤーによってフェンスに縛られ、行動が制限されていた。

「お目覚めかい？キリシマ ヨウヘイ、だったかな？」

見渡した時に居なかった筈の、気が付けば人間の気配が目の前に在った。

「あんた……」

「私はノア。ノア・アークレイ。あんた、と呼称するのはそちらも面倒だろう？」

白い燕尾服の男は胸に手をあて、軽く会釈した。

「こちらはアントワネット。私の優秀な使い魔だ。こっちはノイズ。宜しく。」

「ノア様、優秀だなんて、そんな勿体無き言葉を……」

「そうだよ。今は只の喋る梟だし。」

洋平は言葉を失った。

突然現れた得体の知れない男、奇妙な存在感の少女、傘を無造作

に差した少女の、三人の現実味の無い存在感。

洋平は、まるで夢を見ている感覚になっていた。

「な、何が狙いなんだ。俺や蓮をどうする気なんだ？」

「レンとは話をしたい、目的はそれだけなのだよ。だけど彼、あの通り他人に対しての衝立が深いから、少々無理に攻めるしか無くてね。君はその為の保険だ」

（蓮をおびき寄せる餌、て聞こえるぜ？）

ノアはシルクハットの鍔を落とし、

「レンは今も「糸」を繋ぐことをしているかい？」

洋平の顎先を指で上げ尋ねた。

「アイツは、その糸のせいで他人を拒絶してるんだよ。」

ノアが怪訝けげんな声を漏らした。

「おや？そういうことか。道理で知らない筈だ。それなら納得がいく」

洋平には、彼の言葉が大して伝わってはいないが、ある確信が芽生えた。

糸は本当だったんだ！蓮は嘘を吐いてない！

という事実。

「それにしても、先程から忍んではいたが、君は実に美味そうだ。余分な油が無く、締まった身体、是非味そしゃくわう様に咀嚼そしゃくしたいものだ！」

唄うように高らかなノアの笑う声に、寒気を感じ、洋平は必死で抵抗するが、手足に食い込んだワイヤーが捕らえて離さない。

「心配にならなくていいよ。私に掛かれば痛みは一瞬も無いから安心して委ねるといい。」

「あの、別のところで不安なんだが・・・」

「ああ。声なら幾らでも出しても構わないよ。もしくは抵抗も構わないよ。私もその方がそる。」

ノアは楽しむ様に、洋平のジャージのファスナーをゆっくり引き下ろし、中に着ているTシャツに指を掛けた。

その時だった

ヒュオツ

突然風が吹き、シルクハットを拐っていた。

露になったノアの顔に、洋平は動揺を隠すことが出来なかった。

「へえ、そんな顔してたんだ。でも見たことあるわね・・・」

ノイズが言うのも無理は無いかも知れない。それは、

「蓮と似て・・・いや、同じだ・・・」

声は違うし、髪の色も青の入った紫、髪もやや長いもの、顔は大
人びているが蓮そのものだった。

洋平が特に眼を奪われたものが、ノアの右眼。

当時、蓮の見舞いの時に見たあの眼と反対の眼が青いことに気が
付いた。

「・・・お前・・・一体・・・」

まともに出した言葉だが、これ以上は話せなかった。

「・・・全く無粋な風だ。何にせよ、今晚で素顔を明かそうと
思っていたから、むしろ好都合が良い。ご覧・・・」

ガチャ

開かれた扉から、連の姿が現れた。

瓜二つの自分と対峙し、少年は眼を見開いた。

「役者が集ったようだ。」

「君の記憶を辿らせよう。」

「お・・俺、なのか？」

鏡を見ているようだ・・

酷似している人間を比喻する言葉だが、コレはそんなもんじゃない。
い。

俺より長髪で声だつて全然違う。

が、それは確かに俺だ。

「おや、拳動が激しいね。一度深呼吸をすると良い。」

「ま、待てっ！ちょっと待て！何でお前・・・」

頭が廻らない・・

思考がまとまらない・・

言葉が絡まる・・

「安心していい。こちらからは手は出さない。話をするだけだよ。」

「話をするだけ？それだけの化物を連れてよく言う・・」

冷たい風が通る屋上に、ノアを中心に群れを成していた。

「君が調律者と同行すると思つてのつもりだったが、杞憂きゆうだった

ようだ。だが不測に備えて継続はさせる。だが今の彼等は只の観客

だ、気に留める必要は無い」

只の観客が十体そこら、内緒話にもならない。

まあどうせ化物には言葉もろくに分からないだろう。

「で？さつさと話を済ませてくれないか？お前と居ると息が苦し
くなる。」

「随分快く思われてないようだ。だから初めに言っておきたい。」

ノアの靴が動き、音が近づく。

「私は敵対する意思は無い。むしろ、君に対しては味方だ。」

奇妙な構図だ。

まるで未来の自分と会話をする感覚、違和感しか感じない。

「何が、目的だ？」

ノアは嘲笑を浮かべ

「君の記憶を辿らせよう。」

確かに俺に言った。

記憶を辿らせる・・・妙な言い回しだがコレは

「本当に俺の過去を知ってるんだな！？教える！」

「その前に確認したいのだが、私を覚えているかい？」

ノアの言っていることが、まるで分からなかった。

「昨日の今日で忘れるかよ。」

「・・・そうか・・・まだかなのか・・・」

・・・気のせいかな？

ノアの表情から一瞬、何処か哀し気に映ったのは・・・

「・・・成る程。ルールを知らないからか。通りで滞る筈だ。一

度しか言えないから聞いてほしい。」

まるで子供に話すように肩に手を置き、少し屈んで眼線を合わせて言った。

「レン、君の伸ばす糸が記憶の鍵だよ。」

!!!

「ふざけるな！化物に伸ばすならまだしも、人にまで伸ばせつて！？」

けど言っている内に、ノアにとっての人間の価値を思い出し、無駄だと悟った。

「・・・そうか。ならディスプレイのみで伸ばせば良い。そうするだけで、君は君自身の真実を知ることができる。」

「ノア様。何を・・・」

「ちよつと待ってよノア。これじゃ計画の邪魔をしてくれっつて頼んでるようなもんじゃない！何考えてんのよアンタ？」

ノイズの言葉はひどく的確だった。

そこまで俺に肩入れする必要も無いし、メリットも無い筈。

「まあ、このような批難も有りはするが、私は一向に構わない。」

さあ、この群れに糸を伸ばすと良い。」

まさかこの化物の群れは、俺をそうさせる為に？

「恐れることは無い。彼等は君にとつては敵ではない。只の糧でしかない。君の役に立つなら本望だろう。」

そうだ、躊躇うことは無い・・・

糸を伸ばせば俺に近付けるんだ・・・

そつと、化物に腕を向けようとした時だった。

「『壁』！」

ノイズの音が反響し、床から発生した壁が、風を切った剣を防いだ。

「代行者・・・いや、この剣は執行者かな？」

ノアの言葉通り、月光が捉えたフェンスの上の雫先輩を、映し出していた。

「まさか貴方が人間と会話をするとはね。随分腑抜けたじゃない

ですか？」

「真逆^{まさか}。レンは人として異端だから話すのだよ」

異端、か・・・

的を射た表現だな

「貴方の能書きを聞く気は無いので、速やかに執行させてもらいます。」

雫先輩は現れた壁に突き刺さった剣を引き抜き、構えの姿勢をとった。

「お迎えの時間らしい」

「ほう。もしかして、その黒鍵こっけんで私を討とうと言うのかい？」

「気遣いは要りません。この剣にはモノの「消滅」の魔術が刻まれているので」

「ふふ、そちらこそ過分な気遣いを・・・」

不意に、建てられた壁越しのノアを、横の一閃が走り抜けるが、ノアは後方に跳んで回避した。

が、紙一重、燕尾服に切り傷が入ってしまった。

「姑息とは思わないで下さい。奇襲も立派な戦法ですから」

「・・・君は正しい。私を滅するなら、それ位の手段を取って貰わなければ、私と対等にはなれない。」

「戯れ言を！」

鋭い剣閃を描くも、剣の一撃を与えることなく只、空を切るだけだった。

ノアは攻撃を防ぐでも、受け止めて反撃をするでも無く、当たらないように回避を続けた。

やがて一降りを回避した後、後ろに跳んで身体を逃げさせた。

「ノイズ」

「『圧』」

ノイズが唱えた瞬間。

雫先輩に突然重い何かがのしかかったように、床に方膝を付いた。身体を立たせようとするが、背負ったモノが降るせず、動くことが出来なかった。

「良い支援だ。そのまま維持をしておくれ」

ノイズは舌を出したまま、黙々と頷いた。

「さて、招かざる客が来てしまったが今の内に事を済ませてくれ」
ノアの眼は俺に向いた。

言われて思い出した。

化物に糸、だったな・・・一連の出来事で完全に呆気に取られた。

「・・・少し静かにしてる」

妙な感じだ・・・

身体が軽い・・・

不安を感じない・・・

頭が透き通る・・・

気が付けば、両手を広げこの身体から多くの糸が伸びていった。

「・・・ほう」

「これがノア様の言った・・・」

「糸つてヤツ？」

こうして静かに糸が繋がって初めて気付いた。

・ 気のせいかもしれないが、身体に何かが流れ込んでいるような気がする。

何処か気持ち悪い感覚だが、記憶の為と考えたら気は幾らか紛らわせる。

化物を見ている内に、それらは砂になる訳でなく、気が付けば消えて無くなっていた。

「活動限界？・・・しかし一度にアレ程の大量消失が起こる筈が・・・」

栗先輩の言っていることはよく分からないが、先輩には見えなかったようだ。

「一つ断っておくが、ディスクードに活動限界という概念は存在しないんだ。」

「何!？」

余程の余裕があるらしく、腕を組んで補足をした。

「いや、本来なら生物と同様に捕食を繰り返しては活動を行い続ける筈なのだが、レンの糸に繋がると消滅する仕組みを知ってるからね。だから、ディスクードに時間経過の消滅は有り得ないのだよ」

視線が俺に移ったのが明白だった。

ポケットから携帯電話を取りだし、液晶の文字を眺めた。

「・・・そろそろ、だな」

「何がかな？」

パチンツ

携帯をポケットにしまい、ノアを見据えた。

「お迎えの時間らしい」

ノアの後方の、更に佇む貯水タンクに目を向けた。

「まさか・・・」

ノアもノイズも、タンクに振り向いた。

タンクには

誰の、物の影も無かった。

「嘘だよ！」

完全に虚を突いた。

俺はノイズ眼がけて体当たりを仕掛け、その小さな身体はコンクリートに伏せた。

「くうっ！」

同時に、雫先輩にのしかかっていた重りは外れたらしく、何も起きなかつた様に立ち上がった。

「雫先輩！」

雫先輩は手にしていた剣をノアに鋭く投てきした。

「隙を作り出し、狙う、か。即席にしては存外悪く無いが、惜しかったね」

が、ダーツよりも鋭利な刃は燕尾服の上腕部を掠め、通過した。

だが次はかわせるか？

「貴方と言えど、この奇襲は予測外でしょう？」

ノアは多少無理に回避して崩れた体勢で、顔を背後の声の方向に向けた。

ノアの眼に入ったモノは、大剣と投げられた剣の二刀で自身に襲い掛かるシオンの姿だった。

「馬鹿な・・・」

「失せろ、元凶め」

「おおおおおお！」

ザンツ・・・

両手の中の刃が、ノアの身体に深く刻まれた。

「一つ忠告と申告をしよう。」

ノアは二、三步後退し傷口に手を当てたまま、静かに佇んだ。

「待つて下さい！何故シオン・ストライトが此処に？」

怪訝に尋ねる雫先輩に、シオンが応じる。

「レンの書き置きの内容に添っただけです。「三十分後、もしくは執行者が現れたら、学校の屋上に来い」と。中々良い勘をしてますが、素直では無い性格の様で」

「下らない話しないで、速く洋兄を助けるよ」

シオンが微かな笑みを浮かべて俺を見ていることは、見なくても明確だった。

余計な一言のせいで、何か少し恥ずかしくなってきた・

けど、今はノアも動けないし、ノイズも困惑してる。

それに幸い、洋兄は気を失い、二人の顔を見られてない筈。

今しかない！

「シオン！洋兄を！」

フェンスに囚われた洋兄の手足に絡むワイヤーを、二つの白刃を走らせ身体を解放させると、力の無いそれはシオンに持たれかかった。

瞬間、

「『氷塊よ！』」

巨大な岩の様な氷が、シオンの頭上に現れた。

が、洋兄が持たれかかっている上、二刀流のせいで、満足に回避出来る状態じゃなかった。

まずい、間に合わない！

ダッ

後ろで何か飛び立つ音がした。

振り返って見てみるが、居た筈の雫先輩の姿が無くなり、そこにはひび割れた跡の残る床があるだけだった。

また視線を戻すと、
眼を奪われた。

雫先輩は手にした細身の剣で、荒々しい巨大な塊を、ほとんど一瞬にして十二分割にしてみせた。

文字通り粉々になった氷を、雨を凌ぐように大剣の刀身を上に向かせ、シオンと洋兄は防いだ。

一頻りの氷雨を凌ぎ、シオンの眼前に先輩が降り立った。

「礼は言いませんよ」

「結構ですから、その剣を返して貰えますか？貴女に黒鍵は酷く不似合いなので」

シオンは剣を軽く放り渡した。

大剣一つの見慣れたシオンと、二刀の黒鍵と呼ばれる剣を持った先輩。

剣を持つ騎士と修道女、奇妙な絵面だ。

「キサマらあつ！まとめて殺して

「ノイズ、待ってくれないか？」

ノイズの唇に指を当て、静止を促した。

「まさか私がこの場所全域の探知の魔術を消去させ、私に深く傷を負わせるとは・・・君達も素晴らしいが、それ以上にレン、君が解せない」

俺が？何故？

「君は自身の糸のせいで他人を拒むことを選んでいる筈なのに、これはどうなのだ？君は結果的に捨てることを恐れているのだよ。」

「違う！俺は・・・」

言葉が詰まる、出てこない・・・

「違うのかね？今の君は人を友として望まなくても、他人として捨てることを恐れている。望まずして無くても抵抗する。君は実中途半端、空気のように漂う様子が眼に浮かぶね。」

・・・そうなのか？俺は半端なのか？

「レン、耳を貸さないで下さい。」

「一つ忠告と申告をしよう。背負う業に対する君の自覚が少々薄い。君が嘘を吐くのは、都合良く望むモノを手に入れたいから？傷を付かない様に天秤を平行に保つ為？それでは何も得られはしない。」

「……………」

「これは申告だが、私はまだ先の様に君を導くつもりだ。私にはその義務がある。機会があればまた話をしようじゃないか。今度は二人で、ね」

「…言葉を返せる余裕が全く無い程、混濁していた。」

糸が鍵…

真実…

嘘の理由…

俺は一体…

「口惜しいけど、新たな調律者の気配を感じた。退かせて貰おう。」

「させません！」

「『圧』」

瞬間、俺達三人の身体に何か重くのしかかった。

これは…重力なのか！？

身体、いや全身が押し潰されそうだ…息がしづらい…

ノア達は、奥にある奇妙な図の中に入ると、図から眼が眩む程の閃光が瞬くと、そこに居たノア姿は消えていた。

「転送の魔法陣、の様ですね」

「執行を損ねましたが、あの深傷です。ノア本体は暫くは現れないでしょう。」

そうか、とにかく助かったのか…

けど気分が悪い…

俺の真実を知らないシオン、俺の真実を知るノア…

俺は誰にすぎれば良い？

俺は誰に就いて行けば良い？

俺は誰を信じれば良い？

誰でもいい、教えてくれ・・・

ただ満ちた月は、笑う様に俺を照らすだけだった。

「至急お願いします。」

その後、どうやってアパートに戻ったのか、全く覚えていない。少なくとも、シオン達の言う魔術や神具の類で無い事は確かだ。まだ八時半を越えたばかりの時間なのに、洋兄を連れたアパートの中は静かだった。

「これで一先ずの事を得ました。」

いつもの洋兄の部屋に運び、布団を被せた。

「大丈夫ですかレン？ 帰路では常に無口でしたが、ノアの事は気に留めないで下さい。」

「・・・分かってるさ。」

アレを気にするな、か。

他人事だから簡単にそう言えるが、これは俺自身の問題なんだ。

一瞬イラつきもしたが、そう考えると少し落ち着いた。

「申し上げにくいのですが、これからの夕餉は七人分用意してもらっても宜しいですか？」

何だ急に。

「誰か来るのか？」

「いえ、近頃ゆとりを持って食事を摂取していない上、魔力の幾分消費しましたので過剰に頂きたいのですが」

ちよつと待てよ。

今のシオンの言い回しで単純な計算すると

俺と洋兄で二人分、後はシオンで・・・

・・・マジかよ

グウウウウウ

・・・

「『いえ、やっぱり四人分程で宜しいかと』」

恥ずかしいのは分かる気はするが、俺を睨むな。

「七人分だろ？」 どうせ明日は学校休みで弁当要らないし、七人

分ならではの大作に挑みたかったからな。』大人しく待つてるよ」

「委細承知しました。」

正直、シオンが万全じゃないと俺も危ないからな。

冷蔵庫を開け、中の材料を見渡しながらメニューを考えた。

エビとレタスカ、たまにはエビチリでもいいか。

魚肉が多い！期限が近いヤツから・・・よし、サンマを焼こう。

牛肉しかない・・・こいつは生姜焼きだな。

バランスをを考えて野菜が必要だ。ゆで卵、トマト、レタスの残

り、ドレッシングでサラダにしよう。

少し冷えてきたし、味噌汁も作ろう。

念のため、ハンバーグと目玉焼きを作って終了だ！

「よし出来た！後は・・・」

炊飯器の蓋を勢いよく開いた。

ガタンッ

・・・・・・・・・・

パタン・・

しまった、思ったより少ない・・・

こうなったら・・・

ちやぶだい

卓袱台狭しと、エビチリ、サンマ焼き、生姜焼き、サラダ、味噌

汁、ハンバーグ、目玉焼き、炒飯、どれも多めの量で作り何処か豪

勢に見えたが

「非常に有難いのですが、見栄えに統一感が見受けられない様な

」

それは作り終えてから俺も気にした・・・

「家に有るものでこれだけ作れば、むしろ凄いなよ。」

「相違無いですね。ではお先に

「待て。食事の時は皆揃ってからだ。洋兄が来るまで待つてるよ。

」

「至急お願いします。」

手から箸を放す訳でも無く、俺を見たまま箸を動かしていた。悪意は無いが、急かしているのがよく分かる。

洋兄の部屋に入り、身体を揺すりながら呼び掛けた。

「おい洋兄。飯出来たから起きろお」

起きる気配が無い。

物凄い嫌だが仕方無い・・

一度部屋から出て、囁く様に呟いた。

「・・・義兄さくん」

ガバアッ

トントントントン・・・

ガラッ

「蓮!!今義兄さんって・・・?」

「『いや?』飯出来たから来てよ洋兄」

「・・・アレ?夢か・・・?」

洋兄は起きたからこれで良しつと。

その前に、さっきので一つ思い出したんだが、

「洋兄、神月の家はどうしてる?」

「・・・何この量?今日誰か来るの?」

聞こえてない、まだ寝ぼけてる・・・

別に今聞く必要は無いか。

振り返ると、シオンの上下する箸の速度が少し速まった。

「ヨウヘイ、至急お座り下さい。『折角の夕餉が冷めてしまいま

す。』」

自分が食べたいからって変に急かすなよ。

「レンも賞味なさっては如何ですか?」

「『色々あつて疲れたから、もう寝る。』飯は勝手に食べてくれ」

返事は聞かず、部屋の戸を閉めた。

一瞬布団に足を運んだが、今朝の事を思いだし、予備の布団が入った押し入れにそのまま広げ、そこに身体を倒した。

「天秤を保つ、か・・・」

長く嘘を言い続けると、時々自分の本音や理由が分からなくなる時がある。

何で俺は嘘を吐くんだっけ？

そんなことさえ、なんとなく思い出すことが出来ない。

そういう意味では、ノアの言うこと正しいのかも知れない。

孤独になりたいのに、記憶を取り戻したいのに、今の平穩に甘んじている。

手放すことを恐れている。

「何で俺はこんなに甘いんだ？」

・・・考えるのも面倒だ。もう寝よう・・・

intermission 4・5 「舞台の第二幕を開こうか。」

ある建物の、光の溢れる魔法陣の中から、ノアの一味は戻ってきた。

「ノア様！傷口が！」

「心配は要らない。私は容易に死なない身体でね。」

言葉の通り、ノアは歩を鈍くすることも無く椅子に腰を掛けた。足を組み、肩のアントワネット撫でながら呟いた。

「レンはまだ完全では無いらしい・・・」

哀感の漂う、物言いだった。

「ねえ、そろそろ教えてくれない？アンタとレンって、何か関係あるでしょ。」

一瞬、ノアは言葉を詰まらせた。

「・・・すまないが、まだ言えない。強いて言うなら、このカードの様なものかな」

床に落ちていた、クラブのエースのカードを拾いあげ、本を読み聞かせる様に言った。

当然、ノイズにその意味は伝わらない。

「何ソレ？全然意味分かんない」

「今はまだ知らなくて構わない。因みに、この事はアントワネットにも話してない。我慢しておくれ」

「はい、ノア様のお望みのままに・・・」

アントワネットはキスをする様に、くちほし 嘴を頬に軽く擦らせた。その様子に酷く嫌悪し、ノイズは眉を細めた。

「ああ気持ち悪っ。でさ、さっき調律者が来るとか言ってけどマジ？」

夢から戻る様に二人はノイズに顔を向き直した。

「そうそう、全くの事実だ。仮にあのまま戦闘を継続していたら、あの二人は始末出来ても後の調律者に・・・という可能性を僅かに感

じたのでね」

「今更調律者の一人くらい、アンタなら余裕でしょ？」

「いや違う。」

ノアは腕を組んで、雄弁に語りだした。

「実を言つと、二人の気配を感じた。確かに一人なら問題ないが、二人は少々厄介なのでね。恐らく、正体はあの双子の調律者だろう。」

「

「双子の……クラス・エイト第八位の調律者ですか？」

「ちよつと、私にも分かるように説明してくんない？」

不満を溢す少女。

「これは失敬。クラス・エイト第八位のみ、二人が同じ位に属する調律者が存在

するんだ。面倒なのが、実力は合わせて1ではなく、単体で1なのだ。意味は理解できるかな？」

ノイズは少し首を傾げた。

「ふうん……要するに一人でも強いんだよね？」

「そう言うことだね。さてと……」

ノアは一度言葉を切り、椅子からおもむろに立ち上がった。

「彼にはヒントは与えた。後の邂逅が楽しみだ……」

ノアの身体は月光に満ち、夜の中の月に小さく詠った。

「舞台の第二幕を開こうか。」

それから……

「あれ？誰も居ないね。やっぱり道を間違えたせいかな？」

「……今は痕跡を調べる事が先決だ。余計な口を抑える。」

「……はあ〜い」

月夜の学校の屋上で、青年と、彼よりは年端の無い女が佇んでいた。

女の靡く蒼い髪が、栗色の眼が屋上を徘徊していた。

同じ髪と眼の青年は、只一点の方向に足を運んだ。

「見る、転送用の魔法陣だ。恐らくノアはこれでこの場から退いたのだろう。」

「私達も転送してみる？」

「いや、転送先の陣が消去されている可能性が高い。むしろ、此処に来れない様に消去するのが最善だ」

「成るほど。けど私パス。」

ふん、と軽く鼻を鳴らすと、青年は魔法陣に手を翳した。すると、風に流された砂の様に陣は徐々に消えていった。

「さつすが。出来の良い兄を持つと助かるよ。ね、キラ兄様？」

「・・・厄介な妹は苦勞する」

「ん？何か言った？」

「・・・聞こえなかったなら別にいい。次に向かうぞ、ナギ」

「あ、ちよつと待ってよ、兄様！」

キラは待つ素振りを見せず屋上から静かに飛び降りた。

ナギはフェンスを蹴破り、忙しくキラの後を追った。

月は新たな運命を祝福する様に、一際金に輝いた。

「私の話も聞いてもらって宜しいですか？」

「ん……」

部屋の外から微かに射し込む光に当てられ、シオンは眼を覚ました。

広がる闇の外から不意に

「冗談じゃありません！」

アパートに響く様な、洋平の荒げた声が興味を引かせた。不躰と知りつつシオンは、戸に凭れ会話を聞いていた。

「確かに蓮は神月の名を口にしました。ですが、それだけで引き渡すなんて話が変わってます！」

感情的に携帯電話を握り、荒げた。

洋平は冷蔵庫からサイダーを取り出しながら、ただ電話向こうの相手の話を静かに聞いていた。

缶を卓袱台ちゃぶだいに置き、ピンを開こうとした時だった。

「それでは本人の意思を無視しています！大体、詳しい話もしないでどうして……」

シオンには会話は内容は然程さほど伝わっていないが、一つの確信はあった。

（話の核はレン、の様ですね……）

光へ更に耳を近付ける。

「……取り乱してすみません……私には、今のあなたが何を考えているのか、まるで分かりません。言えないのでしたらそれで構いません。ですが、出来る範囲で説明してくれますか？」

平静を戻した洋平はサイダーのピンを開け、一口喉を通すと強く言った。

「俺は納得したいんです」

静寂を漂うは秒針の足音、時折聞こえる缶の置かれる音、洋平の相槌……

十数秒の限りなく近い無音の中、

ゴトツ

戸に凭れた余り、シオンは音を鳴らしてしまった。

(しまった……しかし、戻ろうにもヨウヘイとの距離が……)

ガラツ

戸を引き、洋平はシオンと眼を合わせた。

口を開け、電話口に言った。

「ああ大丈夫ですよ。蓮が寝相で時計落としただけみたいですよ。」

洋平は自分の口の前に人差し指を立て、シオンに促した。

そして部屋から出て、シオンが寄り掛かる戸の反対側に座った。

「……アイツは多くは言わないから全ては知らないですけど、

一つはつきり言えますよ。」

洋平は柔らかに笑んだ。

「昔も今も、蓮は良い友達に恵まれています。ま、当の本人は自覚は無いですけどね。」

まるで自分の事のように、楽し気に言う洋平。

戸の裏側のシオン、彼女から溢れた感情は、洋平から言われた「今も」の友達として認められた歓喜だったが、

「トモダ……チ……」

それはむしろ、自身に対して向けたものだった。

「……連絡は以上です。では」

パチン

会話を終えて携帯電話を閉じ、洋平は立ち上がった。

背中をノックして、シオンに尋ねた。

「さて、どこから聞いたかな？」

「……ミツキの名を口にしました、の辺りからです」

「そっか。じゃ一つ聞いていいかな？」

「ええ。」

「ノア、つてヤツ知ってる？」

シオンは一瞬、硬直した。

（彼が何故その名を！？）

「・・・それが如何いかしました？」

シオンは動揺を表すことなく、平静に返事を返した。

「ほら、職員室で俺を攫った男が居ただろ？そいつがそう名乗ってさ。あの後屋上に連れてかれたみたいでさ、手首にワイヤーの跡がくつきり残ってるだろ？それからあんまり覚えてないんだけど、なんか蓮とか高梨が来て助ける夢を見たもんでさ。何か知ってると思つて」

「『私を知る由も無いでしょう。私達が見たのは倒れていた貴方だけです。』」

「・・・ま、それもそうか。だけど、個人的には問題はそこじゃないんだよな」

快活な洋平から、沈むような深い溜息が吐かれた。

「そのノアの顔と蓮の顔が一緒でさ・・・さつき蓮の顔を見たとき、思わず背筋が凍ったんだ・・・蓮なのに、俺はその時「殺される」って考えちまつたんだ・・・そんな事ある訳が無いのに・・・」

蓮に恐れを抱いた事が苦しかったらしく、洋平は懺悔の様にシオンに溢した。再び、時計の足音だけが部屋に木霊した。

「私の話も聞いてもらつて宜しいですか？」

静寂を破るのは、シオンの声だった。

「私もその昔、レンと同様友もない、むしろ、人間に対して、憎悪を向ける時がありました。それこそ、一切を討ち滅ぼそうと思えるほど・・・」

え、と意外そうな洋平の声が漏れた。同時に、何処か恐怖にも似た寒気が一瞬洋平に通り抜けた。

「故に不信、故に孤独でした。その様な性格はレンと類似してい

たと思います。ですが、私にはある出逢いがありました。彼女もまた自身の自答の為に旅をしていたのです。そんな彼女は私に言いました。」

シオンは、それを懐かしむように、楽しげに言った気がする。

「自身の存在は自身で決めれば良い、と。それを他人に認めてもらえれば良い、と。」

「他人に認めてもらう・・・」

「その彼女の言葉のお陰で、私は私自身として生きられるようになったと思います。立場も人種も全く異なるというのに、彼女とはその一度の出逢いだけで友人になれたと思います。」

シオンは立ち上がって、自身の布団の元に足を運ばせた。

「・・・ですから、自分をレン以外の何かと認めていない彼を、貴方がそう認めてしまったら元も子も無いでしょう？彼はキリシマレンです。そうでしょう？」

洋平は息を吐いたが、先ほどの溜息のものではなく、安堵と同様の安楽的な息だった。

「それもそうだな・・・俺がびびってちゃ意味無いな。ありがとう高梨、眼が覚めたよ」

洋平は勢いよく立ち上がった。

「さて、すつきりしたし、寝るかな。明日はゆっくり出来るし」

「？ 眼は覚めたのでしょうか？」

「あ、いや、そういうことじゃなくて・・・え〜っと・・・おやすみ！」

リビングの明かりを消し、部屋の戸を閉め、洋平は一切の返事を返さず、部屋からの物音は途絶えた。

対してシオンも、身体を寝かして布団を被せた。

真つ暗な天井を眺めながら、呟いた。

「今貴女はどうしています？シオン・エルトナム・アトラシア・・・」

「私の話も聞いてもらって宜しいですか？」（後書き）

ふう・・・

やっとTYPE・MOONな世界観な感じがしてきた気がする・・・

個人的にそう思い始めたこの頃・・・

そうこれは夢の中、の筈……

だが、聞くもの、見るもの、触れるもの 感じる感覚全ての質感が余りに現実のモノと少しも変わらない気がする。あまりもリアリティーに感じる……

眼が覚めてしまえば夢の感覚なんてほぼ覚えていないが、多分これは違う……

それらに現実味は無い筈なのに……

無意識に、後退りをした時だった。

その足の側から、黒い何かが通過し入口に入った辺りで止まった。街灯に照らされたその正体は、只の一匹の黒猫。首に黒いリボンを巻かれているところを見ると、誰かに飼われているのだろう。

黒猫は奥に進みながらも、頻りに振り返りその度に俺を見た。

根拠は無いが、

「……呼んでいる？」

ような気がした。

アレが畏である可能性が高いかも知れない。けど、不思議な事に、あの猫の眼から悪意も敵意も感じない。

「……いや、仮にノアだったとしても殺される心配は無い筈だ」

入口を入り、闇に溶けていく黒猫の後を追った。

不思議な事に猫は無造作に走るでもなく、俺との距離を合わせて歩いていた。

やはり、案内されているらしい……

十数秒……いや、数十秒……もしかしたら、数分は歩いたのかも知れない。

過ぎる時間がやたら緩やかに感じた気がして、同時に一瞬にも感じた。

やがて、一際広い場所に辿いた。

黒猫は途端に足を速めた。

眼で追って初めて気が付いたが、ベンチに一人、人影が存在した。

それは白い長袖にスカートと言うひどく簡素な服装で、遠くから見ても街灯が映す金髪と朱い瞳が印象に残る女性だった。

「ありがとうねレン。無茶なお願い聞いてもらって。」

レンと呼ばれた一（偶然なのか俺と同じ名前の）黒猫は女性の膝元に座り、柔らかい手付きで撫でられていた。さて、と言葉を放ち、女性は俺を見て言った。

「少しお話をしましょう、蓮？」

魅入られたみたいに、自分の身体が一人で女性の元へ動いてしまっ

まう。恐怖はまるで無い。それとは別に、緊張が離れなかった。

一人分空けて隣に座ると、女性は口を開いた。

「初めまして。わたしはアルクエイド・ブリュンスタッド。長いからアルクエイドでいいわ。一応、真祖って区分される吸血鬼よ」

アルクエイドは、無邪気な笑顔を俺に向け、そう名乗った。

そうだ、思い出した。

確か美咲町には吸血鬼が出るって噂話が

・・・吸血鬼？

嫌い？

吸血鬼が血を嫌うのか？

「その話は長くなるから今は置いておくけど、今は貴方に重要な話があるから来たの」

「重要？重要も何も、初対面でそんな事分かるな

「詳しくは言えないけど、遠くない未来、貴方は選択を強いられる」

アルクエイドから唐突に出た、未来の話。当然、信じきれぬ訳が無い。

「未来？選択？」

だが、嘘を言っている様にも見えない、何も無いにしても聞く価値はありそうだった。

「ええ。一つは永遠の罪を背負つか、一つは限り無い罰を飲み干すかの、とても重要な二者択一。貴方は毒の果実か、平穏な水を口にしなければいけない。」

正直、アルクエイドの言っている事はよく分からないが、それに嘘が入っていないことを理解した。

けど、言葉が上手く出て来ない・・・

それに対して、俺は何を言えばいい？

「・・・知ってるなら教えろ！俺はどうすればいいんだ！」

「世界は貴方に答えを教える程優しくはない。仮に教えて貴方が実行しても、それは貴方の意志ではない。本当の困難は、自分自身が悩み、決断し、実行しなければ伴う結果は付いて来ないわ。」

「つつ・・・」

悔しいが、コイツの言う通りだ。

だが一つ気に掛かる。

「何故俺にそれを伝える？答えは教えなくても、ヒントを出した時点でお前も随分優しい奴だぞ？」

「んー・・・貴方が選択を誤る事で悲しんでほしくないから、かな？貴方って妙に志貴に似ているし」

シキ？

「けど一つ、絶対的に違うのは、貴方は志貴みたいに救う人が居なかったから、歪んでしまったみたいだけど・・・けど大丈夫。貴方もきつと救われる」

多分、アルクエイドは親切で言ったつもりだけど、それが少し刺さった。

「歪んでる・・・か」

気が付けば風は止み、木々のせせらぎが鳴るだけだった。静寂の中、

「なあアルクエイド、一つ聞いていいか？」

自然と口を開いていた。

「俺が死ねば、誰かが救われるかな？」

アルクエイドはベンチから腰を浮かせ、空白の一席を詰め、俺の隣に移動した。

「私には目的を持って生まれているの。それは貴方・いえ、人間にも同じ事が言えると思うの。だから、蓮は死ぬ為に生まれてきた訳じゃない。少なからず、生きていくことで未来は変わる、そう思うわ」

「そうものなのか・・・な・・・」

よく聞いてみるとコイツの声、何だか落ち着くな・・・少し安らいだ気がする・・・

「あ、わたしはそろそろ行くね。あとこれ」

アルクエイドは俺の手を取り、乱暴に何かを握らせた。

「志貴がね、『コレには御縁があるように、て意味がある』って言うてたからわたし用意したの。蓮にも、あるといいね。」

掌を開けると、少し錆びれているが確かにそれは五円玉がある。

「お守りとして取っておくよ。それにしてもアンタ、シキって人と仲良いんだな」

「ま、まあ！？当たり前じゃない？わたしと志貴よ！？」

別にならかった訳じゃないが、意外な事にアルクエイドは恥ずかしそうに語り出した。

吸血鬼もこんな顔をするのか・・・

「あんたの忠告、肝に命じるよ。それじゃ」

「わたしも蓮と話せて良かったわ。暫く観察させてもらうからね。」

「

にこやかに手を振るアルクエイド。

「待て！それって・・・」

パチンッ

その直後、照明が落ちたように、視界が閉ざされた・・・

「……ん……」

ぼやける視界が明け、重い身体で押入れの戸を開けると、いつものアパートの一室が何事も無く広がっていた。

「やっぱり夢だったのか……」

天気は快晴、窓の外からの陽の光が眩しすぎて嫌にな……

「……ん？」

一瞬しか見えなかったが、今外に黒い猫が居た様な……

……まさかな

全身の意識の感覚が覚めてきたころ、右手の固い触感に気が付いた。それを確認すると、

「……それでも無いらしいな。」

少し錆び付いているが、よく見るとちゃんと輝きの褪せていない『御縁』だった。

chapter 5 「・・・さて、行くか」

トントントントントントントン・・・

珍しく台所から包丁の音が聞こえてくる。何が珍しいのかと言うと、俺以外の人間が台所を使うことがほとんどないにも関わらず、自分の寝室からその音が聞こえる。

今日は休日。誰か来るような予定も入ってないし、洋兄は料理が出来ないからその可能性も無い。なら、誰なんだ？まだ重い身体を無理矢理起こして部屋の戸をずらす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それはどう説明した方がいいのか。いや、説明そのものは至極簡単だ。

シオンが台所に立ってレタスを微塵切りしている。となりの小さな鍋に味噌汁を弱火で熱してある。

本当に、それだけの行為なのだが、違和感を通り越して何を言えばいいか分からない。

「・・・おや、目が覚めましたか」

言葉を選んでみると、シオンはこっちの気配だけで気付いたのか、振り返ることなく言葉を投げる。それを合図に、反射的に俺は言葉を返す。

「・・・何してるんだ？」

しかし、それはひどくありふれたものになった。

「なになって、朝餉あさけを作ってるようには見えませんか？」

「いや、そういうわけじゃなくてな。お前がそういうの出来るって思わなかったから単純に驚いてるだけだよ」

「ふっ、見縊みくひってもらっては困りますね。わたしとて市井いちせいの子でしたから、これしきのこととはわけないですよ」

別に馬鹿にしてたわけじゃないんだが・・・しかし、

「気になつてたんだが、なんで味噌汁なんだ？」

誰から見ても異国の人間にしか映らない人間が台所で包丁を使い、ほどよいサイズの小さな鍋に入った味噌汁を熱する姿は、正に異様だった。

「え、朝餉と言いましたら味噌汁でしょう。それにわたしも食してみたかったので」

ほとんど願望めいていたが、面倒だから口にするのは止めた。

「む、なんですかその「ほとんど願望じゃないか」と言いたげな表情は」

「『。。。いや別に』」

完全に顔に出てたらしい、ここの確に言い当てられたら超能力とも言い様がない。多分嘘を吐いてもどうしようもないが反射的に言ってしまう。シオンは鍋に目をやり、コンロの火を止める。沸騰する前に止めるあたり、手馴れてる気がする。本当は日本人じゃないのかと疑ってしまう。

「さて出来上がりました。如何いかがしますか？」

よほど良い出来なのだろう、振り返ってシオンは満面の笑みで俺を迎える。いかが、と聞いてはいるけど、アレはどう見ても食べてほしそうな顔だ。

「いや、食べるけどな」

単純に腹が減ったから。シオンはマジで関係ない。

シオンは茶碗を手に取り、味噌汁をいれる。どうやら白味噌を使つたらしくいつも赤味のものとは違う。それを俺に手渡した後にシオンはもう一つ茶碗にご飯をよそって手渡してみせる。

「ん？」

どうしたことか、味噌汁の中身から和食とは思えない香ばしい匂いが鼻をかすめる。悪くはない、むしろ凄く食欲を促すような良い匂いだ。しかし、これは明らかな洋食向けな匂いがする。なんだ、この妙な組み合わせは・・・

「この葉っぱ、みたいのは？」

「セルフィーユです。一応こういったスープの類に合う香草ですがどうでしょう?」

「駄目だろ」

少し考えてみたが、はつきり言ってやっぱり合わないと思う。味噌汁だぞ、なんでハーブを混ぜるんだ? いつもなら不満そうに悪態を吐くだろうシオンは、自信あり気に胸を張る。

「兎に角、一度それを食べてみて下さい。それでも同じ口が話せますかね?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なぜだろう。ここで俺がこれを食べなかつたら、俺はシオンに負けたような感じがする。食べないことで俺が勝つという考えもあるが、ここで言うておかなければ後々どんな珍料理が出てくるかわからない。この水際で食い止めれば被害は抑えられるはず。だから俺は、敢えて茶碗を手に取り土俵に上がる。得るなら完全勝利・・・隣で得意げに笑むシオン。静かな休日の朝食。本当に久しぶりの日常の朝らしさを感じながら、味噌汁を一口すすする。

・・・・・・・・・・・・・・・・

コトッ

無言で卓袱台に茶碗を戻す。シオンは見ないようにする。だが、

「・・・ふっ、どうやら好評のようですね」

シオンはしてやったりと、目を弓なりに曲げる。クツ、バレてたのか・・・

「くっ、おまけに美味いから文句の吐けようもないのが悔しい・・・

でもこれじゃ和食が和食じゃなく・・・」

「レン、発想の転換ですよ。味噌汁という伝統的な和食とフランク料理の香草が出逢った、正に国境を越え、真なる友好を築いたのです。悪い話など何処にもないでしょう?」

「・・・とりあえず料理は認めるが、その馬鹿な例え話は止めようか。聞いていてまいちだ」

・・・シオンは分かっているんだろうな。今が俺に言える限界の悪

態であったことに。シオンは笑みを崩さないまま俺を眺める。

「とりあえず安心しました」

「・・・？ 何が」

突然、ほつつと安心したように息をこぼす。意味がさっぱり分からない。

「昨夜のことです。貴方にも負担が甚大だったでしょう。ですから今朝くらいはとわたしが見様見真似ですが、朝食を馳走していただこうかと思った次第で・・・なにせ他人に対しての調理は初めてでしたので・・・ましてやそれが殿方相手なんて尚更・・・」

シオンが話すにつれて目を逸らしていくと思ったら、段々声も小さくなっている・・・「なにせ」の辺りからほとんど聞き取れない・・・とりあえず俺を氣遣ったことだというのは伝わった、氣がする。

「・・・さて、行くか」

だが、受け取るわけにはいかない。受け取れない・・・

「ん、何処かお出掛けですか」

「『いや、ただの散歩。珍しく今日はちょっと暖かいからな』」

「おや、そうなんですか。それならわたしも」

「シオンは洋兄の話相手になってくれ。長くはかからないからすぐ戻る。」

ここで初めてシオンが不満そうに表情を険しくするが、そこから驚いてしまった。シオンは俺は制止するのではなく、

「・・・分かりました、ではお氣をつけて。何かあったら最優先でそちらに駆け付けましょう」

むしろ、笑顔で見送ろうとする。

・・・なんだ、機嫌が良さそうに見えるが何かあったのか？ いや、あんな昨夜のことで良いことなんか何一つないのは確実なはずだが・・・

「・・・ああ、よつぼど嬉しいんだな」

俺は卓袱台にある空になった二つの茶碗に目を向ける。

「どうかしましたか？」

「いや別に。じゃ、行ってくる。」

俺は玄関で靴の先を三度蹴り、扉の外へ出て行く。

「神月^{みづき}家、か」

昨晚洋兄が電話口で言っていた名を小さく口にして、開け放った扉をまた閉ざす。

「『天国はすごくいいところらしい。だって、行った人が誰一人帰ってこない』
昨晚の洋兄の反応・・・あれで確信した。
俺は神月家と関連している。

みづき、という苗字なんてけっこうありふれている。が、洋兄が
電話口で畏まり過ぎる態度に直感した。

そう、この町に佇む屋敷に家主、神月家。当てはまるものはそれ
しかない。細かい話は知らないけど、なんでも、昔この町を統括し
ていた名家中の名家だとか。けど、時代が進むにつれて衰退してい
き、現在ではシンボルのような存在として屋敷がある、という・

「ふう・・・ここか」

個人的な難としては、その屋敷はそう遠くない場所にあるもの、
その道中の坂道が長つたらしいから、体力のない人へここは心臓破
りそのものだった。当然、ウチとは逆の方向にあるから通学でも使
わない道だから屋敷を目の前にするのは初めてだった。

「・・・マジかよ」

驚いたことに屋敷はまだ人がいるように、庭も建物そのものもキ
レイに整えられていた。それどころか、花は植えられているわ、テ
ラスのようにテーブルが設置されてるわで、細かいところまで人の
手が行き届いていた。確かに、衰退したといつても人が住んでいる
のは当たり前かもしれないが、それでも屋敷には優雅な雰囲気か流
れていた。些細な疑問がいろいろと浮かんでくるが、俺の目的はそ
んなことじゃない。

「ここにあるはずなんだ」

何が、かは分からない。けど、ここには重要なものがある。現に
俺は今、既視感を感じている・・・

一度、辺りを見渡すと柵の一箇所が草木の深い場所があった。俺

は柵を昇って屋敷の庭に降りる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思いの外拍子抜けだった。よく分からないけど、なにかしらの防犯装置が働くでもなく番犬が現れるでもなく、単純になにも起きなかった。といつても、こつちの方が好都合なのは当然だけど。人がいないことを確認して草むらを抜けようとしたとき時だった。

気がつけば、さつきとは別であるうほとんど目の前のテラスに一人の少女が小さなティーカップを口に当てている。

それは正に優雅な光景だった。その容姿と朝の空気が合わさってか、午後に息うお姫様のようにしか映らない。

しかし驚くことに、そう離れていない距離にも関わらず少女は力ツプを指にかけたまま座っている。

(まさか、気付いていない・・・?)

とにかく俺は、身を潜めたまま少女が立ち去るの待つことにする。

「『天国はすぐいいところらしい。だって、行った人が誰一人帰ってこないのだから』。」

少女はティーカップに一度の口をつけた後、鈴のような音色の声で言った。

「誰が言ったのかも分からない言葉にも関わらず、それは確かに後世までに格言として刻まれている。果たして、天国とは本当にいい所なのかしら?」

少女はティーカップを手にしたまま、饒舌に哲学を語りだそうとするそばで、

「ちよつとおー！またこんなところにいたんですか!」

もう一人、家政婦の人だろう、給仕服を着た女性が少女の前に現れる。随分探していたのだろう、身体をだるそうに前にかがませて大きく呼吸をしている。

「あら、どうかして?」

「あら、じゃありませんよ。また勝手に部屋からいなくなっただけだと思っただらこんなところで食事と言えない食事をして」

家政婦に説教されているはずなのに、少女は涼しげにカップに口をつける。

「心配は要らないわよ。ここに立ち寄る物好きなんてそうはいないわ。だからわたしのちょっととした哲学に付き合ってくれるかしら？」

「絶対イヤです。一般人相手にそれは拷問なんですよ？勘弁して下さい。」

「はあ、仕方ない。それはそうと・・・」

少女はティーカップを一度置いて、妖しく笑んだ。

「そんな場所においても退屈じゃなくて？闖入者さん？」

「はい？」

瞬間、背筋が凍った。家政婦の言葉はまさに今の俺の心境だった。少女は俺の隠れていた茂みに目を向ける。その妖しく笑う視線は、俺が少女に向けていた視線とぶつかる。その直後に、何かに身体を引っ張られるように少女へと飛び出していく。

「わつとお！」

「痛うつ・・・」

バランスを崩した身体は少女に頭を下げる形に、倒れこんでしまう。今のは一体・・・？

「不法侵入という言葉くらいはご存知でしょう？言い訳を聞かせてもよろしくて？」

少女は不敵に笑みを浮かべながら俺の眺める。正直言うと、明確の根拠もなく、ただ自分自信の記憶のヒントになるかもしれないから入っただけのことだった。が、そんなことを話したところで相手にされるはずもなく、信じるはずもない。

それに、今俺が桐嶋蓮だと気付かれれば面倒だ。少なくとも、電話でのやり取りでは俺が中心だった。今だけはバレたくないし下手なこととも言えない。

「どうしましたの？沈黙は不当なもの見なしますが、いいのですか？」

「・・・ああ。確かにこれはただの不法侵入だ。好きにしてくれ」
相手は女二人。にも関わらず、切り抜けるどころか逃げられる気が全くない。言い様のない感覚に俺は諦め半分に体勢を変えて地面に座り込む。

「ありま、これは意外な。ではお言葉に甘えてと」

家政婦がやや首を傾げながらも背中から縄を取り出しながら近づく。抵抗はしない。この家政婦ならともかく、あの少女に対してどこか寒気が止まない。俺は逃げるように目を逸らしていた。

「待ちなさい」

カチン、とティーカップを置いて少女は俺を眺めた。

「些末ですがもてなしをしましょう。上がってください」

「なに？」

「・・・はい？」

少女は実に清々しい笑みを俺に向ける。

「貴方は一体何を探しているのですか？」

「ちよ、お嬢様？一体どうされたんですか！？」

「どうもこうも、客人を持って成しを行うだけのことです。何をそう怪訝にするのですか？」

事実、少女の提案は不可解だった。

普通に考えても、家に不法侵入した人間を快く招くなんてどうかしてる。そう、飽くまで普通なら、の話。

『裏』があるから招き入れる。なんてことはない、簡単な心理だ。

「樹理。この客人の茶も用意なさい。」

樹理と呼ばれた給仕の少女は、小さく唸りながら屋敷に戻っていた。

「ふう、やっと静かになりましたね」

「おいあんだ」

少女は変わらず、優雅な手つきでティーカップを運ばせてから、空いた手の指先で、テーブルの面を軽く叩く。

「お話でしたらこちらでどうですか？そちらにいてもお疲れになるでしょう？」

そう言って笑む少女は、まるで挑発しているようだった。

・・・望むところだ。真意を知るにはうってつけの状況だった。

虎穴に入らずんば、てやつだ。俺は思惑通り、椅子を引いて、少女と向かい合う形で腰を掛ける。

「何を考えてる？あつたにとつて俺は」

「もちろん闖入者、ですよ。ですが、これは闖入者相手の待遇ではありません。貴方も感じていることでしょうか？」

柔らかく笑っているはずなのに、少女の笑みには朝の空気とは相容れない妖しさがあつた。その薄らな表情に、なぜか見透かされる気がしていた。

「極めて簡潔に言いますと、面白い、と思つたからです」

「面白い？何が？」

「貴方そのものが、です。」

・・・意味が分からない。

ティーカップが空になったのか、少女は持ち上げたカップの中身を見るなり「あら」と軽くこぼした。

「後で交換させなきゃ」

「誤魔化すな。何企んでる？」

「企み？人聞きが悪いですね。わたしは純粋な興味で貴方を招いたのですよ。」

悪事を認める闖入者さん、このようなこと機会に逢うなんて滅多にありません。多少なり興味を持ってしまつのも致し方ないでしょう？？」

凜然な態度を崩すことなく、少女はありのままに話す。

それでも、話すほど訳が分からない。

俺ならこんな妖しいやつ、茶を出すほどの招きをするどころか、即刻追い出すか通報する。こいつのしていることは、ただの興味以前に、言ってることがバカバカしい。

初対面だが、それが見え見えの嘘だつてことはわかっている。が、少女が笑みの奥に孕む考えを分かるすべが無い。

これ以上話すのは危ない気がする。

そう思うも、ヒントがここにあるのは確実なんだ。無理にこいつを無視して屋敷に入ると、本当にチャンス逃すことになるかもしれない。慎重になるんだ。

「・・・物好きなお嬢様だな。そんなことじゃいつか危ないんじゃないのか？」

「お気になさらずに、性分なので。それに、物好きはお互い様でしょうに・・・ねえ？」

・・・なんだ、今は・・・

声調はいたって普通だったのに、背筋が反応してしまった。言いようのない冷たい感覚を、感じてしまった。

「・・・なんのことだ」

「あら、思いの外飲み込みが早いんですね。少し意外でしたね。」
まさか・・・目的がバレてる・・・？

「正直言いますと貴方の事情は分かりませんが、どうやらわたしでは無く、この屋敷そのものに用があるようですね。」

「あんたも随分物分りが良くて助かる。だったら」

「わたしの興味はですね、貴方が屋敷に来た理由です。」

「理由？」

「いよいよ話が本題に入ったようで、少女は細い腕を組んだ。

「ええ、理由です。こんな古びた屋敷に来る人間と言うのは大抵、低俗な強盗か名家の主の命を狙う殺し屋なんですの。」

ですが、貴方の目は人を拒んでいるのに何かを探しているのですよ。まるで迷子。

貴方は一体何を探しているのですか？」

少女が口を開くたびに、苛立ちを覚えてくる。

俺は目の前の少女との会話は全くの初めてのはずだ。なのに、なにかを分かり切ったように、俺のすべてを知っているような凜然とした口調が、苛立たせる。

「理由を教えてください、こちらとし」

「黙れ！」

言葉を遮らせるためとは言え、声を上げすぎた。

わずかだが小鳥の声が聞こえていたのに、これがきっかけで静寂に変わってしまう。

一瞬、少女の表情が強ばったように見えたが、気のせいだろう。こんなやつに限って。

「・・・帰る」

「え、ですが」

「『用は済んだんだ。』俺はもう」

「・・・待つて下さい！」

その一言は、俺が少女に抱いていたイメージを崩した。

それは、今までの落ち着いたものではなく、絞り出したような、弱々しい感情が見えるものだった。

「・・・気に障りましたなら謝罪します。」

「苛立つてる理由が分からないのに、か？」

「はい」

何故だ・・・？何故こいつは・・・たかが知らない人間のためにそんな顔が出来るんだ？

「・・・悪かったな。バカみたいに声だして。」

「いえ、こちらこそ軽率でした。・・・とは言っても、原因が分からないの仕方ないことですが」

少女は一つ呼吸を置いてから、元の平静な態度に戻る。さっきの弱々しかつたのが、別の人間が演じたようにしか見えずつわすかに戸惑ってしまう。

「では、貴方がよろしければこの屋敷を案内致しましょう。もちろん樹理も同伴させますが」

「は？」

少女はこつちの思考を見ていないのか、突飛な提案を出した。

「言ってることが本当に滅茶苦茶だな。訳が分からん。」

「先に言つたように、興味があるからですよ。もつとも、樹理もただの使いじゃないので、しでかした時の対処も万全ですわ。それでいかがでしょう？」

「ああ、別にいい。ただ見に来ただけだからな」

俺にとつては、この中に入られればそれで良かったが、意外な流れで公認されるとまでは想像すらしてなかった。見張りがいようが大した問題はない、こいつの言うように、正直盗みには興味はない。

「お嬢様、用意しまし」

「あら樹理、ちょうどいいわ。この客人に屋敷を御案内してあげなさい。満足されるまで、ね」

予想通り、給仕は微妙な表情で少女を一瞥する。

「あの、じゃこれは」

「歩きながらも飲んでいただいでいいでしょう。わたしはここにいますので」

給仕が口を開こうとしたが、何かを言い止めて、片方の手に持ったカップをテーブルに戻した。もう一方のカップを俺に差し出す。

受け取らないことを考えたが、給仕は気さくにカップの取っ手をこっちに向けている。

少し迷って、カップを受け取った。

「ではでは、屋敷をご案内しちゃいますね。」

給仕は意外に速い足取りで、屋敷の正面へと向かう。俺は遅れなようにとその姿を見失わないように駆けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1764j/>

MEMOR'OOTs

2011年8月27日03時15分発行